

教会学校教案誌

2008.4.5.6月号



No.29

日本キリスト改革派教会
中部中会日曜学校委員会

2008年4～6月カリキュラム（第29号）

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第1年—
子どもカテキズム参考教理問答

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参考教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
単 元 の 目 標			
4月6日 進級式	人生の目的……礼拝	問1	ウ小1、ジュネ1
		ヨハネ17:3	
神を知り、愛して礼拝するところに、人の真実の命がある。礼拝に生きよう			
13日	神の栄光をあらわす	問1	ウ小1、ジュネ1
		ローマ11:36－12:2	
神のものとされていることを喜んで、神に自らをささげて生きよう			
20日	救いの喜び	問2	ウ小34
		ルカ19:1－10	ルカ19:5
主がわたしたちを捜し求めておられる。主イエス・キリストとの出会いを喜ぼう			
27日	神の子の喜び	問2	ウ小34
		ヨハネー3:1	ヨハネー3:1b
神の子と呼ばれるほどの神の愛が注がれていることを感謝しよう			
5月4日	霊と真理による礼拝	問3	子15
		ヨハネ4:1－26	ヨハネ4:23
主イエス・キリストを土台とする礼拝、霊と真理による礼拝をささげよう			
11日 聖霊降臨祭	聖霊降臨祭・教会の誕生	問3	子65
		使徒2:1－13	使徒2:11
聖霊が注がれた教会に結び合わせられていることを喜び、共に生きていこう			
18日	神と人を愛する（一）	問4	子40、ハイテ4
		ルカ10:25－37	レビ19:18b
神の愛によって愛する幸いを与えられている。神と人を愛する愛に生きよう			
25日	神と人を愛する（二）	問4	子83、ハイテ4
		ルカ6:27－36	ヨハネー4:18a
敵をも愛する神の愛を知ろう。わたしたちは、その愛によって罪赦されている			
6月1日	神の御言葉	問5	ウ小2, 3, 89、ウ大2, 3, 155
		テモテ二3:14－17	テモテ二3:15b
聖書の御言葉によって、神は今も語っておられる。御言葉の恵みに生きよう			
8日 花の日	愛の手紙	問6	ウ小3、ウ大3－5
		使徒8:26－40	使徒8:35
聖書はキリストの福音を告げ知らせている。神の愛と福音を聞き取ろう			
15日 父の日	霊なる神	問7	ウ小4
		詩編139:1－10	詩編139:5
神は霊であり、あまねく統べ治めておられる。神との交わりに生きよう			
22日	唯一の神	問8	ウ小5
		コリントー8:1－6	コリントー8:6
真実の神はただお一人である。偽りの神々をしりぞけて生きることに立とう			
29日	生ける神	問9	子46、ウ小5
		イザヤ44:9－20	イザヤ44:9a
真実の神は今も生きて働いておられる。まことの神を仰いで、依り頼もう			

も く じ

2008年4・5・6月カリキュラム	
ま え が き	相馬伸郎 4
巻頭説教	小峯 明 5
日曜学校・教会学校訪問	
岐阜加納教会教会学校の紹介	小峯 明 9
諸教派の教会教育事情	
大韓イエス教長老会（高神）	金 起 泰 12
本誌の基本方針	相馬伸郎 17
自由募金のお願い	20
聖書研究・説教展開例・分級展開例 21	
4月 6日	22
4月13日	30
4月20日	38
4月27日	46
5月 4日	54
5月11日	62
5月18日	70
5月25日	78
6月 1日	86
6月 8日	94
6月15日	102
6月22日	110
6月29日	118
いのちのパン（こども聖書日課）	126
2008年7・8・9月カリキュラム	141
2008年度年間カリキュラム	142
執筆者よりひとこと・あとがき	144

まえがき

相馬伸郎（本誌編集長、中部中会日曜学校委員会委員）

お手元に第29号をお届けすることができました。私どもに志を与え、これを実現し、支え続けていてくださいます神に栄光がありますように。何よりも、この働きの同労者に他なりません読者の皆様に感謝いたします。

さらにまた、執筆奉仕者の皆様の皆様に心から感謝いたします。日々の忙しい生活のなかで、どれほどの尊い犠牲が捧げられていることでしょうか。加えて、少しでも安価にと、発送業務を担っていて下さる信徒の奉仕者方にも感謝いたします。

さらに、敢えて、この働きをその中心で担っておられる編集部の同労者方にも、心から感謝いたします。かつてこの企ての発端について、記させていただいたことがあります。木下裕也牧師と私が、名古屋駅前の小さな喫茶店の、小さなテーブルを囲んで協議したことが原点です。しかし、いかにビジョンがあっても、実際にそれを支えるに足る「能力」がなければ、これほどの文書を季刊で発行することなどまったく不可能です。神は、編集実務者として望月信牧師を与えてくださいました。

ほんのわずかの者たちが、激しい牧会伝道の現場のなかで、2001年に創刊号を発行して以来今日まで、一度も「事故」を起すことなく、継続できましたことは、神の恵みはもちろんのこと、彼らの、簡単な言葉では表わしたくないほどの労苦と犠牲とがあってのことです。このようなことを自ら記すことは、人間的に言えば、みっともないことかもしれません。信仰においては、「水を汲んだ僕」（ヨハネ福音書第2章）のみが知ることでできる幸いを放棄すること、あるいは「隠れたところを見ておられる父」を軽視することに繋がるかもしれません。しかしながら、七年間の歩みを刻み、なお安定した

弊誌の発行のために、同労者の皆様方にこの状況についてご理解くださればと願ってのことです。どうぞ、これからも祈りにお覚えください。そして、ご意見を、日曜学校教師としての「証し」をご寄稿ください。「教会学校教案誌」は共同の営みなのです。どうぞ献金によってもお支えください。そして、この編集部の働きを共に担ってくださる教師が起こされることも私どもの願いです。

最後に、名古屋岩の上伝道所の日曜学校の伝道と契約の子教育について、考えていることを、お分かちさせていただきたいと思います。

私どもの日曜学校の平均出席者は、毎年、増加してまいりました。幼稚科から中高科あわせて平均30名の子どもたちが来ていたのは、つい最近のことです。ところが今、地域の子らの減少を食い止められません。私どもの外に出る伝道の足らなさを思います。しかし、昨年の降誕祭において、ついに、10年余り通った地域の子が高校二年生で洗礼入会されました。

契約の子たちをどのように育てるのか、幼いときより、教会に来ている彼らの幸いは、言うまでもありません。しかし反面、教会の子としてのプレッシャーを感じることもあるでしょう。どのように導くべきか、果てしない課題です。しかし、いよいよ、思わさせられることは、幼子たちには、神の愛をリアルにおぼえさせることだと思います。徹底して主イエスの愛、神の愛を語り、示すことです。

新しい年度、共に、地域の子らへの伝道と契約の子らへの教育へと、召したもう主に従って、仕えて参りましょう。

Soli Deo Gloria! (ただ神の栄光のために!)

(名古屋岩の上伝道所宣教師)

「旅立ち」

—創世記12章1～4a節、マタイによる福音書1章1節—

小峯 明（岐阜加納教会牧師）

主はアブラムに言われた。

「あなたは生まれ故郷
父の家を離れて
わたしが示す地に行きなさい。
わたしはあなたを大いなる国民にし
あなたを祝福し、あなたの名を高める
祝福の源となるように。
あなたを祝福する人をわたしは祝福し
あなたを呪う者をわたしは呪う。
地上の氏族はすべて
あなたによって祝福に入る。」

アブラムは、主の言葉に従って旅立った。ロトも共に行った。

（創世記12章1～4a節）

アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図。

（マタイによる福音書1章1節）

夏休みや冬休み、春休みに、家族で旅行に行かれる方も多いと思います。あるいは、お祖父さんやお婆さんの家や、いとこたちの所に泊まりに行かれる方もあるでしょう。学校でも、野外学習や修学旅行の計画があると思います。旅は、計画することも楽しいことです。電車や新幹線の時刻表をみたり、今ならインターネットでいろいろと検索したり、旅の本を買って調べたり、持っていくお菓子を用意したりと家族で話し合いながら準備をします。そして切符を買い、宿の予約をしてその日を待ちます。出発の日には前の晩からわくわくしてなかなか寝つけないかも知れません。忘れ物はないか、持ち物を点検し、そして、いよいよ出発です。わたしたちは家族やいとこたちと楽しい時を過ごします。海で釣りをしたり、泳いだり、朝早くから

夜まで一日中遊びます。

帰る日には、また来年来たいと思いながら、家に向かいます。そうです。わたしたちの旅はまた家に帰る旅です。

アブラムさんの旅は、しかしながら、家に戻る旅行ではありませんでした。生まれ故郷のカルデアのウルという町からの旅立ちでした。それは旅行というよりは引っ越しです。お父さんの仕事の都合で、引っ越しをされた方もあるかも知れません。新しい町に転居して、自分たちの住む家に移ります。それは旅行とは違い、その町での生活です。広い意味では旅かもしれませんが、その町で成長し、その町の教会に通って大人になるまでそこに住むかも知れません。アブラムさんの旅ももともとはお父さんのテラさんの意向であったかも知れません。テラさん

は、「息子アブラムと、ハランの息子で自分の孫であるロト、および息子アブラムの妻で自分の嫁であるサライを連れて、カルデヤのウルを出発し、カナン地方に向かった。」(創世記11:31)と記されています。この旅立ちは、12章1節には「主はアブラムに言われた。『あなたは生まれ故郷 父の家を離れて わたしが示す地に行きなさい』」とありますので、生ける神がアブラムさんと呼ば出したその呼び出しによるものかも知れません。アブラムさんは、月を神様として礼拝する偶像礼拝の中心地であったカルデヤのウルでの生活をやめて、生ける神様を礼拝するために旅立ったのでしょう。ノアの子孫にあたるテラさんとアブラムは、神様のことを代々伝え聞いていたと思います。今、かぐやという日本の月探査衛星が、月の周回軌道に入り、ハイビジョンカメラで月の映像を日本に送っています。アポロ17号が着陸した地点の映像や、月から見た地球の映像も見るができます。あの映像を見ますと、月が神ではなく、ただの岩石の固まりに過ぎない、ただの惑星に過ぎないことがよく分かります。アブラムさんは何千年も前に、月はただの星であって神ではないことを良く知っていました。

こうしてテラさんたちとアブラムさんはウルからカナンを目指して旅立ちましたが、ハランというところに一度住居を構えました。彼らにとって最初の引っ越しと言えるかも知れません。「彼らはハランまで来ると、そこにとどまった。テラは205年の生涯を終えて、ハランで死んだ」(創世記11:31b—32)とあります。

アブラムさんは旅の途中で、お父さんテラを亡くし深い悲しみを体験しました。その後で創世記12章ははじまります。「主はアブラムに言われた。『あなたは生まれ故郷 父の家を離れてわたしが示す地に行きなさい。』」神様の声のアブラムに聞こえました。神様がアブラムに語られたのが、カルデヤのウルであったのか、お父さんのテラが亡くなったハランであったのか

は正確にはわかりません。いずれにせよ、神様は、アブラムさんにハランに留まっていたはならないと命じたのです。生まれ故郷を離れ、父の墓所のある町を離れて生ける神様が示す地に行きなさい。この言葉によってアブラムさんは旅を続けました。

神様の命令に従うことは旅行に似ています。もちろん、それは夏休みの家族旅行とは異なります。帰る家はなく、新しい家を探す旅だからです。みなさんも今はまだ小学生や中学生ですから、お父さんお母さん兄弟姉妹たちと一緒に暮らして、近くの教会に通っています。でも、大学に進学したり、就職で他の県に引っ越しをするかも知れません。その時こそ、よく祈って、教会の近くに住む所を探してください。わたしたちはどの町に住んでも、教会を目指して旅をします。礼拝に向かう旅路です。そしてやがて成人して、好きな人が出来て結婚する日が来るかも知れません。いよいよ、生まれ故郷を離れ、父の家を離れる日が来ます。そのためにもよく祈って結婚のために準備してください。そして二人で教会に行ける人を相手に選んでください。アブラムさんがサライさんと二人で旅をしたように、わたしたちも夫婦で、そしてやがては家族で、教会に帰るのです。そのように見ますと、わたしたちが生まれて、そして成長して、結婚して家を離れて、最後はテラのようにどこかでお墓に入りますが、ずっとわたしたちは毎週の日曜日には教会に帰ります。主イエスのもとに帰る旅を続けます。それはわたしたちの人生という旅路です。そして、実は、わたしたちが毎週毎週、家から教会に帰る。職場や学校から家を経由して教会に帰る旅を続けるために、アブラムさんは、神様に呼び出されて、旅行を続けるように導かれたのです。

神様はただ、アブラムさんに「行きなさい」と言われたわけではありません。「わたしはあなたを大いなる国民にし あなたを祝福し、あ

なたの名を高める 祝福の源になるように。」とされました。アブラムさんとサライさん夫婦にやがて子どもが生まれます。イサクさんです。そしてイサクさんにも子どもが生まれます。エソウさんとヤコブさんです。そしてヤコブさんに12人の子どもが生まれます。人数が多いので、一人一人は書きません。こうして、子孫が少しづつ増えていきます。神様が祝福してくださって、たった二人の夫婦から、なんと、ユダヤ人という民族が生まれました。旧約聖書を読み進めて行くと、アブラムさんの子孫は、出エジプト記では、モーセさんと共に大勢の人々になっていました。そしてやがて、サムエル記になりますと、ついに王国を築くことになりました。ダビデ王とその息子のソロモン王の時代に「大いなる国民」になるのです。神様は、そのためにアブラムさんと呼ばれました。

けれども、神様の言葉はそれだけではありませんでした。3節に「あなたを祝福する人をわたしは祝福し あなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべて あなたによって祝福に入る。」と語られています。2節からの関連で言えば、アブラムさんは祝福の源になります。それは、アブラムさんの子孫、ユダヤ人だけに留まらず、「地上の氏族はすべて」アブラムさんによって祝福に入るのです。そのために、アブラムさんは、カルデヤのウルから呼び出されて、行き先も分からない旅に出ました。ですから、アブラムさんの旅は冒険でした。テントと家畜と、家財道具を一式携えての旅路です。何もかも、生活に必要なものをすべてかついでの旅でした。わたしたちの旅なら目的地がありますが、アブラムさんはただ神様の示す地に行く旅です。どこがそこだか分かりません。そこで、アブラムさんは、カナン地方に向かった最初の予定に従って、とにかく旅を続けました。もうお父さんテラさんのお墓に戻ることもない旅だったと思います。

そして旅を続けるアブラムさんはやがてカナン地方に入ります。その地方の真ん中あたりに来た時に、「主はアブラムに現れて言われた。「あなたの子孫にこの土地を与える」(創世記12:7)とされました。カナン地方がアブラムさんに示された目的地だったのです。

そして、実は、このカナン地方のベツレヘムという町で、このアブラムさんのずっと後の時代にイエス様がお生まれになります。新約聖書のマタイによる福音書の1:1には「アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図」と記されています。そしてこの系図の最後に、「ヤコブはマリアの夫ヨセフをもうけた。このマリアからメシアと呼ばれるイエスがお生まれになった。」と記されています。主イエスのご降誕のために、アブラムさんは、神様に呼び出されてカルデヤのウルから旅立ったのです。こうして、アブラムさんの子孫としてお生まれになった主イエスによって、全世界の人々は、神様の言葉を聞き、神様が今も生きて、わたしたちを主イエスによって招いてくださり、主イエスによってわたしたちを愛し、祝福してくださることを知ります。そして主イエスによって、わたしたちの罪は赦されて、神様の祝福を受けるのです。

アブラムさんの旅は、わたしたちの旅のようではありませんでした。それは、引っ越しに似ているかも知れません。けれども、行く場所の分からない出発でしたから、放浪に似ているかも知れません。けれども、目的のない放浪ではありませんし、自分探しや、自分がやりたいことを見つけたいとか、自分の経験を深めたいとか、自分のための放浪旅行ではありませんでした。実際、家族を連れてでは放浪はできませんし、一人旅でも結局最後は親の家に戻って来るしかありません。

そうではなくして、アブラムさんの旅立ちには、神様の呼び出しにより、神様の差し示す地に向けて、神様の約束を信じた旅でした。その

約束は、アブラムさんとサライさんご夫妻の時代だけでなく、ずっと歴史の先までを見通した約束でした。それは旧約聖書を実現させる約束であり、ついに新約聖書を切り開き、新約聖書を開始する旅でした。自分たちの時代だけでなく、遠い将来に向けての約束のための旅立ちでした。

旅行をすると、わたしたちは沢山のことを経験します。一人旅や、自分一人で、お祖父さんお婆さんの家やいとこたちの家に電車で行くだけでも、何か少し大人になった気分になります。わたしたちは今の自分の生活の中で、時々そのように家族や自分一人で旅行を楽しんだり思い出を作る旅を重ねます。でも、もっと大きな旅の途上にあるのです。それはアブラムさんの旅の目的であった主イエスに出会い、主イエスと共に歩む旅です。それはしばしば人生とも呼ばれます。今朝も、わたしたちは教会学校に帰って来ました。教会学校の礼拝に帰り、そしてまた来週の礼拝まで一週間の旅に出ます。この1週間の旅路を52回繰り返すと、1年です。1年52回の旅路を6回繰り返すと、小学校を卒業します。さらに、3回繰り返すと、中学校を卒業します。さらに、3回繰り返すと高校を卒業し

ます。このように、少しずつ、わたしたちは成長し、主イエスを知り、従う旅路を続けます。素敵な冒険だと思いませんか。やがて、大人になり、皆さんも、就職したり、結婚したりして、今度は、自分たちの家族を与えられて、その旅路を続けます。どこに住むのか、今はまだ何も分からないでしょう。それでも、人生、生涯という旅は続きます。でも、その旅の間、アブラムさんが用意し、切り開いてくださった、救い主イエス・キリストによる祝福を受けて、主と共に歩みます。教会学校は主イエスがわたしたちを旅の途中に招いてくださるわたしたちの帰る家です。わたしたちは今朝も、主イエスを礼拝するこの教会に帰り、そしてここから出掛ける旅を続けるのです。祈ります。

主なる御神。

わたしたちの日々の歩みは実は冒険でした。明日何が起こるかわかりません。でも主イエスはいつもわたしたちと共にいてくださいます。わたしたちの日々の歩みを祝し支えてください。教会のこどもたちをお守りください。主イエス・キリストの御名により祈ります。アーメン。



岐阜加納教会教会学校の紹介

小峯 明 (岐阜加納教会牧師)

1. はじめに

岐阜加納教会は、1923年にアメリカ南長老教会の宣教師と旧日本基督教会宮松治牧師によって、日本基督教会加納伝道所としてはじまりました。教会学校がいつからはじまったのかはよく分かりません。後に、伊達量平牧師が赴任され（1930年）、また1941年以後、現在地にあった美園幼稚園の会堂を礼拝等に利用していたので、園児たちやその家族にも直接間接の伝道がなされたと思います。美園幼稚園は南長老教会が経営していましたので、キリスト教主義の教育がなされていました。残念ながら、戦災で園舎施設が焼失したため、戦前、戦中の資料は有りません。戦後、平和が回復した後に、牧師館（1948年）が再建され、現会堂が新築され（1952年）、教会の礼拝と共に教会学校も再開されました。当時は、長老のお宅でも教会学校が行われ、教会と分校（長老宅）とで、100名以上の子どもたちが教会学校に集っていたと聞いています。

2. 現状

さて、伝道開始以来、86年あまりの年月を経て、戦後ももはや遠くなり、世代も変わりました。今、岐阜加納教会では、幼稚科から小学科、中学科、高等科まで10数名の子どもたちと共に礼拝と分級（学年別クラスでの聖書の学び）を行っています。

礼拝は9時から30分、分級は9時30分から10時までの30分です。礼拝では、旧約聖書から新約聖書までを6年間程かけて各教師たちが順番で説教の奉仕をしています。幼稚園から集いはじめ、12年ほどかけて、聖書の全体を、創

世記からヨハネの黙示録までを2回聞いて、高校生になると信仰告白準備会に出席して、信仰告白することを目標にしています。

月一度、礼拝後に、読み聞かせの集い「ロバの子文庫」を会員の奉仕によって行っています。2007年は、月一回、礼拝後にカリク宣教師による中高校生バイブルクラスを行いました。

3. 一年の行事計画

2007年は毎週の礼拝以外に以下のことを行いました。

1月7日（日）、新年礼拝

その後、お楽しみ聖書カルタ等をして遊びました。

4月1日（日）、新学級編成

幼稚科、小学科1～3年、小学科4～6年、中学科、高等科。

4月8日（日）、復活節礼拝

前日に教師と子どもたちとで、ゆで卵をつくり、ラッピングします。礼拝で一人二個ずつ卵をもらいます。卵は命を象徴するものとして、こどもたちは喜んで食べました。

5月13日（日）、母の日礼拝

母の日には、分級でお母さんあてのカードを作成しました。

6月10日（日）、花の日礼拝

花の日には、礼拝後に近隣のお宅と派出所、岐阜駅等公共の施設、入院療養中の会員の方たち、自宅療養中の会員の方たちに花を届けました。



夏期学校



クリスマス子ども会の案内(表)

8月11日(土)～12日(日)、夏期学校

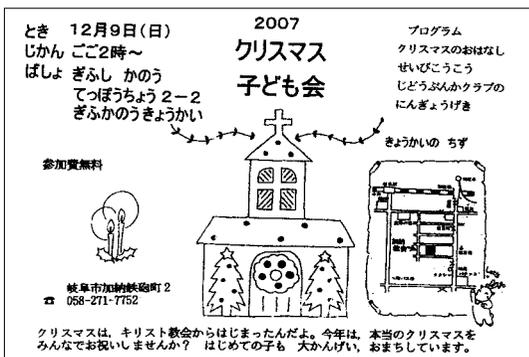
子どもたちがとても楽しみにしている夏期学校を根尾のクリスチャン山荘で行いました。毎年、台風や雨等の自然の状況によって柔軟にプログラムを計画しています。増水して根尾川で泳げない時は、本巢市民プールで遊びます。また根尾川で泳げる時は、親が安全対策に注意して川で遊びます。しかしながら、川遊びは常に危険が伴うので、今後の課題でもあります。子どもたちは何といても川遊びが大好きなので、安全対策に注意して遊びつつ、学びつつと思っています。川遊び、プールの後は、礼拝と分級をプログラムに従って行います。夜はバーベキューとキャンプファイヤーとゲームと花火で楽しみます。翌日は、朝の礼拝を現地で行います。その後また分級や工作、川遊びをします。

9月16日(日)～17日(月)

中会信徒研修会にて小学科を担当しました。ノアの箱舟を主題として学びと工作を行いました。

12月9日(日)、クリスマスこども会

毎年12月の第二主日の午後、クリスマスこども会として、近隣の小学校にチラシを1000枚程配布して、教会学校の伝道集会を行っています。第一部は礼拝、第二部は、ここ数年済美高校の児童文化部の方



クリスマス子ども会の案内(裏)

たちによる人形劇や工作を行っています。多い年は、岐阜加納教会の関係者も含めて100名近く参加されたこともありましたが、今年は親御さんと関係者も含めて50名の出席でした。子どもたちはチラシを見たり友達同士で誘い合ったりして25名の出席でした(新来者14名)。毎年来られる子どもたちもあり近隣では定着した集会になっています。今年は特に1～3年生が多く、可愛い子どもさんたちと福音を分かち合い、楽しい時を過ごしました。

12月23日(日)、クリスマス礼拝

愛餐会でクリスマスページェント。

毎年、夏が過ぎるとクリスマスに向かう準備を始めます。例年10月頃から、クリスマスの愛餐会で披露する降誕劇の練習をはじめます。今年は人数が少なくなっているので劇はお休みにして、クリスマスペー



クリスマスページェント

ページェントとして、降誕の聖書の朗読と賛美を交互に行いました。また中高生は数年前より、ハンドベルを購入してこの時にハンドベルの演奏を行っています。毎週日曜日の分級の時しか時間がないわりには、本番に強くなるとか曲になっています。聖書朗読も、各自がそれぞれの箇所を担当して、大きな声で朗読がなされました。

4. 教師会

月1回、事務連絡を中心に行っています。十分な時間が取れずに、なかなか学びの時間が取れないことが課題です。

5. 課題

課題は沢山あります。教師の増員も祈り続けていますが、信仰告白された高校生が続けて助手として奉仕して下さり、主に感謝しています。出席者は契約の子が中心で、クリスマス子ども会等伝道集会をこつこつと続けています。



ハンドベルの演奏

時々契約の子たちの友達が集ってくれますが、なかなか定着はしません。中学生以上の方たちへの伝道のためにカリク宣教師と共にいろいろと試行錯誤を繰り返しましたが、カリク先生が帰国されましたので、今後の課題です。現在、数年前に比べて、中学生や高校生は、子どもたちの成長によって増えましたが、幼稚園や小学生は減ってしまいました。子育て中の会員が多いので、今しばらくは、契約の子たちで賑やかですが、子どもたちへの伝道と共に、子育て中の方たちへの伝道を教会全体でも考えたいと思っています。

不十分なことは山ほどありますが、それでも、主の憐れみによって子どもたちが与えられ、またその友人たちも時々は礼拝に集ってくれることは喜びであり感謝です。子どもたちが、幼い時から、造り主なる神を知り、崇め、また救い主イエスを信じて、主に従う者となるように祈りつつ奉仕しています。

大韓イエス教長老会（高神）の教育院

整理：金起泰（浜松伝道所協力宣教師）

今回は、私たち日本キリスト改革派教会と協力ミッション関係にある韓国の大韓イエス教長老会（高神）總會の下にある「教育院」を紹介させていただきます。同じ改革派神学と信仰を持っている教会がどのように契約の子を教育しているのかを学んでいきたいです。教会の使命あるいは任務の中で、契約の子の教育は最も大切なことではないでしょうか。この資料を通して、私たちも契約の子の教育のため、熱心に取り組んでいきたいです。

1. 教育ビジョン

1. 教育理念

改革派精神に基づいてウェストミンスター基準（“Westminster Standards”一信仰告白、大・小教理問答、教会政治及び礼拝指針）に従って神様を愛し、隣人を愛するキリスト者を養成する。

2. 教育目的

聖書を教えて、

- 1) 三位一体の神様を正しく知り、愛し、また神様に仕えるようにする（礼拝的人格者）。
- 2) 人を神様にかたどられた存在として理解し、愛し、助け、また彼らにキリストを宣べ伝えるようにする（人和協同的人格者）。
- 3) 自分の存在意義と特殊な使命を自覚して、自分の立つところで管理者として忠実するようになる（文化的人格者）。

こういうキリスト者を養成して、信仰の正統と生活の純潔を兼備するようにする。

3. 教育政策

はじめに

大韓イエス教長老会總會は、初期から教育することに多くの関心を持ってきた。信仰教育を大事にする改革派教会の伝統に従って、教育と訓練、文書と多様な方法を通して信仰教育に尽

力してきた。その結果、この地に改革派神学と信仰を広げさせ、さまざまな領域で多くの人物を排出するようになったのは感謝なことである。

21世紀が始まり、私たちの教団はこれまでの教育的努力と力量を総合的かつ体系的に整理して、大韓イエス教長老会總會の教育指針を提供することにする。我が教団の教育政策を立案し、具現する、大事な課業を指導監督する總會と、教育政策の具体的な実践の場になる地域教会が、信仰教育の効果を極大化するため、どのように努力できるか、その具体的な方向を提示する。

1) 信仰教育の重要性

我が教団が、信仰共同体の教育的使命を大切に思わなくてはならない最も重要な理由は、何よりも「教育すべきだ」ということがまさに神様の神聖な命令に基づいているからである。旧・新約聖書には、教える教育的使命が特別に強調されているのを見られる。もちろん改革派教会の伝統と共に家庭、学校、社会生活の変化も信仰教育の重要性を認識させるのである。

2) 21世紀の社会及び教育環境の変化

キリスト教共同体の信仰教育は、社会的か

つ文化的環境と決して無関係ではない。人間は、いつも社会の中で住みながら、社会と相互作用する社会的存在である。信仰教育もその効率性を極大化するためには、信仰教育に直接・間接的に影響を及ぼす周辺社会と文化を正しく認識すべきである。ここには、世俗的人本主義、ポスト・モダニズム、相対主義と宗教多元主義、物質主義と快楽主義、知識情報社会、科学と神秘主義の混合、統一時代の到来などが、21世紀の社会的文化的特徴としてあげられる。

3) 21世紀の教会の姿

21世紀の教会の姿は、次のいくつかに要約できると思われる。霊性についての関心と歪んだ霊性追求、二元論的生活様式と祈福信仰、人本主義的価値観の受容、各個教会主義的傾向、教会の両極化現象と脱教會的現象の深化などである。

4) 我が教団教育の歴史と精神

我が教団は最初から神社参拝の罪を悔い改め、また教会刷新に力を注いだ。同時に伝統的な神学と信仰の継承が基になった。我が教団の教育理念と教育目的は、次の三つで整理できる。

①教育の二つの土台

聖書と改革派精神

②教育の二つの方向

信仰の正統と生活の純潔

③教育が志向する人間像

礼拝的人格、人和協同的人格、文化的人格

5) 我が教団の教育の方向

改革派主義の神学と思想の正体性を堅持しながら、21世紀の世俗的な波にもっと積極的に対処するため、我が教団の教育は、次のような座標を設定する。聖書的霊性の意味に

ついての正しい理解と実践、全人格的なキリスト者、伝統的価値についての認識、文化の変革者、教会の価値と重要性認識、共同体的意識の涵養である。

6) 各共同体がなすべき教育的な努力

契約の子のための信仰教育は、家庭、教会、学校そして社会など、キリスト教の信仰共同体の相互協同的努力が必要である。具体的な教育的努力のためのいくつかの提案は次のとおりである。

①家庭の信仰教育の責任

家庭礼拝、御言葉の黙想(QT)、祈祷生活、多様な教育活動に参加。

②教会の教育的な責任

教会の教育的責任の自覚、発達段階に合う教育クラスの設置、教育専門の指導者養成・招聘、教師訓練、教会の教育的条件の再整備、礼拝訓練、教育への財政の投入、教育施設の整備、教育行政の体系化、公式的な教育教材の使用、教育政策への関心。

③キリスト教学校教育に対するビジョン

公教育の人本主義的特性についての認識、ミッション・スクール(Mission School)のための祈りと支援、キリスト者教師のための祈りと支援、キリスト者教師の活動との連帯、キリスト教学校との連帯、学校教育への参加、キリスト教学校の設立のための祈りと努力。

おわりに

契約の子のための信仰教育は、神様の神聖な命令であり、教会の本質的な使命である。聖書は、等しく信仰教育の重要性を強調している。この教育の成否が教会の未来を決める試金石になる。

II. 教会教育

1. 「命の糧」

「命の糧」は、本教団の公式的な教育課程に名づけられた名称である。1967年、韓国教会で最初に教団の教材を発刊したときに名づけられた教材の名称が「命の糧」だったのである。現在「命の糧」の教育課程は、幼児部（3～5歳）、幼稚部（6～7歳）、小学一部（1・2年生）、小学二部（3・4年生）、小学三部（5・6年生）、中・高等部で構成されている。幼児部は一年2学期で、また幼児部から小学三部までは二年4学期で構成されており、中・高等部は基本課程と深化課程に分けて、おのおの24巻の主題別の教材で構成されている。

一つの例として、小学二部（3・4年生）は次のとおりである。

教材（小学二部）



1学期



2学期



3学期



4学期

2. 季節学校

1) 夏季の聖書学校

本教団は、夏季の聖書学校の教育課程として、「神様、イエス・キリスト、聖書、信仰、伝道と宣教、祈禱、教会、隣人」の八つの信仰概念を主題にして、8年周期で循環するものを用いている。このことは、普段の聖書の学びとは別で、一つの主題を持ってあらゆるクラスと一緒に信仰の成長を図るためである。

小学校の3・4年生の子どもは、1・2年生と比べてみると、理解力が早く、聖書の全体的な物語と連関性を理解し始める。そして救いの意味と契約の意味を理解し、それにあわせて学習が可能である。

教育目的は、契約の神様を正しく知り、また正しい関係を結ぶことにある。

- イエス様は、救いの約束に従って私たちの罪をお赦しくださるお方であられることを知る。
- 聖書を読み、従順に従う生活をする。
- 教会生活に楽しんで参加する。
- キリスト教的な精神で人と協力する。
- 創造世界に対する管理者としての生活を実践する。

2) 冬季の聖書学校

今まで教会は、季節学期を夏のみ実施して来た。しかし、年の仕上げ、また、年の始まりである冬にも、霊的 necessary のため、季節学期が要るということ認識し、2002年の冬から総会の決意で教材とプログラムを開発、発刊し始めた。この課程は既存の夏季聖書学校と差別化するため、「子ども弟子訓練」という全体主題の下で、年ごとに異なる主題で進行され、4年の循環課程である。

3. 区域教材

総会教育院は、教会内の区域の集いが御言葉によって霊的に成熟するため、区域教材を出版している。この教材は、御言葉を深く理解して、生活の中で直接活用できるもので、区域の人々が相互に生活を分かち合う交わりの場を作るた

めの、壮年の聖書の学びの教材である。この教材は教会で直接使えるように、「討論用」と「講解用」の二つを出版している。この区域教材は、2003年から4年間のカリキュラムで構成されている。



講解用



討論用 (リーダー)



討論用 (学生用)

III. 総会教師大学

総会教師大学は、教会学校の教師が自分自ら立つことができるように助ける教師教育の産室である。

- 多元化された社会と価値観に対応できる教師を養成する。
- 教える使命をもっとも適切に遂行する教師を養成する。
- 学生を愛する真実な心を所有する教師を養成する。
- 教会を有益させ、また教会教育の精鋭化のための教師を養成する。
- 生涯学び、また教える弟子道の実現のための教師を養成する。

IV. 総会聖書大学

総会聖書大学は、聖書を体系的に学べる信徒の御言葉の教育の場である。

- 聖書の真理を守り、福音を広く宣べ伝える信徒を養成する。
- 教会に霊的に資するため、準備された信徒

を養成する。

- 深い御言葉の黙想を通して湧き上がる喜びを回復させる。
- 御言葉の土台の上で神様の御心に従って生きていく力のある信徒を養成する。

V. 出版事業

1. 図書出版「命の糧」

図書出版「命の糧」は、韓国教会のための、大韓イエス教の総会教育院の出版機関で、『御言葉と生き方』、『教会と教育』、『教会と世界』の三つの分野の専門図書を刊行して、韓国教会の教育と信仰生活を支援する。個人と教会の敬虔のため、QT (“Quiet Time”、聖書黙想) 専門誌と教会の健康な教育のため多様な資料と書籍、また教会と世に向けての正しい世界観の定立のため、単行本を出版しようとする。これらのものを通してキリスト者個人が神様の御言葉によって生き、また韓国教会が神様に喜ばれる光と塩の健康な教会になることを目指している。

2. 『教会と教育』(書籍)

学問と現場をつなげる教会教育専門誌で

ある『教会と教育』は、17年間絶えず教会教育専門誌として韓国教会に仕えてきた。



2005春、夏号



2004秋号



2004冬号

3. 『幸いな人』(書籍)

『幸いな人』とは、教会による教会のQTの手引き書である。

—救贖史的な聖書解釈と実践的な生き方の出会い。

—信徒の生活を豊かに、家庭を幸福に、教会を恵みにあふれさせる敬虔生活の手引き。

4. 『子どものための幸いな人』(書籍)

子どもがイエス様に似せられるように助けて

くれる。子どものQTを助ける本である。

—子どもが聖書を自ら読み、自ら思いめぐらすようにしてくれる。

—子どもが教えられた御言葉を実践するよう

に助けてくれる。

—聖日に聖書の学びができる。

—1・2年生は、父母の助けによってQTし、3~6年生は自らQTができる。

～教会（日曜）学校像について～

相馬伸郎（本誌編集長）

1. 子どもの「礼拝共同体」としての日曜学校

教会をあらわす聖書の表現の一つに「祈りの家」（イザヤ第56章7節、マタイ第21章13節）があります。神の民の祈りの家である教会はまた、古来、「学びの家」と称されてまいりました。

教会は、神の御言葉によって立ちもし倒れもするのですから、教会が御言葉（教会の教え＝教理）を教える、つまり学びを施す場所として整えられ、考えられて来たことは当然であったと思います。学びは、必然的に、神の生ける言葉なるイエス・キリストへの礼拝を生み出します。むしろ礼拝においてこそ学びの対象となる生ける神との交わりが与えられ、深められてまいります。つまり、礼拝なしに、教会の学びは成立しないのです。

子どもは、「日曜学校」と称して自らの営みを致しておりますから、うっかりすると「学校」の真似事のような営みへと傾斜してしまうのではないかと思います。日曜学校を学校と称しますが、何よりも、教会自身が学びの家、学校です。そうであれば、日曜学校は、まさに教会独自の「学びの家＝学校」になります。

現住陪餐会員によって組織される言わば大人の教会は、礼拝共同体です。このすべての営みを通して、キリスト者が生み出され、その成長がなされます。また、教会が形成され、成長させられます。日曜学校の営みもまた、「子どもの礼拝共同体」の営みとして捉えること、これが本誌の基本的な日曜学校像です。

日曜学校のことを、外部向けに「子どもの教会」と呼ぶ教会もあるようです。もちろん教会は大人と子どもを含んだ契約の民の集いですから、大人の教会、子どもの教会という言い方は

神学的には疑問が投げかけられてしかるべきです。しかし、日曜学校を、子どもたちの礼拝共同体として捉えようとする意味であるなら、むしろすばらしいことであると思います。

日曜学校の礼拝式を、私どもはどれだけ真剣に礼拝式として理解し、捧げているか、これは常に問われて良いことと思います。「大人が中心の主日礼拝式は本物だけど、日曜学校の礼拝式はその真似事……」このように考える奉仕者は誰もいないと思います。礼拝の真似など不可能です。日曜学校の礼拝式にも、キリストの臨在が確保されています。神の御言葉を語る説教者は洗礼を施されたキリスト者なのですから。

未陪餐会員や地域の子どもたちを対象にした日曜学校とは、現住陪餐会員である日曜学校教師の交わり（教会）の中に子どもたちを迎え入れてなされます。聖餐における交わりの共同体の中に、子どもたちを招き入れ、彼らに届く言葉と式次第（プログラム）を整えて捧げられるのが子どもの礼拝式です。つまり、そこには鮮やかにキリストが臨在しておられるのです。日曜学校の礼拝式に出席して、その後の主日礼拝式（朝拝）に列席する契約の子は二回の礼拝式にあずかっていることになります。

2. 分級中心より、礼拝式中心

子どもの礼拝共同体の形成という視点から日曜学校の働きを位置づけるとき、必然的に、日曜学校の働きの比重は、分級に置くのではなく、礼拝式に置くこととなります。

正直に申しますと、おそらく平均的な日曜学校教師の奉仕の姿は、土曜日の午後になって、切羽詰ったように焦る……。もちろん、それは

良いことでないことは明らかです。そこでこそ、準備の手間を軽減させてくれるような教案誌やワークブックを求める……。本誌が、繰り返し申し述べて参りましたことは、「分級展開例をそのまますることが大切なのではありません。分級では、子どもと共に祈りを捧げることができればそれで良いのです。」準備したものの全部をやれたかどうかということが分級運営の良し悪しの基準にはならないと思います。礼拝式で、きちんと福音が届いていれば、分級は「オマケ」くらいに考えてくだされば良いと考えております。ただし、子どもたちがそのオマケに目がないことは、お互い良く知っていることでもあります。

3. 子ども礼拝式における説教の重要性

—日曜学校の目標—

日曜学校の目標を、もし一言で言い表すなら、「祈りの生活へと導くこと」となります。「信じることは祈ること」であり、それゆえに日曜学校の目標は、自分の言葉で祈れる子ども、祈る生活を確立できるように導くことにこそあります。しかもそれは、まさに公同の、共同の祈りである子ども礼拝式の充実によってこそ、正しく担われます。個人的な祈りの生活の訓練だけに焦点をあてるようなアプローチを改革教会はとることはできません。主日礼拝式（公同の大きな祈り）に支えられ、あずかってこそ、個人の小さな祈りの生活は生み出され、健やかに立つことができます。

またそうであれば、当然、子ども礼拝式の中心が神の言葉の説教に求められることは、明らかかと思えます。何故なら、祈りとは信仰の業であり、それは御言葉を聴くことから始まるからです。外からの言葉つまり御言葉によって、信仰が与えられ、祈りの言葉は与えられ、生み出され、紡ぎ出されるのです。ですから、日曜学校の働きにおいても、あるいはそこでこそ説教の重要性が強調されることになるでしよ

う。そうなれば、牧師こそが日曜学校の奉仕、礼拝説教を担うことが求められるのではないのでしょうか。

本誌の説教展開例は、要旨、ポイントだけではなく、ほとんど完全原稿を掲載しています。それは、一つのモデルを提示する試みです。もちろん、大切なことは奉仕者自らが、これを参考にしつつ、御自分の言葉で説教の言葉を紡ぎ出していただくことです。そこでわかまえるべきことは、聖霊御自身が、聖書を説く自分の言葉、声を用いて子どもたちに届けてくださることを信じることです。主イエスへの愛と子どもたちへの愛があれば、必ず、子どもの心に主イエスを紹介することができます。届くことができます。

4. 説教の完成としての牧会—分級の目標—

さて、しかしながらまたここでこそ、分級の固有の意義、重大な意義も明らかになります。神の言葉の説教を通して子どもたち全体になされる御業は、また一人の子どもの固有の状況、心の奥底にも届きます。しかし、一人の子どもの魂の状況に、よりの確に触れ、届けるためには、「牧会」が求められます。私どもが、分級の目標を「共に祈る」こととしておりますのは、子どもへの牧会を指し示すあり方を指し示しているのです。この牧会に奉仕するのが分級なのです。この分級イメージは、「牧会」のイメージ、子どもと向き合う姿勢です。子どもの心、気持ちを聞き出すこと、聴き取ることが求められます。そこでこそ、教室において生徒全体に均一の知識を提供する「学校」のイメージは薄くなるはずです。

説教（神の言葉の共同的伝達）と牧会（個人的伝達）が有効になされる時、日曜学校は正しく豊かな実りを結ぶことを確信致します。

5. 教会形成の一環としての日曜学校

—教師会と教師—

およそ教會的な奉仕の在り方は、いずれも共同的な奉仕の業です。とりわけ、日曜学校の働きは、共同の働きによってこそ正しく担われ、正しい実りが結ばれるのです。つまり、担任教師の力量に基く、それぞれの分級の力に期待するよりむしろ、教師会（全員）の奉仕と祈りを束にして子ども礼拝式の充実を求め、そのために努力するあり方こそ求められていると考えます。

例えば、礼拝説教を担うのは、担当日の奉仕者一人です。しかし、その時こそ、その背後の教師たちの祈りがどれだけ集められるかが問われます。教師たちの祈りに支えられてこそ説教や、その礼拝式は必ず聖霊の豊かな働きのなかで捧げられることを確信いたします。

教師会が、単に教師たちの実務的会議で終わるのではなく、日曜学校の働きを担う核としての「共同体」として形成されることが大切なのです。具体的には、充実した教案研究がなされ、全体の課題と一人ひとりの課題とを共有できる教師会を持つことです。本誌は、その一助となるために発刊されたものです。

さらに申しますと、教会全体の祈りに支えられなければ、日曜学校の業が、教会形成そのものとしての結実を求めることは難しくなくなります。日曜学校の働きとは、各個教会の形成と伝道の働きそのものと直に繋がっているものであり、そうでない働きは、少なくとも改革教会の教会形成の筋道とは異なる日曜学校となってしまいます。だからこそ、礼拝指針の第31条にある通り、小会の監督、配慮が定められているのです。日曜学校の営みとは教会形成そのものの営みなのです。いわゆる賜物のある牧師とか専門家の牧師だけが担うものではありません。

6. 伝道する日曜学校像

日曜学校は契約の子の信仰継承のためにもあります。しかしこれまで、宣教地である日本の教会は、日曜学校を地域の子どもたちを捉える伝道の場として考えてまいりましたし、今なお同じ状況にあると思います。

私どもは、今日の日本の荒廃は、教会の福音伝道の力の低下の責任であると考えております。社会から、教会の責任を問う問いはどこからもあがっておりません。しかし、神からは、問われています。

私どもの目に子どもたちは、どのように映っているでしょうか。彼らは、天地の創造者なる神、罪の赦しの福音に飢え渴いて、倒れています。真の教会で説かれる福音が届きさへすれば、子どもらこそははっきりと霊的な反応を示してくれるのです。現実の困難さを理由に、日曜学校を通して、地域の子らに伝道しようとする意欲と働きを減退させてはなりません。

私どもは、教案誌を作成し、出版すればそれで良いとはまったく考えておりません。日本キリスト改革派教会をはじめ日本の諸教会から子どもたちの讃美の声、祈りの声が溢れるようになることをこそ目指しています。

「子どもたちを私のところへ来させなさい」と命じられた主イエスの御前に、共に悔い改め、祈りの叫びをあげたいと思います。忍耐と労苦が求められます。けれどもその光景を夢見ながら、主と共に、皆様と共に、戦い続けてまいりたいと祈り願っています。

本誌へのご批判、ご意見をお寄せ下さい。改革派日曜学校像を確立するために神学的、実践的な広い論議を心から期待致しております。

Soli Deo Gloria! (ただ神の栄光の為に！)

(中部中会日曜学校委員会委員、
名古屋岩の上伝道所宣教師)

『教会学校教案誌』発行のための 自由募金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあげます。

中部中会日曜学校委員会（2007年4月中部中会第一回定期会で教育委員会から改組）は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。2001年4月に始まり、すでに満7年となり、第29号まで発行して参りました。中部中会では7割ほどの教会により採用され、改革派教会全体でもおよそ60教会で採用されています。大会教育委員会もご支持を表明してくださっています。皆様のご支援に心からの感謝を申し上げます。

『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会日曜学校委員会では、あわせて皆様からの自由募金によってご支援いただきたいと願っています（2007年4月中部中会第一回定期会にて自由募金願いを可決承認）。子どもたちの信仰教育のために、ぜひ皆様からのお祈りと募金のご支援をいただきたく、よろしく願い申し上げます。教案誌を購入していただきやすくするために、教案誌の頒布価格を印刷・製本単価ぎりぎりにおさえています。『教案誌』をご購入くださることも発行のための支援となりますので、ご購入いただくことによってもご支援くださいますよう、お願いいたします。

目標金額	30万円
送金先	郵便振替 伊藤治郎
	00890-2-148183

※通信欄に「教案誌のための自由募金」と明記してください。

聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例

〈神を知ることが永遠の命〉

最後の晩餐の席で主イエスは、祈りを捧げられます。「大祭司の祈り」とも呼ばれるこの祈りの最初で主が祈られたことは、「父よ、時が来ました」という言葉でした。「時」とは、父の栄光をご自分が現わす時だと言われます。神の栄光を身に帯び、輝かせる時が来た、それも世が造られる前から、永遠の昔から父と共にあっておられた栄光です。この「時」とは、ヨハネ福音書においては、十字架の時です。「人の子が栄光を受ける時が来た。はっきり言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば多くの実を結ぶ」（12章23、24節）。主が一粒の麦として死ぬ、その死によって多くの人を生かす時、十字架によって多くの人を救う時が来た、と言われたのです。十字架こそ神の栄光の輝きだと言われるのです。人間の目には、恥と愚かさに他ならない十字架、徹底的な敗北としかいえない十字架こそが、神の栄光なのです。神の栄光、神の臨在とは、神の救いのことであり、神による贖い、主イエスの十字架でした。十字架を通して、苦難を経て栄光に至るということではなく、十字架そのものが神の栄光なのです。十字架でこそ、神の贖いと救いが成就するからです。ですから神の栄光とは、神の救い、神の憐れみ、神の恵みのことなのです。そしてそれは、わたしたちにご自分の命を与えてくださるということなのです。

ここで主は、「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、イエス・キリストを知ること」だと、神とキリストを知ることが永遠の命だと言われます。この「知る」とは、単に知的に理解し、事柄を了解するというのではなくて、人格的に知り合い、深い心の通い合いの中で共に生きることです。自分なしには相手もないといえるほどに、相手から自分が必要とされ、愛され、受け入れられている、そのような愛と信頼の関係

の中で、相手と共に生きていることです。そのような知られ方で相手から受け入れられ、理解され、必要とされる、そのような生きた愛の交わりの中にあるということです。実際、わたしたちは、自分がそのように受け入れられ、必要とされ、愛されていることで、生き生きと生きることができ、輝いて生きることができます。しかしそれほど自分が必要とはされず、理解もされず、受け止められていないところでは、わたしたちは心萎え、心において死んでいきます。命とは、生き生きとした交わりの中で愛され、必要とされていることです。永遠の命とは、そのような生きた愛の交わりの中で神と共に生き、神の愛の中で支えられ、神への愛と感謝の中で生きていることです。こんな自分が、それでも神にとっては大切な宝物で、神から愛され、必要とされている、その神の愛の中で生かされていることです。命とは交わりです。父と子とが、そのような溢れる愛の交わりの中で愛し合っておられ、一つとなっておられる、その神の交わりの中にわたしたちも加えられ、その交わりによって生かされていくことが、永遠の命なのです。「父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちの内にいるようにしてください」（21節）と祈られる、そのような生きた交わりの中に生かされていくことが、永遠の命なのです。

わたしたちが罪から救われ、死から命に至るために、神がご自分の命を代わりに差し出して、この命によって生きなさいと言ってくださいました。神は、十字架によってご自分の命を差し出しながら、わたしたちに「生きよ」と呼びかけてくださいました。この愛の呼びかけに応じて、神の愛である命を受ける時、神との生きた交わりの中で生かされる者とされ、神の命の中で生きる者とされていくのです。（三川栄二）

子どもカテキズム

問1 私たちは何のために生きるのですか。

答 私たちが生きるのは、私たちの神さまを知り、神さまを喜び、
神さまの栄光をあらわすためです。
これが私たちの喜びです。

〈「生きる」ということを巡って（問1の意義）〉

ハイデルベルクにしても、ウェストミンスターにしても、信仰問答の問1というのは、とても大きな意味を持っています。ちょうど小説や映画の出だして、その作品に興味を持つかどうか、また作品全体の性格や方向性といったものが決まるのと似ていますね。その意味で、子どもカテキズムは、初めから終わりまで終始「生きる」ということを問うている、と言えます。つまり、「生きる」ことを当たり前のことと考えていないんです。このように、一番初めに「生きる」というテーマを掲げることで、これから一緒に「生きる」ってことを考えていこうというのですね。

〈誰が誰に問うているのか〉

さて、そこでカテキズムが、「私たち」という表現を用いていることに着目したいと思うんです。「私たち」って誰と誰なんでしょうか。「子どもたち」の間での「私たち」でしょうか。やはりここは、「CS教師と子ども」あるいは「親と子ども」の「私たち」だと思います。しかも、そこで、この問いをだしている側の大人は、決して自分で答えが分かり切っていると考えるはないと思うんです。むしろ、子どもと同じ目の位置に立って、一緒に人生の意味を問いながら、共にイエス様に聞いているんじゃないでしょうか、「イエス様、

生きるって何なんでしょう。」「どうやって生きてら、悔いのない、自分が最も輝ける人生を送れるのでしょうか？」と。その時、イエス様が聖書を通して語ってくださるのですね。

〈「私の」人生に「神さま」が登場することの意味〉

イエス様からの答えとして、カテキズムはひたすら「神さま」を語ります。これは当然と言えば当然でしょう。しかし、自分の歩みを振り返ると、案外そうじゃないことに気付くんだと思うんです。言葉で言うほどには、私の人生には神さまがいない、神さまが登場しない、そういう思いの中で、改めて「神さまなしでは、私の人生は輝かないんだ」と告白している、そんな思いの現れがカテキズムの言葉になっているんだと思います。

〈「喜び」〉

カテキズムは、「神さまを知り、喜び、栄光をあらわす」ことが、「私たちの喜び」だと語ります。それは、既にその喜びを味わっている者の言葉ですね。子供たちと一緒にこの喜びの中を生きたいという願いが込められています。答えの中に「礼拝」という言葉は出て来ませんが、言わんとしているのは、父なる神さまとイエス様との愛の交わりが「礼拝」の中心なんだということだだと思います。（梶浦和城）

4月6日

「人生の目的……礼拝」

説教展開例

テキスト ヨハネによる福音書 17章3節
カテキズム 子どもカテキズム 問1

〔単元のねらい〕

問1を、今週と次週、二回に分けて扱っています。二回分をまとめて読み、全体を把握したうえで、今日の箇所に向き合ってください。特に問1は、問いと答えを心に刻みつける思いで、御言葉を取り次ぎましょう。また、強調点がないと、話は拡散するばかりです。今回は、目的と喜びの結びつきに着目しました。喜んでいて、目的を全うできる幸せに、心から感謝しましょう。教師が、この喜びに生きているとき、子供達をも同じ喜びに招くことができます。なお、個人的なことをも説教に記したが、この部分は、教師が自分の事柄に置き換えてもらいたい。

「生きる喜び+生きる目的=礼拝」

わたしは、小学校の頃、日曜日の朝に「ソフトしよう」と誘いに来た友達に、「教会学校があるから」と断ったときの寂しさを覚えています。本当は、ソフトがしたかったのです。でも、教会学校に行かなくてはならないと思いました。それ以後、友達は日曜日には誘いに来なくなりました。ソフトボールの楽しさを求める心と、教会学校を大切だと思う心が、戦っていました。ソフトボールの方が楽しいのにと、心の何処かで思いながらの教会学校生活でした。

楽しいこともしたいし、天国にも行きたいし、と二つを求めるとき、楽しいことを沢山して、人生の最後に「神様、ごめんなさい」と悔い改めて天国に行けたら、それが一番幸せだろうと思ってしまいました。でも、最後に悔い改めることができなかもしれません。ですから、天国に行くためには、楽しいことを犠牲にしても、教会学校にいつも通っておこうと思いました。

義務感が先立つ教会学校生活でしたが、気づいてみると、礼拝することが楽しいことになりました。神様を礼拝することが、喜びとなりました。死んでから天国に行くことを楽しみに、苦しくても我慢する生活から、神様を信じると今楽しいから、信仰生活をするようになりました。

神礼拝の喜びとは、義務を果たしたことへの喜

びではありません。たとえば、遅れていた宿題を出し終えたときの喜びではありません。宿題をすることが、喜びとなります。その喜びを追い求めているなかで、自然と宿題をやり終えてしまいます。信仰生活の喜びは、日常生活のなかで体験することの稀な、奇跡にも似た喜びです。

皆さんのなかにも、教会学校に来るよりも楽しいことを知っている人はいるでしょう。ゲームもありますし、テレビでマンガを見ることも楽しいです。日曜日も、教会学校以外のお友達と遊ぶ方が楽しいかもしれません。

でも、しなければならないことをしないで、好きなことばかりしていても、心の底から楽しいとは思えません。本当はこんなことをしてはいけないのと思うからです。また、したいことだけをして、楽しいことばかりで、毎日を過ごせるわけではありません。したくなくてもやらねばならないことは、沢山あります。大人の方は、仕事はしんどいと感じても、働いています。一方で、しなければならないことを義務感だけで行うのは、苦しいです。他方で、しなければならないことをせずに、他に楽しみを見つけても、心は疲れてきます。しなければならないことが、自分にとって楽しいことだったら、最高に幸せな人生です。

神様は、しなければならないことと楽しいことがなかなか一致しない私たちを、このうえなく憐れんでくださいました。神様を知ることが、人生の目的として、かつ、人生の喜びとして、与えてくださいました。被造物が、創造主に感謝することは、義務であり、当たり前のことです。神様は、被造物にとっての義務ともいうべき創造主への礼拝を、まさに被造物にとっての喜びとして、与えてくださったのです。

神様を知り、神様を礼拝することが、自分の喜びになるとすれば、それは100%、神様の恵みです。そして、この奇跡が可能になったのは、イエス様のおかげです。私たちは、イエス様を通して神様を知ります。御子をお遣わしくださった神様の愛を感じつつ、神様を知ります。十字架の犠牲をもって、私を罪から救ってくださった贖い主を通して、神様を知ります。

このようにして神様を知ることが、もはや、知識のレベルに留まる事柄ではありません。知ることが、交わりです。神様を知るとは、神様との交わりのなかに入れられていることです。神様と関わりをもつことを許されたことを、「知る」という言葉で表しています。神を知るということが喜びであるとは、神様との関係がキリストのおかげで回復し、神様に受け容れていただいた喜びです。

さらには、唯一の生ける父なる神様と、御子なるイエス・キリストとの交わりのなかに、加えていただける喜びです。ヨハネによる福音書17章が、今日の御言葉になっています。ここに記されていますことは、父なる神様とキリストとの豊かな深い交わりと一致です。キリストは、ご自分をもっておられるその交わりのなかに、キリストを信じる者を無条件で招き入れてくださいます。

私たちは、このような交わりのなかへと入れられて、キリストを通して、礼拝を献げます。礼拝は、日曜日の教会学校のなかで行われる一時の間ではありません。キリストを信じ、キリストと結び合わされたときから、私たちは、全く変わっ

たのです。神様との交わりを許され、そのなかを生きる者になったのです。神様との交わりを喜ぶことが、神様への礼拝です。

キリストにあってもう既に与えられている交わりのなかに、お友達も一緒に加えられています。私と交わりをもってくださいする神様は、教会学校のお友達とも交わりをもっていてくださいます。そのことを心に留めて、一緒に神様と交わり、感謝を献げることが、日曜日の礼拝です。皆で日曜日の礼拝において集まり、一週間それぞれの場所で神様を礼拝し、そして、日曜日に皆で礼拝します。

私たちの命は、礼拝における神様との交わりのなかにあります。また、愛する兄弟姉妹と一緒に守る礼拝のなかにあります。命は、神様との交わりのなかで寛ぎ、力づけられ、元気になっていきます。そして、皆の命とも結び合わせられ、お互いに励まし合いながら、お互いを必要として、孤独から解放されます。礼拝のなかで、命は豊かになっていきます。

今日のカテキズムは、「生きる目的は、神様を喜ぶことである」と語っています。神様を知り、神様の栄光を表すために、私たちは創られています。神様が私たちを創ってくださった目的が満たされることと、私たちが神様を知り、礼拝する喜びで満たされることは、一つの出来事です。また、これは、死んで終わるような楽しみではありません。天国でも続く喜びです。

「何のために生きるのですか」という問いへの答えが、「これが私たちの喜びです」となっています。生きる目的への問いかけに、生きる喜びを語って答えようとしています。喜びのために生きることが、生きる目的を満たすことになっています。こんな幸せな人生があるのでしょうか。私たちは、自分の力では手にすることができない幸いな人生へと、神様の愛によって、招かれています。

(岩崎 謙)

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書 17章3節

永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、
あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。

〈聖書〉

ヨハネ17章3節

「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです」。

〈ねらい〉

幼い子どもなりに人生の意味をふと思うこともあります。生まれてきて死ぬことの不思議さを感じる子もいます。命についての不思議さを一緒に考え、創造主なる神へと思いを導きましょう。そして神さまへの感謝と賛美をささげる礼拝が大切なことを伝えましょう。

〈展開例〉

ゆかちゃんはときどき不思議でたまらなくなります。

「ねえおかあさん、あの空はだれがつくったの？
どうして空はあるの？」

「ねえおかあさん、人間はどうしてうまれてくるの？ どうして死ぬの？」

「ねえおかあさん、人は何のために生きているの？」

わたしたちは今生きています。でも赤ちゃんの時に死ぬ子もいます。治らない病気を持って生ま

れてくる子もいます。おいしいものを食べて、買いたい物を買って、やりたいことをぜんぶやるために生まれてきたのでしょうか。死んだらどこへ行くのでしょうか？

この答えを知っているのは神様だけです。なぜなら、神さまが海と空をつくり、人間をつくったからです。だからわたしたちは生きている間この神さまを一生懸命知らなければなりません。知れば知るほど神さまをほめたくになります。こんなにすばらしい世界をつくって、わたしたちをつくってくださったのです。神さまに「ありがとう」「だいすきです」「かみさまってすごいね」と言いたいのです。だから礼拝するのです。

〈やってみよう〉

絵本『いのちの時間』

ブライアン・メロニー作

ロバート・イングベン絵

藤井あけみ訳

新教出版社

〈お祈り〉

天の神さま、わたしは神さまのことを知りたいです。教えてください。



〈ねらい〉

神さまの創造の目的は、私たちが神さまを知り、神さまを喜んで礼拝するようになることにあります。ですから、私たち一人ひとりの人生において、神さまを知り、主の日ごとに礼拝を守ることは、神さまの御旨に沿うことで、とても大切です。両者の結びつきをはっきりと伝えたい。

〈展開例〉

1. 神さまは、どのようによいことをしてくださっていますか。

(ひとりひとりの生活の中で、どういうことがあったか、具体的に挙げてもらう)。

もし、神さまがいらっしゃらなかったとしたら、私たちはどうなっていたでしょうか？

2. では、私たちは、神さまに対してどのようなことをしましたか(していますか)？

今していることは、それで十分だと思えますか？

3. 日曜日に教会へ行きたくないと思ったことはありますか。そのとき、どうしましたか。行った理由、休んでしまった理由は何ですか？ そ

の時、そしてその後、どう思いましたか。

⇒神さまは私たちが礼拝を献げることを非常に喜んでくださいます。自分の思いだけではなく、神さまの思いに心を向けるように励ます。

4. ともだちは教会へ行かないのに、なぜ自分だけ教会へ行かなければならないのだろうと思ったことはありますか。

①教会へ行くことは何も特別なことではなく、ごく普通の、当然に行うべきことなのだ、ということのをわからせたい。

②ともだちを教会へ誘うことができるようになったら素晴らしい、と自分から進んで思えるようになるよう励ましたい。

5. 私たちはいろいろな仕方で、神さまに喜んでいただくことができるのですが、しかし礼拝を欠くようなことがあったら、他の全てが空しくなってしまうことを伝えたい。

〈お祈り〉

神さま、どうか私たちの毎日の生活をお守りください。日曜日には、教会で、神さまを礼拝することができますよう導いてください。



〈ねらい〉

神さまがまずわたしたちを生かし、愛し、喜び、受け入れてくださっていることを知る。

〈展開例〉**○生きている喜びを感じる**

みなさんは、どんな時に「あ、自分は生きてるな」って感じますか？

片方の手の指で、もう片方の手首をさわってみてください。自分の脈が打っている場所がわかるかな？ 今度は隣のお友達の脈をさわってさがしてみてください。みつかったかな？

病院などで、患者さんの体の状態を調べる時に脈をはかったりしますね。ほかにどんなことを調べるか知ってますか？ 熱をはかる、血圧をはかる、血を採って調べる、レントゲン……。いろいろありますね。どれも「今、元気に生きてるよ」とか「今はちょっと具合が悪い」と体からのサインを知るのに大切なことです。

こうして普通にお友達と手をつなぐだけでも暖かいなあ、と感ずることが出来ます。暖かいのは生きている証拠ですね。学校で、みんなの前で当てられたらドキドキしたりするでしょう？ マラソン大会の時、一生懸命走ってもドキドキしますね。転んで怪我したら血が出るし、おなかのすいたらグ〜って鳴ったりします。生きてるから、私たちの体はいろんな反応をするんですね。神さまは人間の体をとでも上手に造ってくださったと感動します。

でも、「生きてる」って体だけ動いてるよってことではありません。私たちには心もあります。うれしいとか、悲しいとか、腹が立った、がっかりした、うきうきした……。心の中でもいろんな動きをします。心が喜びでいっぱいになると「ああ、生きててよかった！」って思うし、悲しみでいっぱいになると「もう生きていたくない…」って思うこともあると思います。

○神さまを喜ぶことを知る

どんな時に私たちの心は喜ぶのでしょうか？

ほしかった物が手に入った時はどうですか？確かに「やったー！」と思いますが、それは一瞬で消えてしまうように思います。新しいゲームも洋服も、しばらくたつともう新しくなくなって、手に入った時の喜びは続きません。

自転車に乗れるようになった、跳び箱六段がとべるようになった、という時はどうでしょうか？

その時はうれしくても、だんだんできて当たり前になって喜びも忘れてしまいそうです。

人からほめられた時とか、大事にされてるなど感じた時はどうでしょうか？ この喜びは続きそうですが、同じ人から今度は叱られた、けんかしたとなると、残念ながらやっぱり消えてしまいそうです。

このカテキズムは、大人の本では「人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことです」（ウェストミンスター小教理問1）と書いてあります。永遠に喜ぶ！ それはどんな喜びでしょうか。

神さまは変わらないおかたです。私のことを、このあいだまでは好きだったけど、もう今は好きではない、などとおっしゃらないかたです。神さまの愛は永遠です。あなたをずっと愛するよ、あなたはいつまでも私の喜びだよ、とおっしゃってくださいるかたです。神さまが私たちに向けてくださる愛と喜びは、時間がたっても忘れてたり薄れたりしません。だから私たちが神様の愛を知る時に、永遠に神さまを喜ぶことができるようになるのです。

ずっと変わらない喜びが心にあると、少しくらい辛いことがあっても頑張れます。友達とけんかしちゃったとか、大事なものを失くしたとか、悲しいことが時々あっても、神さまの永遠の愛の前では一時のことに過ぎないのです。

〈お祈り〉

神さま、私たちが神さまの愛について、もっとよく知ることが出来ますように。イエスさまの御名によってお祈りします。アーメン。

〈ねらい〉

1. 「私たちは目的をもって造られた」ということについて考える。
2. 「神様を知る(神様と人格的な結びつきを持つ)」とは、具体的にどういうことなのか考える。

〈子どもカテキズム〉

問1：私たちは何のために生きるのですか。

答：私たちが生きるのは、私たちの神様を知り、神様を喜び、神様の栄光をあらわすためです。これが私たちの喜びです。

〈展開例〉

1. 「生きる目的」ということについて考える

- 「あなたは、何のために生きていますか」という問について考えてもらい、発表しあってみる。
- 「人は、目的をもって、様々な道具を作り出してきた。だから、すべての物(道具)には目的がある」ということを、身近な物を例にして考えてみる。
例：ボールペン＝「字を書くため」、コップ＝「飲み物を入れるため」等。
- 私たち人間は、「何の目的もなく、単なる偶然によってこの世に生まれただけの存在」なんかではなく、神様からすばらしい目的と計り知れない愛情をもって造られた尊い存在であることを伝えたい。そして、私たちが「自分の生きる目的」について考えるとき、「私は○○のために生きたい」という自分の願いについて考える前に、「私を造った方は、どんな目的をもって私を造ったのだろうか」と

「神様の願い(目的)」について考えることが大切である。

2. 「神様を知る」ということについて理解を深める

- 神様は、「私たち人間が、神様を知り、神様を喜び、神様の栄光をあらわすことができるように」という願い(目的)をもって、私たちを造ってくださった。子どもカテキズムでは、「知ること」、「喜ぶこと」、「栄光をあらわすこと」と三つの目的があげられているが、今日は特に「神様を知る」という目的について考えたい。
- 聖書における「知る」とは、ただ「相手を知的に理解する」ということではなく、「相手と人格的な結びつきを持つ」ということである(創世記4:1を参照)。
- 「神様と人格的な結びつきを持つ」とは、神様との間に「心を必要としない機械的な結びつき(関係)」ではなく、「心と心が通い合う温かい心の結びつき(関係)」を持つことである。
- 聖書における「知る」とは、付き合っている男女が、相手のことを想ったり、見つめたり、話しかけたり、プレゼントを贈ったりして、愛と信頼を深めながら共に生きていくことを通して、相手のことを知っていくことである。
- そうやって、神様と向き合って、神様と心を通い合わせながら生きていくことこそ、神様が私たちに願っていることであり、私たちの生きる目的である。

テキスト ローマの信徒への手紙 11章36節～12章2節

〈聖なる生けるいけにえとして献げる〉

「ローマの信徒への手紙」は、「罪—救い—感謝」の三部構成となっています。まず異邦人とユダヤ人の「罪」が指摘され(1章18節～3章20節)、次にこの罪からの「救い」が語られます(3章21節～11章)。それは「信仰」によって与えられる「義」で、「信じる者すべてに与えられる神の義」です(3章22節)。そこから、罪から救われた者の「感謝」の生き方が示されますが(12～16章)、それは一言で言えば、「愛」に基づく新しい生き方でした。これまでの1～11章においては、わたしたちが救われたのが、どこまでも神の恵み、つまり「神の愛」に基づくものであるということが明らかにされていきました。そこでパウロは、この「神の慈しみにとどまるかぎり、あなたに対しては慈しみがある」(11章22節)のだから、信仰、つまり「神の愛」に踏みとどまるようにと勧め、この信仰(神の愛)にある新しい生き方を、「愛」として12章から教えていきます。そしてその中心にあることが「礼拝」でした。しかしこの「礼拝」とは、単に一定の宗教儀式に参列するというのではなく、「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げる」ということです。ここで「自分の体」と言われているのは、単に心と分離された肉体、身体のことを意味するのではなく、「自分自身」ということです。心と体からなる自分の全体を「神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げる」ということで、それはつまり、「献身」するということなのでした。

それではわたしたちは、どうして「献身」しなければならないのでしょうか。その理由は、「神の愛」にありました。「わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです」(ヨハネ一4章19節)。パウロの人生の視野にあったことは、自分の楽しみや安楽ではなく、いかにしたら「主に喜ばれる者」となるかというこ

とでした(コリント二5章9節)。そうしてキリストを、ただひたすらに見つめつづけながら生きた、パウロの人生の中心聖句は、「その一人の方は全てのひとのために死んでくださった。その目的は、生きている人たちが、もはや自分自身のために生きるのではなく、自分たちのために死んで復活してくださった方のために生きること」でした(同5章15節)。そこでパウロをそのように突き動かしていったのは、「キリストの愛がわたしたちを駆り立てている」ことでした(同5章14節)。そしてこの神への礼拝・献身、すなわち「神への愛」から、「隣人への愛」、つまり隣人に仕えていく生活が紡ぎ出されていくのです。キリスト者には、「だれ一人自分のために生きる人はなく、だれ一人自分のために死ぬ人はいません」。そこではむしろ「わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬ」のであって、「生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです」というあり方が求められます(ローマ14章7、8節)。そしてその中心にあることは、キリストが「死んだ人にも生きている人にも主となられる」ということなのでした(同14章9節)。

そのために自分ばかりを大切にすることを教える自己中心的な「世」に倣うのではなく、心を新しくされて、神の御心を一心に求め、追求し、従っていく生き方へと歩むようにと勧めるのでした。「あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにしておいて自分を変えていただき……なさい」と。そこでパウロは別の箇所でも、「だから、以前のような生き方を捨てて情欲に迷わされ、滅びに向かっていく古い人を脱ぎ捨て、心の底から新たにされて、神にかたどって造られた新しい人を身に着け、真理に基づいた正しく清い生活を送るようにしなければなりません」と勧めているのです(エフェソ4章22～24節)。(三川栄二)

子どもカテキズム

問1 私たちは何のために生きるのですか。

答 私たちが生きるのは、私たちの神さまを知り、神さまを喜び、
神さまの栄光をあらわすためです。
これが私たちの喜びです。

〈神を知り、喜び、栄光をあらわすことと、自分の喜びとの関係〉

この世的な考え方からすれば、「私」あるいは「私たち」の人生を問うているわけですから、その答えに、「私」や「私たち」のことが出てこないのは、どこかおかしいということになりましょう。この「私」が自分の人生の中心に立って、自分や自分の感覚を基準にして、人生の「喜び」を問い、考えていく、それが人間の普通の思いなわけですが、しかし、そこでカテキズムは、そうじゃなくて、やっぱり神さまが私の人生の中心にいてくださなければ、生きるってことは楽しくないんだと語るんですね。子供たちと一緒にあって、そう告白するわけです。強制的に上から押しつけてそう言わせるんじゃないで、子供たちなりの信仰の歩みの中で、子供たち自身が感じ体験した実感を共有するようにして、先生もそう思う、お父さんお母さんもそう思う、と語り合っていく。それがまた私たちの喜びになるんだと思います。

〈神さまの栄光をあらわすって、どういうこと？〉

「神さまの栄光をあらわすって、どういうことですか？」と聞かれたら、大人でも答えるのは難しいと思います。何かとてつもないことをしなきゃいけないような気持ちになります。カテキズムでは、この辺のことは詳しく解説はされていません。ある意味で、暗黙の了解となっています。しかし、それは逆に言えば、これを子供たちと一

緒に告白する大人が、その意味するところを自分なりの言葉で語ってあげて欲しい、という思いの現れでもありましょう。深く豊かな内容を持った事柄であるからこそ、とても一言では言い表せないからですね。汲めど尽きぬ泉のように、それこそ御言葉を用いて、幾らでも語り方があるんだと思います。

今ここで少しばかり言うことができるのであれば、逆のことを考えてみると多少見えてくるものがあるんじゃないかと思います。例えば、神さまの栄光をあらわすというのは、人間の栄光をあらわすというのとは、正反対のことですね。また、神さまの顔に泥を塗るようなことをしない、ということですし、この人たちを見ていると、確かにこの人たちを造った神さまというのは、すごい方なんだと称賛したくなる、ということでもあります。スポーツなどで、自分たちの監督が本当に自分たちを愛して育ててくれたら、ひとつこの監督のために優勝して、胴上げしてあげよう、と思うものです。これが言わば「監督の栄光をあらわす」ということになるわけです。さすが、マイナス思考で出来の悪かったメンバーを最後まで見捨てずに、ここまで育て上げた監督のチームだ、そう思わせるのが「神さまの栄光をあらわす」ということでしょう。そうやって監督が褒められると、そのチームのメンバーである私たちも嬉しいわけです。(梶浦和城)

テキスト ローマの信徒への手紙 11章36節～12章2節
カテキズム 子どもカテキズム 問1

〔単元のねらい〕

今回は、「生きる目的とは何か」という問いに焦点を当てています。答えが大切なのですが、問いそのものが重要です。幼い日にこの問いを考えることができる恵みを感謝しましょう。自分で考えても分からない問いに、神様が答えを用意していただきました。人生に目的を与えてくださる神様を賛美しましょう。今回は、子供に語る説教展開例というよりも、説教黙想のつもりで教師の思いを広げるために記しています。教師が、自分の生きる目的を再確認して、再献身し、自分の言葉で語るとき、子供達に届きます。弱い者であっても、神様の栄光を表す人生に招かれていることを感謝しましょう。

「神様の栄光を表す私の人生」

カテキズムの問1は、人生の目的を問いかけています。何のために生きているのでしょうか。小学生なら中学に行くため、中学生なら高校に行くため、高校生なら大学に行くため、大学生なら就職のためと答えるなら、働くことが人生の目的です。でも、なぜ、働くのでしょうか。生きるにはお金がいるから働くのでしょうか。確かにそうです。しかし、働くのは生きるため、生きるのは働くためとなります。本当は、この先に、何のために生きて働くのかを、問わねばなりません。

次のような答えをする人もいるかもしれません。お金持ちになって、美味しいものを食べるため、旅行するため、いい洋服を着るため等々です。しかし、これらすべてが満たされても、人生の目的を全うしたという充実感を得ることはできないでしょう。或いは、自分の夢をかなえるため、有名人になるため、スポーツ選手になるため等々です。これらの場合も、問いは続きます。たとえば、何のためにスポーツ選手になるのでしょうか。自分の力を試すためというのは、一つの答えです。しかし、自分の力を証明するために生きていると言えば、威張っている人みたいに聞こえます。また、自分の力に失望したとき、生きる目的が見えなくなってしまいます。

或いは、音楽や何かを通して人に喜びを与えるため、親孝行をするため、幸せな家庭を築くため、

日本と世界を良くするため等々と答えることができます。確かに、子供の成長のためにお母さんは一生懸命ですし、お父さんは家族のために働いています。この場合、他者の存在が、自分の生きる目的と関わり、人生に広がりを感じられます。

何のために生きているのか、この問いは、思いの外、やっかいです。戦争中は、「国家のために命を」と語っていました。今日でも、「会社のために」と働くサラリーマンも沢山います。これらの場合、それを目的として生きて、どんな結果をもたらすのかを、再検討しなければなりません。

英語では、目的とは、ゴール、エンド、つまり、人生最後の到達地点を表します。人生の最後は、死です。しかし、死ぬために生きるとは、語ることができません。でも、死ぬことを意識すると、思いがふくらみます。動物なら、子孫を残すことが、生きる目的ともなっています。人間にとってもまた、「より良い未来を子孫に残すために」、今を生きることは、重要です。

また、抽象的ですが、「正義のために」「平和のために」「真理のために」と心から願って仕事をしている方々もおられます。お医者さんなら、「患者さんのために」「命を守るために」と答えるはずですが。

大切なことは、「それが、本当に、自分の人生の目的となっているか」を掘り下げることです。自分がそのために生き、これがまさに自分の生き

る目的であると納得し、確信できる生き方ができるかです。人生の試練と苦みのなかで、生きていく目的を自覚し、そこに立ち返り、その試練ともう一度向き合える力となるような目的です。

また、なかなかできなくても、一生涯、そのことを目指し続けることができるような目的です。大きすぎて、自分には手が届かないとあきらめてしまっただけは、目的になりませんが、小さすぎて、目的がすぐ変わるようでは、筋の通った人生を送ることができなくなります。

能力差や性格の違い等の個人差が顕著ななかで、皆に共通する人生の目的などあるはずがない。自分で苦勞して探すしかないと思われるかもしれませんが、確かに、自分で探すものです。

しかし、何のために生きているのかと探し求めるとき、その問いと向き合うだけで、人生が終わってしまうのではないのでしょうか。自分の力で答えが出せる問いなのかと問い始めると、深いことを考えずに気楽に生きようと、問いを放棄する方向に走り出しそうになります。

回り道をしましたが、ここで、カテキズムの問いと答えに思いを向けましょう。今回は、「神の栄光を表す」に着目します。「自分の人生は何のためにあるのか」という問いに対して、答えは、「神様の素晴らしさを表すためである」となっています。自分みたいなものが、神様の素晴らしさを証しすることができるのでしょうか。

ここで、前回学んだ「神様を知り、神様を喜ぶ」ことを再確認しておきましょう。神様を知るとき、神様が如何に私を愛し、大切に思っていてくださるかが、分かります。また、神様とは、罪に沈む私であっても、キリストによって引き上げて下さるお方です。神様を知ったとき、神様との交わりが喜びとなります。その喜びは、素晴らしい神様と触れ合うことから溢れてくるものです。

神様を知らない人であれば、神様の栄光を表すことは人生の目的にはなりません。しかし、一度、神様を知ったならば、どんな人であったとし

ても、人生を献げて、神様の素晴らしさを表すことが、自分の生きる使命とも喜びとも目的ともなります。これは、個人差に関係ありません。どんな仕事をしていても、どんな経済的な生活を送っていても、そこで、神様の素晴らしさを指し示すことが、生きる喜びであり、生きる目的です。

また、これは、自分からの完全な解放です。自分の素晴らしさを表すことが、人生の目的ではありません。自分の惨めさを嘆くことが、自分にとって最重要課題ではありません。自分が立派であっても、自分の立派さを表すための人生は、神の栄光を表すという人生の目的から逸脱した罪の人生です。自分が立派でなくても、神様の憐れみ深さ・愛の大きさ・裁きの確かさを表すことができるなら、人生の目的を全うした祝福された人生です。

この祝福された人生を導く問いは、自分にとって嬉しいことは何かではなく、神様に喜ばれることは何かです。ローマの信徒への手紙12章1節と2節に、二回、このことが述べられています。このためには、聖書を読んで、学び、祈ることも必要です。ただ一番大切なことは、自分の人生を神様に喜んでもらいたいと願い、神様に差し出すことです。その思いを持つことです。

健康を害していたり、能力的に人より劣ったところがあるかもしれませんが、罪と汚れの中で、神様のために役立つような綺麗な部分は、自分に残っていないように思われるかもしれませんが。

しかし、神様は、誰であっても、神様を知り、神様との交わりに生きる人を、神様の素晴らしさを表す器としてお用いになることができます。神様を知るすべての人が、神の栄光を表すことを自分の人生の目的に据えることができるのです。

これは、自分で発見した人生の目的ではありません。神様が、与えてくださり、示してくださった人生の目的です。そして、このゴールは、そのゴールに至る道筋として、神と人に仕える日々の生活を指し示しています。 (岩崎 謙)

[今週の暗唱聖句] ローマの信徒への手紙 12章1節

こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。

自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。

〈聖書〉

ローマ11章36節～12章2節

「こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい」。

〈ねらい〉

私たちは神様の栄光をあらわすために生きています。栄光とは神様の輝きのこと。神様のすばらしさを私たちが輝かすこと。幼児が喜びに弾んで生きている姿はそのまま栄光をあらわしています。

〈展開例〉

ゆうたくんは一日に一回は大泣きします。かんしゃくを起こすのです。自分の思い通りにならないことがあると泣きわめきます。床にひっくり返って泣きます。時々お母さんをぶったりします。足をバタバタさせたりします。周りの人は疲れてしまいます。

えみちゃんはいつも怒っています。ほっぺたをふくらませてふくれています。周りの人も怒りたくなってきます。

けんたくんはいつもメソメソ泣いています。周りの人も悲しくなってきます。

あみちゃんはいつもうれしそうにニコニコしています。周りの人たちもみんなが幸せな気持ちになります。

さあ、神様はだれをお喜びになるでしょう。神様に似ているのはだれでしょう。

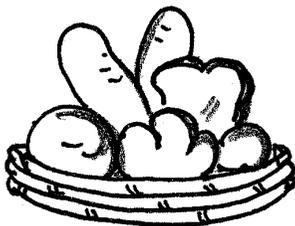
〈やってみよう〉

歌「手をたたきましょう」(動作や表情をつけて)

- 1 手をたたきましょう
 タンタンタン タンタンタン
 足踏みしましょう
 タンタンタン タンタンタンタン
 わらいましょ ワッハッハ
 わらいましょ ワッハッハ
 ワッハッハ ワッハッハ
 ああおもしろい
- 2 手をたたきましょう
 タンタンタン タンタンタン
 足踏みしましょう
 タンタンタン タンタンタンタン
 おこりましょ プンブンブン
 おこりましょ プンブンブン
 プンブンブン プンブンブン
 ああおもしろい
- 3 手をたたきましょう
 タンタンタン タンタンタン
 足踏みしましょう
 タンタンタン タンタンタンタン
 泣きましょ エンエンエン
 泣きましょ エンエンエン
 エンエンエン エンエンエン
 ああおもしろい

〈お祈り〉

神さま、明るく元気な子どもにしてください。
 神さまのかがやきをわたしたちにください。



〈ねらい〉

神さまの栄光をあらわすとは、神さまがいかに素晴らしい御方であるかということ、私たちが力の限りにあらわそうとすることです。

そのためには、まず自分が心から神さまに従順な生き方をすることが大切です。

聖書を読むこと、礼拝を守ること（日曜学校に出席すること）、お祈りすること、友達に親切にすること……、このようなことの一つ一つが神さまの御栄光にかかわることを理解させる。

〈展開例〉

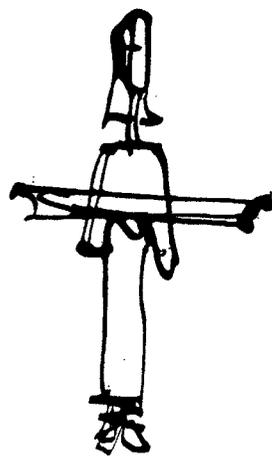
1. 神さまはどんなに素晴らしい御方でしょうか？ それを具体的に挙げてみてください。
2. そのような神さまの素晴らしさを、どうしたらお友達や、まだ神さまを知らない人たちに、伝えることができるでしょうか？
⇒（いろいろな答えがあるであろうが、何よりも）自分が神さまの子どもとして、喜んで生きていたら、それで他の人にも、神さまがどのような御方であるかということ、たとえ少しずつでも伝えていくことができるのではないだろうか。
3. 自分の生き方を通して神さまがどのような御方であるかとか、その素晴らしさといったことを伝えることができるならば、それは本当に嬉

しいことではないでしょうか。

4. そのように、私たちが神さまのために一所懸命になって、神さまのことを伝えることを、神さまは喜んでくださるのです。

〈お祈り〉

神さまの御名をほめたたえます。神さまの御栄光が、さらに多くの人たちにあらわされて、もっともっと多くの人たちが神さまの御名をほめたたえるものとされますように。



〈ねらい〉

子どもにも一人一人使命が与えられていることを知る。

〈展開例〉**○生きる目的を知る**

みなさんはおうちでお手伝いをしていますか？
どんなお手伝いをしているかな？ 買い物頼まれたり、ご飯をよそったり、お風呂の掃除をしたり。子どもにもできるお手伝いはたくさんあります。おうちの人に言われていやいややるのではなく、頼まれる前にサッとやってあげたら、おうちの人はずごく喜んでほめてくれると思います。

そんな時は気持ちがいいでしょう？ 自分が人の役に立った、自分にもできることがある、自分のしたことで誰かが喜んでくれた、と感じるのはとても大切なことです。それは生きていることに意味がある、目的があるということです。そのことを「使命」と言います。漢字で書くと「命の使い方」です。自分は何のために生きるのか、生きる目的のことです。

私たちは一人一人、神さまから生きる「使命」をいただいています。「あなたはこういうふう生きなさい」ということは聖書にたくさん書いてありますが、特にイエスさまはご自分の生き方、死に方を通してそれを教えてくださいました。自分のことばかり考えて生きるのではなく、神さまが私たちを愛してくださったように、私たちも神さまと人を愛して生きるようにと命じられています。聖書をよく読んで、神さまの愛を知りましょう。そうしたら、自分がどうやって生きて行った方がいいのかが、だんだんわかってきます。

人は一人ぼっちでは誰も生きていけません。神さまとつながって、ほかの人たちともつながって、親しく、楽しく生きる時に私たちは「生きてよかった」と感じるのです。教会に通っているみなさんがニコニコ笑って、誰とでも仲良く親切にし

ているのを見て、誰かが「神さまを信じるってすごいな！」と思うかもしれませんね。それが「神さまの栄光をあらわす」ということです。小さな子どもでもできるのです！

○使命について考える

それから、小学校の高学年になったらそろそろ「自分は将来何になろう？」ということ、真剣に考えてみるといいと思います。自分の得意なこと、好きなことから職業について考えてみてもいいし、まだ自分には何が向いているのかわからなくても、いろいろな仕事があることを調べてみるのもいいと思います。学校で、クラブ活動や児童会活動に参加してみたら、案外自分では気づいていない自分のとりえが見つかるかもしれません。ごみ拾いなどのボランティアに参加してみるのもいいですね。

大切なのは、どんな職業についても、その仕事を通して神さまの栄光をあらわすこと、人に仕えることをいつも考えるようにすることです。

「働く」という言葉は「はたをらくにする」という意味があるそうです。自分の周りの人を楽にする、喜ばせる、幸せにするために働くのです。自分のお給料のためだけではありませんね。

神さまに「自分の進む道について教えてください」と祈ってみてください。きっと自分にしかできない使命が何なのか、神さまは教えてくださいと思います。

〈お祈り〉

神さま、私たちがどんな小さなことでも、神さまの栄光をあらわすためにすることができすように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

- 子どもたちが知っている職業について挙げる。
- 将来の夢を絵に描く。

〈ねらい〉

1. 「造られた目的を知ることの大切さ」について考える。
2. 「神様の栄光をあらわす」という難しい言葉を、中学生たちが自分たちの言葉に置き換えて理解し、自分自身の問題として受け止めることができるようにと願う。

〈子どもカテキズム〉

問1：私たちは何のために生きるのですか。

答：私たちが生きるのは、私たちの神様を知り、神様を喜び、神様の栄光をあらわすためです。これが私たちの喜びです。

〈展開例〉

1. 「自分の生きる目的」について考えてみる

- 先週、「すべての道具は目的をもって作られている」ということを確認したが、今日は、「その道具は、作られた目的どおりに使われることが必要であって、作られた目的と違うことに使われることはとても変なことである」ということを確認したい。
- 例えば、ある日、ボールペンが、「私は、これから、字を書くための道具としてではなく、御飯を食べるための道具として生きていきたい。だから、今日から、私を箸として使ってほしい」と言い出したとしても、ペンを二本使って御飯を食べる訳にはいかない。もちろん、使って使えないことはないが、不便である。やはり、ボールペンは、字を書くために作られたのであり、字を書くために使われる時にこそ、最高の価値を発揮する。
- もし、私たちが、「神様が私たちが造った目的」を知らずに、あるいは無視して、全然違う目的のために生きようとするならば、それ

は人間本来の生き方とはズレているので、必ず、生きていく中で「違和感、空しさ」を持つことになる。

- 私たちは、神様から「私たちが造った目的」を正しく教えてもらい、神様に助けてもらいながらその道を生きる時に、本当の安心と充足感を得ることができる。

2. 「神様の栄光をあらわす」という言葉を、噛み砕いて考える

- 聖書（カテキズム）は、「私たちの生きる目的は神様の栄光をあらわすことである」と教えているが、この言葉はとても難しい（ピンとこない）言葉である。まず、「神様の栄光をあらわす」という言葉を聞いて一人一人が持つイメージを発表しあってみよう。
- 日本語では、なにか「神の栄光」というものがあって、「それを一生懸命がんばって輝かす」というような印象を受けるが、ウェストミンスター小教理問答の英語では、「(to) glorify God」となっている。つまり「神様の栄光をあらわす」というのは、「神様を賛美する、神様をほめたたえる」こと。
- 「賛美する」、「ほめたたえる」とは、ただ「賛美歌を歌う」ことだけではない。たとえば、美しい空や素晴らしい景色を見てそれを造られた神様のすばらしさに感動することも、苦しみや悩みの中で希望や解決が与えられた時に神様に心から感謝することも、「神様を賛美する」ことである。そのように、心の中に「神様を嬉しく思う想い」を持つことが「神様を賛美する」ことの始まりである。
- 毎日の生活の中で「神様の栄光を表している」ことを考え、発表し合ってみよう。

単元の主題が「救いの喜び」とされていますように、カテキズム問2の前半「主イエス・キリストを信じて救われること」によって、「神さまを喜び、神さまの栄光をあらわす」（問1）者となることを教える箇所が選ばれています。

(1) 徴税人の頭ザアカイ

主イエスは、エルサレムへと向かう途上で、エリコという町へ来られました。エリコは「パレスチナで最も肥沃な地」と呼ばれるほど豊かであったので、重要な課税地であったと思われます。ザアカイは、このエリコで「徴税人の頭」をしていました。当然、「金持ち」であったわけです。この世の地位も富も持っていました。

その一方で、敬虔なユダヤ人たちの間では、罪人と見なされていました。当時、徴税人であるというだけで罪人と見なされていましたが、ザアカイの場合は特に「徴税人の頭」です。また8節からは、実際に不正な取立ても行っていたと推測されます。メシアと最も関係のない存在、終わりの日の救いに与る可能性のない者と見なされていたわけです。

(2) 主イエスとの出会い

主イエスがエリコに来られたときには、人だかりになっていたのでしょうか。しかし、背の低いザアカイのために道を開けてくれる人はいませんでした。「いちじく桑」は、幹が太く、低い位置から枝が出る木なので、背の低いザアカイにも登りやすかったと思われます。彼は、先回りして、いちじく桑の木に登りました。

ザアカイのところまで来られた主イエスは、「今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」と言われました。これが「今日、救いがこの家を訪れた」（9節）となる出来事の始まりです。主イエスは、家族も共に住むザアカイの家に入り、おそらく食事をも共にしてくださいました。そして、主イエスが共に過ごしてくださいましたこの日に、「救いがこ

の家を訪れた」のです。

主イエスとの間にどのような言葉が交わされたかは書かれていません。しかし、ザアカイはキリストと共にある喜び、救いの喜びに満たされたのでしょうか。そして、今までの生き方を改めて神に従う道に立ち帰ることを約束しました。「財産の半分を貧しい人々に」施すことと、「だまし取っていたら、それを四倍にして」返すことです。それはこの世の富を捨て、「隣人を自分のように愛する」という神の律法に従う道です。（不正を行った場合の賠償については、民5:7、出エジ21:37－22:3を参照）

(3) 失われたもののために

主イエスは、ザアカイが「罪深い男」（7節）と言われていたにもかかわらず、「あなたの家に泊まりたい」と言ってくださいました。この「泊まりたい」という言葉は「泊まらなければならない」という強い言葉です。ザアカイの希望を尋ねたのではなく、主イエスが強い意思を持って、ザアカイの家で共に過ごしてくださいました。それは、主イエスが「失われたものを捜して救うために来たからである」（10節）と自ら言われる目的のためです（参照ルカ15:32）。

主イエスが近づいてくださることによって、ザアカイは「喜んで」（6節）主イエスを迎え、主イエスと共に過ごして、御心になんて生きること、すなわち神の栄光を表して生きingことを決意します。

主イエスは、ザアカイが神に立ち帰って信仰を持ち、「救い」がそこを訪れたことを喜んでくださいました。そして、その「救い」が信仰の父アブラハムの子（9節）としての信仰のゆえであることを教えられました（ガラ3:7）。

私たちもまた、「失われた者」であった私たちのために来て下さった主イエスを信じて救われ、神の栄光を表す喜びに生きましょう。（大西良嗣）

カテキズム 子どもカテキズム 問2

子どもカテキズム

問2 どうしたらそうなりますか。

答 主イエス・キリストを信じて救われること、神さまの子どもとされることです。

〈「どうしたらそうなりますか」の意味〉

「どうしたらそうなりますか」という問いの意味は、一つは「どうしたら、神さまを知り、神さまを喜び、神さまの栄光をあらわすことができますか」ということであり、もう一つは「どうしたら、神さまを知り、神さまを喜び、神さまの栄光をあらわすことが、私たちの喜びとなるのですか」ということです。この二つの大きなテーマが、「どうしたらそうなりますか」という短い文章に凝縮されています。

そこで、カテキズムが答えますのは、簡単に言ってしまうと、イエス様と出会わないと駄目だということです。イエス様と出会わない限り、本当の意味で、人生を楽しく輝いて生きることはいけません、と言っているんです。これは、考えてみれば、ものすごいことを言っているんじゃないかと思えます。つまり、イエス様抜きで人生というものを語ることはできないというのですから。世の価値観とは全く違いますね。イエス様は、決して単なる倫理道德の教師とか、愛の模範というに留まらず、私たちの人生が喜びに満ち溢れたものとなるために、どうしてもなくてはならぬお方なのです。

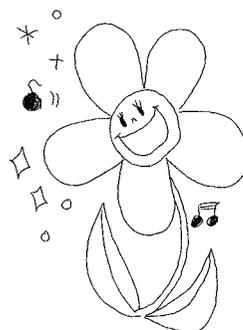
〈救われるということ〉

そのように、イエス様は、私たちの人生が喜びに満ち溢れたものとなるために、どうしてもなくてはならぬお方なのですが、もっと正確に言うならば、私たちの方でなくてはならぬものとしてイエス様をこの手に握っておくわけではなく、むしろ、イエス様の方が私たちをその御手に握ってい

てくださるんですね。別の表現を使うなら、イエス様の方から私たちのところに来て、出会ってくださった、ということです。

私たちが本当に人間として生きるために、しかも、喜びに満ち溢れて生きるためには、イエス様が私たちと出会ってくださって、イエス様のものにしてくださる、ということが、決定的なんですね。それを例証している物語の一つが、ルカ19章1～10節のザアカイの物語です。ザアカイの物語が語ってくれているのは、救いというものは、自己満足している人のところではなく、罪の中にありながらも呻いて悩んでいる人、他人の目には順調でも、心の内では深く行き詰まっている人のところに訪れるのだ、ということだと思います。その意味で、子供たちも例外ではありません。自分には救いが必要なんだということ、そして、そのためにイエス様が来てくださったんだということ、子供たちの感覚の中で、一緒に味わい、語り合うことができればと願っています。

(梶浦和城)



テキスト ルカによる福音書 19章1～10節
カテキズム 子どもカテキズム 問2

〔単元のねらい〕

主イエス・キリストとの出会いは不思議なものである。人は罪と孤独の中でまことの救い主を訪ね求め、主イエス・キリストは、そのようなわたしたちにご自分のほうから近づいて、出会ってくださる。その出会いの喜びが、人を造りかえ、神の御前に生きる者とするのである。その出会いの喜びを伝えたい。そして、主イエス・キリストと共に生きることによって人生の喜びがあることを伝えたい。この喜びをすでに味わっているならば、それを分かち合い、あるいは、喜びを味わうために共に祈る機会ともしたい。

「ザアカイ、急いで降りて来なさい」

エリコの町にザアカイという男がいました。エリコの町はエルサレムへの玄関口としてとても栄えていた町です。ザアカイは、そのエリコの町で徴税人の頭をしていて、とても金持ちでした。

あるとき、そのエリコの町に、主イエスさまが来られました。ザアカイは、「主イエスさまを見たい!」「主イエスさまにお会いしたい!」と思いました。そうして、すぐに駆け出しました。けれども、もうそのときには、主イエスさまの周りには大勢の人がいました。たくさんの人が集まっていて、背が低いザアカイは、大勢の人たちの背中が壁になって、とても主イエスさまを見ることができませんでした。

けれども、ザアカイはあきらめませんでした。「そうだ!あの木に登ろう!」。ザアカイは、主イエスさまが歩いておられる道の先に、いちじく桑の木があることを知っていました。あの木なら、背が低いザアカイにも登りやすく、しかも葉っぱが茂っていて、ザアカイをうまいこと隠してくれます。そうっとのぞき見るのには、ちょうどよいのです。ザアカイは、いちじく桑の上に乗って、葉っぱの陰に隠れて、主イエスさまがその下をお通りになるのを待つことにしました。

ところで、ザアカイは、どうしてそこまでして、主イエスさまを見たかったのでしょうか。主イエスさまが有名な人だったからでしょうか。そうい

う気持ちもあったかもしれません。でもそれだけではないのではないかと思います。このザアカイは、おそらくさびしい人ではなかったかと思うからです。そして、そのさびしさを満たしてくれるかもしれないと期待して、主イエスさまをぜひ見たいと思ったのではないかと思うのです。

彼は徴税人の頭でした。徴税人とはみんなから税金を集める仕事ですが、実はこのころの徴税人は、周りの人たちからとても嫌われていました。ひとつには、お金を集めるときに、決められた以上に集めて、だまし取ることをしていたからです。ザアカイがお金持ちであったというのは、そのようにしてだまし取っていたということなのです。もうひとつは、当時のユダヤはローマ帝国に治められていて、徴税人という仕事は、ローマ帝国という外国のために働くことだったのです。ザアカイは、もちろん、ユダヤ人です。そのユダヤ人が、どうしてローマの手先になって税金を集めるのか。そう言われて、徴税人という仕事は、とても嫌われていたのです。

ですから、ザアカイはお金はたくさん持っていました。でも、おそらくお友だちはほとんどいなかったのです。「ザアカイ」という名前には、「正しい」とか「清い」という意味があります。お父さんお母さんは、ザアカイに正しく清い人として生きてほしいと願ったのでしょうか。でも、「いたいあいつのどこが正しいのか、清いのか」と言っ

て陰口をたたかれる有様だったでしょう。「あいつのことをザアカイなんて呼ぶもんか」と言われて、親しくザアカイの名前を呼んでくれるお友だちは、誰もいなかったかもしれません。

ザアカイが木に登ったのも、ただ背が低くて前が見えなかったからというだけではないでしょう。大勢の人から離れて一人で主イエスさまを見るしかなかったからなのです。みんなが見に行くのだったら、きっと前に通して見せてもらえるでしょう。けれども、ザアカイの場合は、たぶん、意地悪されて見せてもらえなかったのです。木の上のザアカイの姿は、実のところ、とてもさびしそうな、独りぼっちな、孤独な姿なのです。

ですから、ザアカイは、とても驚きました。もうそれは、いちじく桑の木から転げ落ちるくらいにびっくりしたのではないかと思います。だって、いちじく桑の木の下を通り過ぎようとしておられた主イエスさまが、突然、木の下で立ち止まり、じっと上を見上げられたのです。まるでザアカイが木の上に登って、葉っぱの陰に隠れて息をひそめていることをご存じであったかのようでした。いや、ご存じだったのです。主イエスさまはおっしゃいました。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」。

ザアカイは、どうして主イエスさまが自分のことをご存じなのだろうか、とても不思議でした。それにもまして、自分のことを「ザアカイ」と親しく呼んでくださった、そのことが嬉しかったでしょう。そして自分の家にお泊まりくださる。誰もお友だちのいない、みんなから嫌われている自分のところに来てくださる。いったい何とすばらしいことか。そう思って感激したのです。独りぼっちな自分にもお友だちができた。そのことが嬉しくて、大喜びで、ザアカイは気付きませんでした。ああ人間って、生きるって、決してお金ではないんだ！ お友だちができて、人と一緒に生きることは何て嬉しいことなんだ！ 主イエスさまがお

友だちになってくださるとは、何てすばらしいことなのか。ザアカイは、さっそく主イエスさまをお迎えて、主イエスさまがお友だちとなってくださる、その喜びを豊かに味わったのです。

こうして、ザアカイは人生のすべてを変えられました。ザアカイは、だまし取っていたお金をすべて返すことにしました。そして、まだたくさんある財産も、貧しい人と分かち合いながら生きていくことにしました。もうお金を頼りにするのではない、主イエスさまを頼りにして、人と一緒に、分かち合いながら生きることにしたのです。主イエスさまがザアカイの家にお泊まりになって、つぶやく人もいたのですが、ザアカイは、もうそんなことは気にならなくなりました。主イエスさまがいつでも友だちでいてくださるからです。

主イエスさまは、「今日、救いがこの家を訪れた」とおっしゃいました。ザアカイが主イエスさまとの出会いによって心も生活も変えられたからです。罪を悔い改め、人のものを取る生活から人に与える生活へと変えられたのです。主イエスさまには、このようにわたしたちを変える力があります。主イエスさまと出会うことは、お金持ちになることよりはるかにすばらしいことなのです。

わたしたちも、このような期待をもって、いつも主イエスさまを待ち、主イエスさまと出会いたいと思います。教会に来て、主イエスさまのお話を聞くということは、ザアカイが木に登ったように、主イエスさまを見に行くということです。主イエスさまは、ザアカイを見つけて、呼びかけてくださったように、わたしたちを見つけて、親しく呼びかけてくださいます。わたしたち一人ひとりの名前を呼んでくださいます。主イエスさまは、独りぼっちな、さびしい思いになってしまうようなわたしたちを救い出すために、来てくださったお方なのです。今も、木の上に登って隠れてしまうようなわたしたちに、「急いで降りて来なさい」とおっしゃっておられるのです。（望月 信）

〔今週の暗唱聖句〕 ルカによる福音書 19章5節

ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。

〈聖書〉

ルカ19章1～10節

「ザアカイ、急いで降りてきなさい。今日はぜひあなたの家に泊まりたい」。

〈ねらい〉

イエス様ってどんな方？ イエス様とお会いしたザアカイさんのお話を聞こう。名前を呼んでもらうことは人格を尊ばれていることにつながります。愛されていることにつながります。

〈展開例〉

ザアカイさんはお金持ちでしたが、お友達がなくてさびしく暮らしていました。みんながいやがるお金を集める仕事をしていました。背が低いので、「チビのザアカイ」と呼ばれていました。

ある日イエス様がやってこられました。ザアカイはイエス様を見たくて木に登りました。するとイエス様が声をかけました。「ザアカイ、こんやあなたの家に泊めてもらいますよ」と。初めて会ったのに名前を呼んでもらったザアカイさん、うれしくてうれしくてたまりません。イエス様は私たちひとりひとりをよく知っています。名前も、ど

んな子かも、なにをしてほしいかも。ザアカイさんはイエス様を自分の家に泊めて、ごちそうをしました。そして、今までみんなから取りすぎたお金をいっぱいにして返しました。イエス様にお会いしたザアカイさんはうれしくて、しあわせでたまりませんでした。

〈やってみよう〉

歌「あなたのおなまえは」（みんなの名前を歌の中で呼び、ほめます）

みんなげんきにはくしゅして

みんなげんきにはくしゅして

みんなげんきにはくしゅして

おしえてくださいね

あなたのおなまえは（例）はるちゃん

あなたのおなまえは

あなたのおなまえは

アラすてきなおなまえね

（かわいい、かっこいい、きれいな等をつけて）

〈お祈り〉

神さま、わたしのこと何でも知っていてくださってありがとう。



〈ねらい〉

私たちがこの世を真実に生きるときに、絶対に欠かすことのできないこととして、イエスさまによる救いがあること。

この救いをもたらすイエスさまへの信仰は、神さまが私たちに与えてくださるものであること。

〈展開例〉

1. 説教で話されたザアカイさんのお話を覚えていますか。

ザアカイさんはさぞかし嬉しかったでしょうね。何が一番嬉しかったと思いますか？

⇒イエスさまに出会い、救いに入れられたことが何よりも大きな喜びであること。

2. 救われるために、何が必要でしょうか。ザアカイさんはそのために何をしましたか。

⇒救われるためにザアカイさんがおこなったことは特にない。彼はただイエスさまのところへ駆けつけて行って、どうにかしてイエスさまを見てみたい、と思っただけです。そのようなザアカイさんをイエスさまが進んで、一方的に、救ってくださった。

私たちの場合も同じです。自分でどうにかしなければ、と頑張るのではなく、神さまを求め、神さまに拠り頼むことです。そのとき、神さまは私たちを確かに救いへと入れてくださいます。

3. ザアカイさんは救われた後、どうしましたか。
⇒救われた感謝と喜びを、何らかの形であらわ

すことが大切です。神さまに愛され、救われているものとして相応しく生きようにしましょう。

〈ワーク〉

1. ザアカイさんはイエスさまを一目見ようと一所懸命になって、いちじく桑の木に登ることまでしました。

皆さんも一所懸命に行っていることがありますか。それは、イエスさまに喜ばれることでしょうか？

2. イエスさまはザアカイさんの名前を知っておられました。みんなの名前も、ご存知なのですよ。それは、一人一人を愛してくださっているからです。

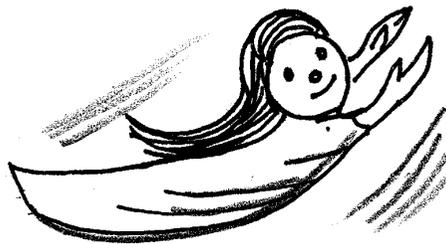
〈ゲーム〉

みんなは、いろいろな人や物の名前を記憶できるかな。

たとえば、「動物園にいるもの」という題で、一人目「さる」、二人目「さる、くま」、三人目「さる、くま、ペンギン」……というように続けていく。

〈お祈り〉

神さまは私たちを愛してくださって、信じる私たちに救ってくださいますから、感謝します。どうか、救われた喜びと感謝を、言葉と行いをもってあらわしていくことができますよう導いてください。



〈ねらい〉

イエスさまとの出会いについて考え、神さまの子とされていることに感謝する。

〈展開例〉**○ザアカイの話を通してイエスさまとの出会いを考える**

♪『こどもさんびか』（日本基督教団出版局）
68番 「ザアカイ」を歌う

今日はザアカイさんのお話を聞きましたね。

みなさんは、初めて教会に来た時のことを覚えていますか？ 生まれた時から、もっと前の生まれる前から教会に来ていよ、だから覚えてない、という人もいるかもしれませんね。

私は初めて教会に行った時のことはよく覚えています。でも、一人で教会のドアを開けて入るのは、初めはこわかったのよ、何回も教会の近くまで行って、建物だけ見て、そのまま帰ってました。今日は入ろう、入ろうと思うのですが、やっぱり勇気が出なくて入れなかったのよ。小学校の4年生の頃のことです。

その時の私はザアカイさんと同じだったと思います。イエスさまがどんなかたなのよ興味はあったけれど、ただ遠くからながめているだけ。別にそんなになかよくならなくても、様子のみるだけでいいよ。教会も、変なところだったら入らなくてもいい。嫌だったらいつでも走って逃げられる、と思っていました。

でもイエスさまは、ご自分のほうからザアカイさんに声をかけられましたね。さっきの歌のように、「ザアカイ」となかのよい友達みたいに名前を呼んで。ザアカイさんはイエスさまと会ったのは初めてでしたから、とてもビックリしただろうと思います。

入学式とか、クラス替えの時に、今まで話したことのない人に話しかけるのは、とても勇気がい

りますね。そんな時、相手のほうから話しかけてくれたらとてもうれしいと思いませんか？ ザアカイさんの場合は、それがあの有名な、大勢の人が見物に来るイエスさまだったのよですから！

私もザアカイさんと同じです。私のほうからイエスさまに近づいていったのではなくて、イエスさまのほうから近づいてきてくださったんだなあ、と今ではわかります。私はなかなか勇気が出なかったけれど、いつのまにか私の手を取って教会の中に入れてくださったんだと思います。みなさんも今日、自分で朝起きて、支度をして、頑張って教会に来たわけですけれども、実はイエスさまが「おいで」と呼んでくださってここに来たということでもあるんです。生まれる前から、イエスさまのほうから先に会ってくださって、今日まで一緒に歩いてくださったという不思議なお導きでもあるんです。

○私たちは神さまの子ども

ザアカイさんは大喜びでイエスさまを迎えました。そして彼は変わりました。自分のことばかり考えていたのに、「人のために役に立ちます、人のために生きます！」と約束しました。彼はイエスさまに救われたのよ。救われると生き方が変わります。愛されていると知った人は、自分も愛したいと思うようになるのよ。

イエスさまは神さまのひとり子ですから、イエスさまを信じて救われるということは、イエスさまを通して神さまの子どもとされることよ。神さまの子どもとされていることに感謝したいと思

〈お祈り〉

天のお父さま、私たちをご自分の子どもとしてお守りくださることを感謝します。これからもイエスさまと一緒に歩むことができますように。イエスさまの御名によって祈ります。アーメン。

〈ねらい〉

1. 登場人物（ザアカイ）に感情移入して聖書を読むと、より深くより楽しく聖書を読むことができるということを伝えたい。
2. カテキズムの言葉をザアカイの物語と関係させながら考え、より豊かに教理を理解したい。

〈子どもカテキズム〉

問2：どうしたらそうなりますか。

（どうしたら、神様を知り、神様を喜び、神様を賛美することができますか。）

答：主イエス・キリストを信じて救われること、神様の子とされることです。

〈展開例〉

1. ザアカイの「救いの喜び」について考える

- なぜ、ザアカイは「イエス様を一目見たい！」と願ったのだろうか。「有名人を見たい」というような単なる好奇心だけだったのだろうか。「いちじく桑に登る」という異常な行動から考えると、相当強い願いだったと考えられる。
- ザアカイの状況（徴税人の頭で、金持ちで、背が低い。だから、同胞からは冷たい目で見られ、お金では満たされない心を持っていたと考えられる。）を確認し、ザアカイの立場になって、なぜそれほど強く「イエス様を見たい」と願ったのか考えてみよう。
- イエス様を一目見たいのに、群衆に邪魔されて見ることが出来なかった時のザアカイの気持ちを考えてみよう。
- 一生懸命走って先回りし、いちじく桑の木に登り、木の上でイエス様を待っている時のザアカイの気持ちを考えてみよう。

- イエス様に「ザアカイ」と自分の名前を呼んでもらった時、ザアカイはどれほど驚き、どれほど嬉しかっただろうか。ザアカイの気持ちを考えてみよう。
- 急いで木を降りる時、イエス様を家に迎えて一緒に食事をしている時、そして、立ち上がって「財産の半分を貧しい人々に……（8節）」と言った時のザアカイの気持ちを考えてみよう。
- イエス・キリストを通して、ザアカイは、神様がどんな方であるか知り、神様を心から喜び、そして神様を心から賛美した。ザアカイは、イエス・キリストを通して、神様をどんな方として知ったのか考えてみよう。

2. 「主イエス・キリストを信じて救われること」というカテキズムの言葉を、ザアカイの物語と関係させながら考える

- ザアカイの物語から、ザアカイがどのようにして「神様を知り、喜び、賛美する者」に変えられたかということを読み取ることができる。ザアカイは、イエス様と出会い、イエス様に名前を呼んでもらい、イエス様を自分の家に迎え入れ、イエス様と親しく交わることによって、驚きと喜び（感動）と感謝の中で、「神様を知り、喜び、賛美する者」に変えられた。
- 「イエス・キリストと出会い、イエス・キリストが『私』の名前を呼んでいる声を心の耳でしっかり聴き、イエス・キリストを心の中に迎え入れ、イエス・キリストと共に生きる」、これが「主イエス・キリストを信じて救われること」である。

カテキズム問2後半である「神さまの子どもとされること」が語られる箇所です。神の子とされることが、「神さまを喜び、神さまの栄光をあらわす」（問1）ことと一体的であることをもヨハネの手紙一から読み取っておきたいと思います。

(1) 神の愛

何よりも初めに確認しておきたいことは、私たちが「神の子」とされたことが、神の愛によるのだということです。「御父がどれほどわたしたちを愛してくださるか」と、ヨハネは神様の愛を強調しています。この愛によって、私たちは「神の子と呼ばれる」者とされました。「事実また、そのとおりです」というのは、神の子と呼ばれるべき者とされただけでなく、実際に神の子なのだということです。

(2) 神の子であるとは

神の子であるということは、子としての身分が与えられたということです。しかし、ヨハネの手紙一は、それが単なる身分だけに留まるのではなく、私たちのあり方、生き方と切り離すことができないことを教えます。

それは、一言で言うならば「キリストに似た者となる」と表現できるでしょう。私たちは、再臨のときにキリストを「ありのままに」見て完全にキリストに似た者となります。今の私たちはまだ完全ではありませんが、私たちが「今既に神の子」である故に、キリストに似た生き方を始めています。(3:2)

(2-1) 罪を犯さない

キリストが罪を犯されなかったのと同じように「神から生まれた人は皆、罪を犯しません。」それどころか「罪を犯すことができません」(3:9)。それは、「神からお生まれになった方」であるキリストが「その人を守ってくださり、悪い者は手

を触れることができ」ないからです(5:18)。罪を犯すのではなく、「義を行う者」こそが「神から生まれている」のです(2:29)。

(2-2) キリストの「掟」を行う

それは、キリストの「掟」を行うことであると言ひ換えることもできます。「その掟とは、神の子イエス・キリストの名を信じ、この方がわたしたちに命じられたように、互いに愛し合うことです」(3:23)。

「イエスがメシアであると信じる人は皆、神から生まれた者です」(5:1)。キリストを信じて、キリストに結ばれた者には「永遠の命」があります(5:11-12)。

そして、互いに愛し合う者こそが、「神から生まれ、神を知っている」のです(4:7)。神の掟を守る者たちは「神の子供たちを愛します」(5:2)。「神から生まれた人は皆、世に打ち勝つ」(5:4)ので「神の掟は難しいものではありません」(5:3)。

(2-3) 迫害を受ける

「世がわたしたちを知らないのは、御父を知らなかったからです」(3:1)という言葉は、少し唐突な印象を与えます。しかし、「知る」ということは、単に知識として知ること以上の、愛情と交わりを伴うものです。ですから、神を知らず、神との交わりから外れた者たちには、神に属する神の子たちを受け入れることができないという意味になります。それどころか、世は神の子たちを憎みます(3:13)。従って、迫害を受けることも神の子であることの証拠です。神の子として、キリストの掟に従って生きようとしたときに、人からの冷たい視線、妨害を受けることがあるのです。

神の子であることは、生き方に関わります。私たちはまだ罪を犯す者ですが(1:10)、神の子として生きて、神の栄光を表す道を歩み始めています。(大西良嗣)

カテキズム 子どもカテキズム 問2

子どもカテキズム

問2 どうしたらそうなりますか。

答 主イエス・キリストを信じて救われること、神さまの子どもとされることです。

〈神の子であることの深み〉

クリスチャンホームで生まれ育った契約の子供たちにとって、「神さまの子どもとされる」という表現は、どこか引っかかりを感じるかもしれません。「僕たち私たちは、もう既に神さまの子どもなんじゃないの?」「それなのになぜ、神さまの子どもとされる、なんて言うの?」そう疑問に思うんじゃないかと思うんです。子供たちにとっては、不思議な言葉に思えるわけです。それにまた、近隣の子供たちにとっても、おかしな言葉に聞こえるかもしれないですね。聖書が言う神様でないにしても、どこかしら天的な存在の子どもなんだという意識があるのかもしれない。そういう子供たちに向かって、「君たちは、神さまの子どもにされる必要があるんだ」と語ることは、大変難しいことです。しかし、これはとても大切なことです。何とか子供たちの心に届く言葉で伝えたいものだと思います。

「子ども」としての感覚は、大人になると忘れてしまいやすいものです。ですが、どんなに年を取っても、誰かの子どもなんだという意識は、極めて重要なものだと思います。そういう意味で、私たち大人は、子供たちと共に「神さまの子どもとされる」ことの凄さを聖書から教えられ、語り合うことで、改めて天の父の子どもとされていることの喜びを、味わい直すことができるんじゃないでしょうか。そして、おそらく、そういうところで、イエス様が言われた「あなたがたは子ども

のようにならないければ、天の国に入ることはできない」との御言葉を、深く知ることになるのでしょう。

先祖アダムにあって、神さまの子どもとして造られたはずの私たち人間は、罪を犯して墮落したために、神さまの子どもとは言えないようなものになってしまいました。それこそ、悪魔や罪の子どもだとか言えないような者になってしまったのです。その私たちを、もう一度天の父の子どもとするために、本当の神の子であるイエス様が来てくださって、神さまのことを「お父さん」「パパ」と呼んでよい者としてくださいました。イエス様が神さまとの間に持つておられる関係が、父と子の関係ですから、この豊かな愛の交わりの中に、私たちを引き入れるため、イエス様は十字架に架かり、三日目に復活してくださったんですね。イエス様が天の父との間に持つておられるのと同じほど素晴らしい交わりを、私たちにも味わわせたいとの心からの願いをもって、イエス様は私たちを救いに来てくださいました。本当に感謝なことです。

こういう意味で、救いとは、関係の回復であり、触れ合いであると言えます。肌と肌が触れ合うような、そんな温もりのある霊的なスキンシップを、神さまとの間に持つこと、それが神さまの子どもとされる、ということなんです。そうなると、自然と笑みがこぼれて、喜ばずにはおれなくなりますね。

(梶浦和城)

テキスト ヨハネの手紙 一 3章1節
カテキズム 子どもカテキズム 問2

〔単元のねらい〕

「神の子」とされている喜びを共に味わいたい。そのために、ルカ福音書15章の放蕩息子のたとえを引用して、説教することにした。放蕩息子のたとえは、まことの父から遠く離れて生きているわたしたち罪人の姿を描き出している。また、その罪人を御自身の子として迎え入れてくださる神の愛が際だっている。わたしたちは、御父から離れていた罪人である。わたしたちが「神の子」と呼ばれることは、ただ神の愛と恵みにほかならない。この神の愛の内にとどまり、神の子として生きることへと招きたい。

「わたしたちは神さまの子どもです！」

みんなは、お父さんお母さんの子どもですね。みんなのお父さんお母さんが、みんなのことを大切に「わたしの子ども」と呼んでくださいます。みんなは、いつでも、そのお父さんお母さんのところに、「ただいま！」と言って帰ることができます。今日は、わたしたちのことを「わたしの子ども」と呼んでくださる方は、その目に見えるお父さんお母さんだけではない！ ということをお話ししましょう。

聖書には、「放蕩息子のたとえ」と呼ばれる物語があります（ルカ福音書15章11～32節）。あるお父さんと二人の男の子がいました。その下の息子、弟息子のほうが、あるとき、お父さんに言いました。「お父さん、お父さんの財産をわたしに分けてください」。お父さんは、弟息子の突然の言葉に驚きましたが、財産を分けてあげることにしました。すると、弟息子は、もらった全財産を抱えて、お父さんのところから出て行ってしまいました。お父さんの家から離れた遠いところに行って、お父さんに縛られることなく、自分の自由に生きていこうとしたのです。

遠いところでは、自分のもっているお金を好き勝手に使って、食べたり遊んだり、とても楽しく過ごすことができました。それというのも、お父さんからもらったお金がたくさんあったからです。何でも買ってあげるよと言うと、お友だちも

たくさんできました。けれども、あるとき、弟息子は気づきました。持っているお金が残り少なくなってきたのです。それで、自分も、あまり食べたり遊んだりしないようになりました。お友だちにも買ってあげることができなくなりました。すると、お金がなくなってきているのだなと気づいたので、周りからお友だちがだんだんと減っていきました。そして、とうとうお金がなくなって、弟息子は独りぼっちになりました。お金もないので、働くことにしました。けれども、これまで働いたこともなく、いったいどうすればいいのか分かりません。ようやくと働くところを見つけても、食べることさえきちんとできません。

ある日、弟息子は気づきました。ああ、自分にはお父さんがいるではないか。自分で生きていこうと思って出てきたが、それは、お父さんのお金を使っただけのことだった。結局、自分一人では何もできないのだ。そのことに気づいた弟息子は、お父さんに謝ろうと決意して、家に帰ることにしました。すると、お父さんは、遠くから自分のことを待っていてくれるではありませんか。お父さんは、遠くに出て行った自分のことをいつも見守り、帰りを待っていてくれたのだ。弟息子はそのことを知りました。

これは、放蕩息子の物語ですが、実は、わたしたちみんなの物語でもあるのです。聖書は、この

弟息子のように、わたしたちも、家を離れて遠くに行ってしまうのだと語っています。実のところ、わたしたちには、天にお父さま、このお方は目には見えないお方なのですが、天にお父さまがおられて、でも、わたしたちは、そのお父さまのことをすっかり忘れて生きているのです。放蕩息子のたとえば、わたしたちみんなに、天のまことのお父さまがおられることを教えています。

今日のカテキズムに、「神さまの子ども」とありました。実は、天のお父さま、それはまことの神さまなのですが、その神さまが、わたしたちのことを「わたしの子ども」と呼んでくださるのです。ですから、カテキズムに「神さまの子ども」と書いてある。これは、わたしたちのこと、みんなのことです。

みんなは「神さまの子ども」です。「神さまの子ども」。何だか不思議な言葉ですね。くすぐったいような、恥ずかしいような気持ちになりますね。でも、もっといっぱい言いましょ。みんなは神さまの子どもです。神さまの子どもなのです。

わたしたちは、神さまのことをあまり知りません。天のお父さまがどんなお方なのか、何を喜ばれるお方で、何を悲しまれるお方なのか、分かりません。それは、わたしたちが遠くに行っているからです。天のお父さまから離れてしまっているからです。わたしたちは、天のお父さまから遠く離れた、放蕩息子なのです。

けれども、天のお父さまは、わたしたちのことを愛してくださっています。それはもう、とてもとても愛してくださっています。ですから、放蕩息子のお父さんのように、わたしたちのことを待っていてくださいます。わたしたちが気づいて、お父さまのところへ帰って来るようにと待っていてくださいます。

そのために、わたしたちが気づくために、主イエスさまをわたしたちに与えてくださいました。

主イエスさまは、ですから、神さまの愛のしるしです。わたしたちは、この主イエスさまによって、天のお父さまを知ることができます。まことの神さまを知ることができます。主イエスさまを知って、主イエスさまを信じて、主イエスさまに結ばれて、それが、わたしたちにとって、天のお父さまのところへ帰るといことなのです。

今日の聖書の御言葉に、「御父がどれほどわたしたちを愛してくださるか、考えなさい。それは、わたしたちが神の子と呼ばれるほどで、事実また、そのとおりです」とあります。これは、わたしたちが「神さまの子ども」と呼ばれるのは、ただ神さまの愛のゆえなのだ、神さまがわたしたちのことを愛してくださっているからだ、ということなのです。わたしたちは、主イエスさまのことを知ることによって、その神さまの愛が分かるのです。天のお父さまがどれほどわたしたちのことを愛してくださっているのか、知ることができます。

みんなのお父さんお母さんは、みんなが学校から帰ってくると、「おかえり！」って言って、喜んで迎えてくれるでしょう。天のお父さま、まことの神さまも、わたしたちのことを、とても喜んで迎えてくれます。そして、お父さんとお母さんと一緒にいると安心ですね。元気が出ますね。天のお父さまと一緒にいるってということも、とても元気が出て、安心できることなんです。だって、本当の神さまがわたしたちと一緒にいてくださるってことなんですよ。

主イエスさまの御声を聞くときに、わたしたちは、本当の神さまがいつも一緒にいてくださることが分かります。わたしたちを力強く守り導いてくださっていることが分かります。そして、神さまの子どもとして生きることができるのです。主イエスさまのことをたくさん知って、わたしたちの天のお父さまのところへ帰って生きる、そこに、「神さまの子ども」として生きる、とても素晴らしい人生があるのです。 (望月 信)

[今週の暗唱聖句] ヨハネの手紙 一 3章1節より

それは、わたしたちが神の子と呼ばれるほどで、事実また、そのとおりです。

〈聖書〉

ヨハネの手紙一3章1節

「それは、わたしたちが神の子と呼ばれるほどで、事実また、そのとおりです」。

〈ねらい〉

神の子と呼ばれるほどの神の愛が注がれていることを感謝しよう。天の神さまを「おとうさん」と呼べる関係の喜びを伝えよう。

〈展開例〉

みんなはだれと一緒にいると一番うれしいですか？ きっとお父さんとお母さんですね。だってお父さんとお母さんはみんなのこと一番よく知っていてくれるからね。

でもね、それよりももっともって私たちのことよく知ってなんでも見ておられる方がいます。そう、天の神様ですね。神さまはわたしたちが立っていても座っていても寝ていてもみておられます。嘘をついたことも神さまだけは知っています。「見えないよ。どこにいるの？」って思うよね。見えない天におられて私たちの心が神様に向くとき、とてもよろこんでくださるの。私たちは心の中に罪があって「神さま」って素直に言えな

いの。でも神さまの方からそれが言えるようにイエス様を送ってくださったの。イエス様を信じる人は「ああ、神さまは本当のおとうさんだ」とわかるの。神さまを「おとうさん」と呼んでもいいなんてすごいね！

〈やってみよう〉

歌「きよいあさあけて」

- 1 きよいあさあけて
かみさまにいのる
このひこそ つよい
神の子にしてください
- 2 神さまとひとに
こころからつかえ
このひこそ きよい
神の子にしてください

出典『こどもさんびか』3番（日本基督教団出版局）

〈お祈り〉

天の神さま、あなたをおとうさんと呼べてうれしいです。あなたの子どもにしてくださいありがとうございます。



〈ねらい〉

神さまを信じることは、神さまの子とされること。

神さまは父として、私たち一人一人を愛して下さっていること。

〈展開例〉

1. 皆さんは、お父さんお母さんが好きですか。好きですね？ でもそれ以上に、お父さんお母さんは、みんなのことが好きなのです。
※嫌いであるという答えが悪ふざけではなく出てきたときには、後で個別の対応が必要となろう。また、親のいない子には特別の配慮を必要とすることは、勿論である。

2. みんながいけないことをしたときに、お父さんお母さんは、どうしますか。なぜ、そうするのだと思いますか。

答えは、やはり、みんなを愛しているからです。

3. そして、私たち人間は誰でも皆、神さまの子どもです。

神さまは、私たちが神さまを信じて、神さまに従って生きるようになることを、ずっと待ち続けてくださっています。放蕩息子のたとえのお父さんのように。

4. 放蕩息子のたとえのお父さんは、遠くに息子が見えると、すぐに自分から息子のところへと走って行きました。息子を憐れに感じて、じっ

としていることができなかつたのです。

神さまの、私たちに対する思いというのは、それほどのものであります。私たちは、それほどまでに愛されています。

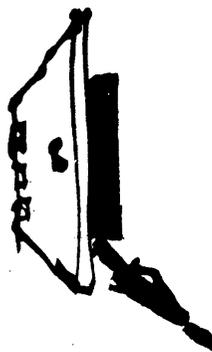
5. お父さんお母さんは、皆さんにいろいろな善いこと、楽しいこと、必要なことをしてくれませんか？

天の神さまも同じように、またそれ以上に、私たちに善いこと、楽しいこと、必要なことをして下さいます。

神さまの子とされていることを感謝しましょう。

〈お祈り〉

私たちが神さまの子とされていますことを、感謝します。どうか、神さまの子として、これからも喜んで神さまに従っていくことができますように。



〈ねらい〉

神さまの子とされていることを知り、感謝する。

〈展開例〉

○聖書親子ゲーム

紙を配り、制限時間決めて、聖書に出てくる親子の組み合わせを書く。たくさん書けた人の勝ち。聖書は自由に見てもよい。市販のカードを用いてもよい。

(例) アブラハム—イサク、イサク—ヤコブ、ラケル—ヨセフ、ハンナ—サムエル、エッサイ—ダビデ、サウル—ヨナタン。

聖書にはたくさんの親子が出てきますね。マタイによる福音書の1章を見てみると、「イエス・キリストの系図」というのがあって、人の名前がずらりと並んでいます。これはイエスさまがヨセフとマリヤから人として生まれ、そのヨセフのお父さん、そのまたお父さん……そのまたお母さん……とずっとさかのぼって記してあるものです。

みなさんも、自分が今いるのはお父さん、お母さんがいたからです。お祖父さん、お祖母さんは知っているけれども、ひいお祖父さん、ひいお祖母さん、そのまたお父さんとお母さん……と考えると、なんだか不思議な気がしてきませんか？ その誰か一人がいなくても、自分は生まれてなかったんだなあと思うと、偶然生まれてきたのではないな、という気がします。

○神の子とされることの光栄を知る

みなさんのお父さん、お母さんは、みなさんにとてもよくしてくださると思います。みなさんが大きくなるために一生懸命働いて、おいしいものを作って食べさせ、いつも健康でいられるように心をくわいて、学校のこともおけいこ事のこと、何よりも一番に考えてくださいますね。みなさんが悲しい顔をしていたり泣いていたり、病気になるったりしたら、夜も寝ないで心配したり、看

病したりしてくださると思います。時々叱られたり、あれをやりなさい、なんて言われることもあると思いますが、それもみなさんのためを思っていることだと思います。

私は早くに父親を亡くしたので、お父さんのことはあまりよく覚えていません。お父さんが亡くなった時、教会で葬儀をして、「天のお父さま」という言葉を聞いて、「あれ、私にはまだお父さんがいるんだ。人間のお父さんはいなくなってしまうけど、天にお父さまがいるんだ！」とうれしくなったのを覚えています。

お祈りをする時、神さまのことを「天のお父さま」と呼びますね。でも私は時々、「お父さま」と呼んでもいいのかな、と思う時があります。それはたいてい、神さまとの約束を守らなかった時です。悪いことだとわかっていても、誘惑に負けてしまった時。忙しくて目の前のことにばかり気をとられて、お祈りや聖書を読むことをサボってしまった時。自分のことばかり考えて、人の気持ちを考えずに傷つけてしまった時。本当に自分は神さまの子なのかな、と思う時もあります。

本当は、人間はたくさん罪を犯して、天のお父さまのそばをはなれてしまったはずなのです。とてももう「お父さま」なんて呼べるはずもないのに、イエスさまを信じる人は誰でも、もう一度神さまの子としていただけるのです。

それはイエスさまが私たちの罪の身代わりになって十字架の上で死んでくださったからです。本当なら私たちが受けなければならないはずの罰を、イエスさまが代わりに受けてくださったので、もう一度神さまの子どもとされるチャンスが与えられたのです。それはとてもうれしい、すばらしいことなのです！

〈お祈り〉

天のお父さま、ひとり子であるイエスさまと同じように私たちを愛してくださることを感謝します。イエスさまの御名によって。アーメン。

〈ねらい〉

「神様の子供とされている喜び」を中学生たちに伝えたい。

〈子どもカテキズム〉

問2：どうしたらそうなりますか。

(どうしたら、神様を知り、神様を喜び、神様を賛美することができますか。)

答：主イエス・キリストを信じて救われること、神様の子供とされることです。

〈展開例〉**1. 「父と子（親と子）」という関係について考える**

○「神様が私の父となって、私は神様の子供になる」と聖書は教えているが……、

Q. 「親と子」という関係は、そもそもどういう関係なのだろうか。

Q. 私と神様が「父と子」という関係ならば、それはどんな関係なのだろうか。

Q. 「神様の子供」になるとどんな嬉しいことがあるのだろうか。

○自分が親になったと仮定して、「親と子供」の関係について考えてみよう。

Q. あなたに子供が生まれたとき、あなたは子供に対してどんなことを思う？

Q. あなたの子供が勉強も運動も苦手で、上手に出来ることがあまりなかったら、あなたはどうする？（叱る？ 馬鹿にする？ 励ます？）

Q. あなたの子供が迷子になったとき、あなたはどうする？（怒る？ 放っておく？ 捜しに行く？）

Q. あなたの子供が悩んで悲しんでいるとき、あなたはどうする？（無視する？ 見下す？

話を聴く？）

Q. あなたの子供が川で溺れて死にそうになっていたら、あなたはどうする？（叱る？ 放っておく？ 川に飛び込んで助ける？）

Q. あなたの子供が一日中、一言もあなたに話しかけなかったらどう思う？（嬉しい？ 悲しい？ 心配になる？）

2. 「父なる神様（父となってくださった神様）」と「私」の関係について考える

○父なる神様は、私が何かで失敗したとき、私を心から励まし、次は失敗しないように知恵を与えてくださるに違いない。父なる神様は、私が生きていく中で道に迷ったとき、私を心配してどこまでも捜しに来てくださるに違いない。父なる神様は、私が悩んで悲しんでいるとき、私の話を聴いてくださり、私を慰めてくださるに違いない。父なる神様は、私が生きていく中で苦しみのあまり死にそうになっていたら、一目散に飛んで来て助けてくださるに違いない。父なる神様は、私が一日中神様にお祈りしなかったら、悲しくなって心配されるに違いない。

3. 「神様の子供とされる」ということが、どうしたことなのか考える

○神様は、イエス・キリストを信じる者に、「罪の赦し」と「永遠の命」という恵みだけではなく、さらに、「子とされる喜び」を与えてくださった。私たちは、神様の子供となって、父となってくださった神様と親しく「親子らしい交わり」をしていく中で、本当に「神様を知り、神様を喜び、神様を賛美することができる。」

(1) 背景と語釈

サマリア教においてはモーセ五書だけが正典ですから、ダビデが「神なる主の神殿はここにこそあるべきだ」といってエルサレムに神殿建築の場所を選んだことを記す歴代誌上22章1節は問題になりません。そこで、「あなたが入って得ようとしている土地に、あなたの神、主が導き入れられるとき、ゲリジム山に祝福を[……]置きなさい」(申命記11:29)、あるいは「あなたたちがヨルダン川を渡ったならば、民を祝福するために、シメオン、レビ、ユダ、イサカル、ヨセフ、ベニヤミンはゲリジム山に立ち」なさい(申命記27:12)というモーセ五書内の個所に即して、ゲリジム山で礼拝をしました。サマリアの女が「わたしどもの先祖はこの山で礼拝しました」(4:20)と言っているのはゲリジム山のことで、それに対して主イエスは「あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る」(21)と言い、その時を「まことの礼拝をする者たちが霊と真理をもって父を礼拝する時」(23)と言い、「今がその時である」と言われたのでした。

「生きた水」(10)とはヘブライ語では「流水」のことで、第二神殿時代には礼拝前の沐浴は「生きた水」でなければならなかったことが、真の礼拝の始まりへと話題が進む土台になっているようです。井戸の水は流れていませんから「生きた水」ではありません。ですから「あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう」とあるのは、「その人」は「井戸の水ではなく」生きた水を与えたことであろう、という対比です。それは「この水を飲む者はだれでもまた渇く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない」という対比を準備するものです。そして「わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」とあるの

も、生きた流水だから井戸水ではなく「泉となり」、永遠の命「へと流れ込む」水というイメージです。

(2) 御言葉をていねいに聞くこと

このサマリアの女の人生はなかなかうまくいかない人生だったようです。そのはてに彼女はすさんだような気持ちになっていたかもしれません。しかし、主イエスは狙い澄ましたようにその彼女に話しかけてくださいました。私たちの人生にもなかなかうまくいかないときがあり、気持ちがすさんでくることもあるでしょう。しかしそのようなときこそ、まず語りかけてくださる主イエスの御言葉に心を込めて耳を傾けることです。そのとき主イエスは私たちの苦しい状況を完全に射抜くような御言葉をくださるでしょう。そして私たち自身の心の、主イエスに対する飢え渴きを知らせてくださるでしょう。そのとき私たちは「私にもその水をください」と主イエスに向かって一步を踏み出すようにして、求めることができるようにされます。「求めよ」といわれても私たちはなかなか自分自身の本当の魂の求めを明らかにすることができません。しかし礼拝においていつも主イエスの方から語りかけてくださる御声にていねいに耳を傾けると、主の方から私たちの本当の求めを明らかにしてくださり、求めることができるようにしてくださり、そして与えてくださるのです。そのようにして私たちは、礼拝における主イエスとの魂の会話こそ、尽きることのない命の泉であることを知ります。それが霊と真理をもってする礼拝にはほかなりません。イエス・キリストの到来とともに、そのように「礼拝する時」が来ました。そして今や、私たちが礼拝に集うそのたびに、主イエスは「今がその時である」と言っているのです。(赤石純也)

カテキズム 子どもカテキズム 問3

子どもカテキズム

問3 私たちがすべきことは何ですか。

答 信じる私たちは、

主の日にキリストの教会に来て礼拝をささげ、
毎日、神さまにお祈りします。

カテキズムの問3は、問1と問2を受けて、「私たちがすべきことは何ですか。」と問うています。問1と問2を受けていますから、気持ちとしては「それでは、私たちがすべきことは何ですか。」となるのだと思います。つまり、少し詳しく言い換えますと、「それでは、そのように、イエス様を信じて救われ、神さまの子どもとされた私たちが、本来の生きる目的を知った喜びの故に、しないではおれないことは何だろうか？」と問うわけです。そこで、答えとして、それはやはり神さまを礼拝することと、神さまに祈ることだと思います、と告白しているんですね。

しかし、もちろん、これだけではないでしょう。他にもいろいろと挙げる事ができると思います。ただ、ここでは、目に見える分かりやすい事柄として、簡潔に二つのみを掲げているわけです。子どもの讃美歌に、「三つの約束」という讃美歌がありますが、その中では、教会に毎週来ること、御言葉を毎日読むこと、毎日お祈りすること、の三つが挙げられています。カテキズムの「礼拝すること」と「祈ること」に加えて、聖書を読むことが挙げられていますね。その意味では、カテキズムは一つ項目が足りませんが、聖書に親しむことは、礼拝の中ですることとして考えているのでしょう。それはそれとして大切なことだと思います。説き明かしてくれる人がいないと、聖書を読んでも意味が分からないということがよくあるからです。いずれにしましても、クリスチャンになっ

たはいいけれども、じゃあこれから何をしたらいいのか、というのは、意外と分かりにくいものです。それは、子どもとても同じなんだと思います。そこで、道しるべと言いましょか、記憶することのできる数の範囲内で、ルートマップが必要になってきます。それが「礼拝すること」と「祈ること」だというわけです。

さて、そこで「礼拝すること」に関してですが、カテキズムでは詳しく触れられてはおりませんが、ただ形だけ礼拝していても意味はありません。ヨハネ福音書4章23～24節でイエス様が言われましたように、「霊と真理による礼拝」でなければなりません。この「霊と真理による礼拝」というのは、分かりやすいようで、意外に分かりにくいんじゃないかと思うんです。それは「上辺だけじゃなくて、真心をもって」という意味以上に、イエス様の十字架と復活によって、新しく生まれ変わった者として、また、天の父の子どもとされた者として、という意味があります。ここでも、イエス様が決定的なわけです。「霊」も「真理」もイエス様抜きでは考えられません。ですから、御子イエス様に救われ、本当の意味で神の真理にあずかった者たちだけが、神さまの御心に適う礼拝をささげることができるんだ、ということなのです。私たちは、その特権にあずかっているんだ、という喜びの中で、礼拝をしよう、お祈りしよう、カテキズムは語っているんですね。

(梶浦和城)

テキスト ヨハネによる福音書 4章13～15、21～26節
カテキズム 子どもカテキズム 問15

〔単元のねらい〕

私たちの礼拝は、主イエス・キリストを、ただ一つの土台とする。キリストに基礎をおく礼拝こそ「霊と真理による」まことの礼拝であることを学ぶ。言い換えれば、「霊と真理」は、キリストを通して神を知るときにのみ、私たちにとって明らかな恵みとなる。「霊」にまつわるさまざまな流行があり、子供たちの心も容易に食べ物にされかねない。霊と真理による礼拝生活は、明るくそして真っ直ぐな喜びの人生を生み出すはず。テキストは、人生の大きな行きづまりを経験している一人の女性が主イエスに出会い、まことの礼拝への道を示されることによって、失われた喜びと真っ直ぐな人生を回復してもらう物語である。霊と真理そのものであるキリストとの出会いが、子供たちの日々の生活にも始まっている。いよいよ真っ直ぐにキリストへと向かうよう励まし合い、子供たちと共に「霊と真理」の礼拝共同体を築いてゆきたい。

「礼拝って何だろう？」

毎週、日曜日にあつまって礼拝します。だれかが皆さんに「礼拝って何？」と尋ねたら、あなたはどうか答えますか。神さまは、私たちの目には見えない方です。目で見ることができるものを、私たちは決して拝みませんね。おいしい食べ物は感謝していただきます。でも食べ物を拝むわけではありません。サッカーが大好きな人は、思い切りボールを蹴ります。ピアノやオルガンを弾く人は、心をこめて演奏します。でもサッカーボールやピアノを拝む人はいませんね。見えるものは、拝むのではなく、感謝していただき、喜んで用いるために、神さまが私たちにくださったものです。神さまだけが、拝む（礼拝する）のにふさわしい方です。

本当の礼拝のことが、分からないで、つらく淋しい生活をしている女の人がここにいます。サマリアという町の人でした。この人は何度も結婚して、そして何度も相手の男の人と別れてきました。結婚して、そして別れてしまうことは、とてもつらく苦しいことでしょう。愛しているから結婚したはずですね。そして人を愛するということが、本当に大切なことですが、何よりむずかしいこと

でもあります。

『子どもカテキズム』15問に「人間にとって生きるとは、神さまを礼拝すること、お友だちを愛することです」と教えられています。私たちは大切な命と心を神さまから与えられました。この大切な命と心は、神さまを礼拝し、そしてお友だちや家族を愛することによって、ほんとうに元気になり、明るくされます。今日の聖書で、イエスさまと出会った女の人は、人を愛することができず、神様を礼拝することもできない、さびしく暗い毎日を歩んでいたようです。愛してほしい、大切にしてほしい。いつもいつも、そのことを願っています。でもこの女の人は、せっかく結婚した夫から愛されず、そして自分も夫を愛することができません。それで何度も結婚し、何度も別れてしまったのです。

イエスさまは、サマリアの女の人が何度も結婚して別れたことを、知っておられます。でもそのことを咎めるよりも、この人の悲しい心、渴いた心に目をとめてくださいました。この女の人の心は、すっかり渴いています。心を満たしてくれるものがないのです。『子どもカテキズム』で、人が生きることは、神さまを礼拝すること、そして

お友だちを愛すること、と教えていました。この二つがなければ、人は人間らしく生きることができません。そして、イエスさまと出会ったこの女の人は、(礼拝と愛の)二つとも失ったままです。

「谷川の流れをしたう 鹿のように
主よわがたましい あなたを慕う……」

というすてきな賛美歌があります。動物にとって、おいしく清潔な水は欠かせません。だから谷川の水をもとめて、谷に下りてゆくのです。渴きをいやしてほしいのです。同じように、いえそれ以上に、私たちににとっては、神さまを喜び、神さまに祈ることは、決して欠かせないことです。神さまを愛すること、神さまの愛を学ぶこと。それが私たちの心の渴きを癒して、喜びを与えてくれるのです。そして、人を愛すること、人から大切にされることもそうです。

イエスさまは、この女の人の渴いてしまった命と心に、本当の礼拝を教えておられます。「まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である」(23節)。「神は霊である。だから、礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない」(24節)。

神さまは、いつでもどこでも、私たちと一緒におられます。私たちのお父さんやお母さんは、いつでも皆さんと一緒にいてあげたい、いつもみんなを守ってあげたいと思っています。でも、お父さんもお母さんも、いつでもどこでも、みんなと一緒にいることはできません。どんなに強いお父さんでも、子どもの心や体を、いつでも守ってやれるわけではありません。けれども神さまは、いつでもどこでも一緒におられます。

私の教会には、今、外国で勉強している何人かの子どもがいます。日曜学校の生徒だった人たちです。遠い外国にいる子どものことを、家族が心配するのはどうぜんです。風邪を引いても、看病してあげることできないほど遠いのです。心配

しないはずがありません。でも、子どもたちが外国で近くの教会に行って礼拝します。教会に行くと、親切にしてくださった、という報告が電子メールで届きます。それは、家族にとって、また教会の人たちにとって、何より大きな安心なのです。

神さまは「霊」の方です。どんなときも、私たちを包み、私たちがどのようなであっても、私たちを愛してくださいます。私たちは時に悪い考えをもち、間違ったことをしてしまう。時には不安になり、時に怠けることもある。それでも、神さまは決して私たちを裏切ることがありません。変わることをない愛、変わることをない恵みと真実をもって私たちのそばに、私たちと一緒におられるのです。どんなことがあっても、「霊と真理」である神さまは、私たちから離れず、助け、導き、教え、そして私たちに永遠の命を与えることができます。

イエスさまに出会った、あの女の人は、神さまがどんな方であるか、まだ知りませんでした。でも、イエスさまと出会うことによって、本当の神さまを知ることができました。イエスさまは、神さまが霊であり真理であることを、私たちにも教えてくださいます。イエスさまを見れば、神さまが霊であり真理であることが分かります。イエスさまを通して祈れば、神さまはその祈りを聴いてくださいます。

イエスさまを信じるなら、私たちは神さまの子どもとされて、命も心も満たされます。イエスさまを信じて神さまを礼拝すれば、私たちの心は恐れから自由にされます。あのサマリアの女の人も、イエスさまに出会い、イエスさまから、本当の礼拝を学びました。神さまの救いが、どんなにすばらしく、力強いかを知りました。きっと、この人の命も心も、イエスさまによって満たされたにちがいないと思います。命と心が、カラカラに干からびたこれまでの日々を、もう後ろに投げ捨てることができます。神さまを礼拝し、人を愛することが始まったからです！

(小野静雄)

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書 4章23節

まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。

〈聖書〉

ヨハネ4章23節

「まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る」。

〈ねらい〉

主イエス・キリストを土台とする礼拝、霊と真理により礼拝をささげよう。幼い子は「霊と真理」と言われても理解できない。見えない神を心で信じて日曜日に礼拝をささげる大切さを伝えよう。

〈展開例〉

自動車はガソリンを入れて走りますね。ガソリンがなくなると動きません。私たちも食べたり飲んだりしないと動けなくなります。

私たちの心はどうでしょう？ 一週間に一回きれいにしないときたなくなります。そして心が元気に動かなくなるのです。そのためにどうしたらいいかな？ 神様のところに行ってきれいにしてもらいましょう。新しいパワーをもらいましょう。神さまからいただく食べ物は聖書の言葉です。それを聞くと元気になります。だからお父さんやお母さんと一緒に日曜日の礼拝を守りましょう。む

ずかしいおはなしで子どもにわからないこともあります。でもそれでいいのです。神様に「ありがとう」と「ごめんなさい」を心の中でいみましょう。礼拝する子どもを神様は喜ばれます。神さまは新しい力をくださいます。

〈やってみよう〉

歌「あっちのいえから」の替え歌

あっちのいえから（ボンボン）

こっちのいえから（ボンボン）

キミもボクも

あなたもわたしも あつまってきた

きょうもイエス様ここにいる

みんなささげる礼拝

子どものわたしもささげます（トン）

※「ボンボン」は拍手、「トン」はおひざ

出典『こどもさんびか』94番（日本基督教団出版局）

〈お祈り〉

神さま、いつも日曜日教会に来てありがとうございます。ごぞいます。心をこめて礼拝をおささげします。



〈ねらい〉

心から神さまを喜ぶ。
神さまを愛し、家族やお友達を愛する。

〈展開例〉

今朝、みんなはこうして教会学校に来ていますね。どうしてでしょうか？（自由に発言させる。）

教会学校では、何を教えてもらうのでしょうか？学校の勉強との違いはどんなところにありますか？

何よりも大きな違いは、教会学校のでは、神さまについて、イエスさまについて教えています。大人も子供も一緒に神さまを礼拝することです。

では、どうして毎週教会学校に来るのはどうしてでしょうか？

そうです。先週も学んだように神様を信じてイエスさまを信じて救われた私たちは、神さまの子供とされたのです。子供というのは親の家にいるのが当然ですね。

みんなは、毎日学校に行っていますね。そして学校からそれぞれの家に帰ります。家についてランドセルを置くとちょっとホッとしませんか？「お母さんただいま！」って家に帰りますね。それをたとえば間違っ、となりの家に帰ってしまったらどうでしょうか？びっくりして、緊張してしまうでしょう。誰だって自分の親のところにいると、心からのんびりしてうれしくなるのです。

私たちは神さまの子供とされたのですから、神さまの家に帰ってきたら、心からホッとして、うれしくなって、「神さまへ、ただいま」って言い

たくなります。私たちは神さまの子供となったのですから、こうして神さまの家である教会にくるのです。そして、毎日、神さまにお祈りして過ごしましょう。

〈やってみよう〉

今日はこの讃美歌をいっしょに歌って見ましょう。

♪ラララ ジョイジョイ♪

いのちのことは社『ブレイズ・ワールド』31
(ブレイズワールドシリーズ、ジョイ)

※ジョイというのは喜びということです。

〈お祈り〉

神さま！ 私たちを神さまの子供としてくださって、ありがとうございます。毎日を喜んで過ごすことができるように、守ってください。



〈ねらい〉

「礼拝」の大切さを学ぶ。

〈展開例〉**○「礼拝」は教会の心臓です**

わたしたちは、今「分級」を行っています。それでは、さっきは何をしていたでしょうか。そうです、「礼拝」ですね。礼拝の中で「礼拝とは何でしょうか」というお話を聞きました。

「礼拝」とは何でしょうか。みんなで一緒に考えてみたいと思います。私が最初にお話したいことは、「礼拝」は教会の心臓です、ということです。

「心臓」とは何でしょうか。もちろんわたしたちの胸のところに、いつも動いているものです。一生、動いています。これが止まると困ります。

「礼拝」も同じです。止まると困るものです。わたしたちの心臓が「今日は疲れたから休み！」とか「面倒くさいから動きたくない！」という理由で止まってしまうとしたら、わたしたちは死んでしまいます。「礼拝」をやめることは教会が死んでしまうことと同じです。

わたしたちは時々「礼拝」を休むときがあるかもしれません。「風邪を引いたから」、「宿題が終わってないから」、「部活があるから」、「雪が降っているから」、「家族と一緒に出かけから」、などなど。自分の力や願いだけではどうすることもできない事情もあるでしょう。「本当は教会学校に行きたいのに今日は行けないよー。どうしよう」と悩んだ人もいるでしょう。泣きくなる日もあるかもしれません。私はそのような人のことを「ダメな人だ」とか「困った人だ」と言いませんし、思いません。

「ダメな人」とも「困った人」とも思わないどころか、私はみなさんに良い意味で安心してもらいたいと思います。どんなことがあっても「礼拝」は毎週必ず行われます。一人一人の都合が悪くても、教会では礼拝が行われます。そして礼拝は世界が終わるまで続けられます。これから何千

年も何万年も続けられます。礼拝は教会の心臓だからです。「今週は出席できないけど、来週は出席しよう。今月は無理だけど、来月から出席しよう」。ぜひそういうふうを考えてくださいね。「あーあ、休んじゃった。きっと教会学校の先生は怒ってる。友達も怒ってる。怒られるのが怖いから、もう行かない」。そんなふうに思わないでくださいね。

大切なことは、教会では毎週必ず「礼拝」が行われているのだということを決して忘れないことです。出席できないときは、礼拝が始まる時刻が来たら、そのときいる場所で、神さまにお祈りしてくださいね。ヒクヒク怖がりながら「神さま、今日は礼拝に行けなくてすみません」でなくていいです。「神さま、いつも私を助けてくださってありがとうございます！」と感謝の祈りをしてほしいと思います。

○「礼拝」の中心は聖書のお話を聞くことです

それでは、毎週の「礼拝」で、わたしたちは何をするのでしょうか。その答えは、「神さまのみことばを聞くこと」です。

さっきは「礼拝」は心臓ですと言いました。心臓の仕事は血をわたしたちの体に流し続けることです。礼拝の仕事は、わたしたちの心と体に「神さまのみことば」という血を流し続けることです。

礼拝の中で最も大切なことは、わたしたちは「神さまのみことば」によって生きているのだということ、心と体で感じることです。また「みことば」によってわたしたちに命を与えてくださる神さまに感謝することです。「神さまのみことば」は聖書です。だから、礼拝では毎週聖書のお話があるのです。

〈お祈り〉

天のお父さま、どうかわたしたちが「礼拝」を大切にすることが出来ますように。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

1. 父なる神様が、私を礼拝者として招き、導いてくださっていることを伝えたい。
2. 礼拝で最も大切なのは、救い主であるイエス様に対する感謝であるということを伝えたい。

〈子どもカテキズム〉

問3：私たちがすべきことは何ですか。

答：信じる私たちは、主の日にキリストの教会に来て礼拝をささげ、毎日、神様にお祈りします。

〈展開例〉

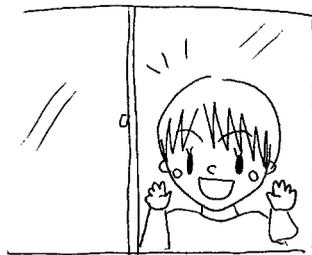
1. 「礼拝」について、みんなで話し合ってみよう

- Q. 「礼拝」では、どんなことをする？
 (賛美歌を歌う、お祈りをする、聖書を読む、説教を聞く、献金をする……)
- Q. 礼拝において一番大切なことは何だろう？

2. サマリア人の女性に語られたイエス様の言葉(ヨハネ4:21-24) について考える

- 神様を礼拝するときが一番大切なことは、「イエス・キリストによって礼拝する」こと。賛美歌を歌うときも、お祈りをするときも、聖書を読むときも、説教を聞くときも、献金を献げるときも、すべてイエス様によってする。イエス様を忘れた礼拝は、もはや礼拝ではない。
- 「霊と真理をもって礼拝する」というのは、「イエス・キリストをもって(イエス・キリストによって、イエス・キリストを通して)礼拝する」ということ。

- 「父は、このように礼拝する者を求めておられる」とあるが、父なる神様は、ただそのような礼拝者を「求めている」だけではない。父なる神様は、御子イエス・キリストを私たちのもとに遣わし、そして、私たちの罪をすべて贖い、私たち一人一人に信仰を与え、私たちを「霊と真理(イエス様)によって礼拝する者」として新しく造り変えてくださった。
- 私が「よし、私は神様の子どもになろう」と決心するよりも前に、神様が「よし、私は、○○の父になろう」と決心して、イエス様を救い主として送り、私たちの父となってくださった。
- 神様を礼拝するとき大切なことは、「私が神様を礼拝する者とされていること」に感謝と賛美をささげ、そして、「神様を礼拝できる道を切り開いてくださったイエス様に対する信仰と感謝」をもって礼拝することである。



(1) 大きな流れ

「あなたがたは間もなく聖霊による洗礼を授けられる」(使徒言行録1:5) という復活の主イエスの約束の実現であり、洗礼者ヨハネによって「その方は聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる」(ルカ3:16) と予告されていた出来事です。洗礼者ヨハネが「来るべき方」のお働きをただこの一点において捉えていることを考えれば、キリストの御業のクライマックスといっても過言ではないでしょう。十字架と復活が「私たちのため」だったというリアリティーをもって立ち上がり、私たちを生かすリアルな「出来事」となるのは「聖霊による洗礼」においてだからです。

聖霊は「父が約束されたもの」(ルカ24:49、使徒1:4) です。そして「高い所からの力」(ルカ24:49)、「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける」(使徒1:8) と言われているように、私たちの力です。それはどんな「力」なのでしょう。

マルコやマタイは、主イエスご自身が洗礼を受けられたとき「霊が鳩のように御自分に降って来るのを御覧になった」(マルコ1:10、マタイ3:16) と書いています。ルカは「聖霊が鳩のように目に見える姿で」と強調します。そしてそれは主イエスが「御覧になった」だけではなく、実際に「イエスの上に降って来た」(ルカ3:22) 客観的な出来事です。そして十字架の上で主イエスは「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」(ルカ23:46) と言って、父なる神さまに霊を返して息を引き取られます。洗礼から十字架の死に至るまで主イエスのうちにあったその霊が今やペトロたちに注がれて教会を生み出したのです。教会に与えられている霊とは主イエスの霊です。私たちの「力」と

は主イエスの「力」そのものなのです。

(2) 神の収穫である私たち

五旬祭とは旧約聖書では「七週祭」と言われている収穫祭で、春の最初の収穫の感謝を捧げる祭りです。「七週間を経た翌日まで、五十日を数えたならば」(レビ記23:16) とある「五十」のギリシャ語からペンテコステと呼ばれます。過越の祭り、仮庵の祭りと並んで、年に三回、エルサレム神殿に巡礼すべき三大祝祭日のひとつですから、「エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいた」(使徒2:5) だけでなく、この日には「滞在中の者」(2:10) がごった返していたはずで、「あなたの神、主より受けた祝福に応じて、十分に、あなたがささげうるだけの収穫の捧げ物をしなさい」(申命記16:10) と命じられているこの祭りのとき、ペトロたちはいわば自分たち自身が神の収穫物として捧げ物となったのです。このとき教会が誕生しました。主イエスはその御業のクライマックスとして、ご自身の聖霊を与えてくださることにより、神さまの収穫として教会を造ってくださったのです。キリストの聖霊が私たちに十字架の贖いと復活の命とを当てはめてくださったとき、「わたしたちは主のもの」(ローマ14:8) とされました。ペンテコステは私たちが主のものとされたことの喜びの祝いです。それと同時に、「あなたの神、主より受けた祝福に応じて、十分に、あなたがささげうるだけの収穫の捧げ物をしなさい」と命じられている者として、なおいっそう信仰の実を結び、主への捧げ物とすることができるよう祈るときでもあるでしょう。(赤石純也)

5月11日 「聖霊降臨・教会の誕生」 カテキズム研究

カテキズム 子どもカテキズム 問3

子どもカテキズム

問3 私たちがすべきことは何ですか。

答 信じる私たちは、

主の日にキリストの教会に来て礼拝をささげ、
毎日、神さまにお祈りします。

今日はペンテコステ、聖霊なる神さまが降られたことをお祝いする記念の日ですから、カテキズムの問3を、聖霊なる神さまの視点から見つめ直してみましょう。

先週は、霊と真理による礼拝とは、御子イエス様の救いにあずかって、天の父の子どもとされた者たちこそがささげることができる礼拝だということを知りました。そういう意味での礼拝を、私たちは毎週ささげているわけですが、実際にそのような礼拝をささげることができるようにしてくださっているのは、聖霊なる神さまなんですね。言わば、聖霊なる神さまは、陰の立て役者なわけです。縁の下の力持ちとなって、「アッパ、父よ」と祈らせ、天の父の子どもとされた者として愛の交わりを持たせてくださっているのです。振り返ってみれば、イエス様との出会いを与えてくださったのも、実は聖霊なる神さまだったのです。しかし、聖霊なる神さまは言わば、控えめな方であり、表舞台には立とうとはされないお方ですから、黒子のように私たちの背後で活躍してくださっているんですね。

聖霊なる神さまは、今までもイエス様を筆頭に、弟子たちや群衆など人々の内に力強く働いておられました。ペンテコステの日には圧倒的な目に見える仕方でも、弟子たちに降られましたのは、もはや彼らが部屋の中に閉じこもって隠れていないで、勇気を持って公けにクリスチャンとして歩む

ためでありました。それまでは恐れや確信の無さのために、自分たちがイエス様のものであることを人々から隠していたのですが、聖霊なる神さまが降られてからは、もうイエス様のものであることを恥としないで、むしろ溢れ出る喜びをもって、周りの人たちの目の前で、礼拝したり、祈ったりするようになったのです。救い主イエス・キリストにあって。これは、今の私たち、そして子供たちにとって、とても重要なことだと思います。自分たちがイエス様のものであることや、それ故にイエス様を通して、神さまを礼拝し、神さまに祈っていることは、なかなかクラスの友達に言えないことが多いからです。どこか、友達から隠しておいて、ばれないようにしたいと思ってしまう。知られることは恥ずかしいことだと考えてしまう。そういうところでこそ、聖霊なる神さまに満たしていただくことが、すごく大切なわけです。聖霊なる神さまが、この自分の内に満ち溢れて、私の確信や勇気や力になってくださらないと、せっかく私の存在の中心に灯された大きな喜びの炎が、消えてしまいそうになるからです。

こういうわけで、御子イエス様の救いにあずかって、天の父の子どもとされた私たちが、この世の真っ只中で喜びと勇気をもって、神さまを礼拝し、神さまに祈る生活を送るためには、是が非でも、聖霊なる神さまに満たしていただくことが必要なのです。
(梶浦和城)

テキスト 使徒言行録 2章1～13節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問65

〔単元のねらい〕

聖霊の降臨。それは神の恵みの御業が、現実の歴史の中で、はっきりした形をとることである。聖霊は、命を与える霊であり、救いに至る偉大な神の御業の体験を、世界と教会、そして私たち一人一人の信仰の中へともたらす。私たちが、いかなる幸いか、「神の子」と呼ばれるようにされた恵みは、聖霊の生きた働きの実りである。もとより聖霊の働きは、新約時代の「ペンテコステ」によって初めて開始されたのではない。神の霊は、天地創造のとき既に世界の中に神の息吹を伝え、そして世界を神の大いなる腕の中に包み込む働きをしてくださった（創世記1章2節）。そして神の国完成の日、同じ御霊は花嫁である教会と共にキリストに呼びかける、「来てください」と（ヨハネ黙示録22章17節）。つまり聖霊の存在と運動は、世の初めから終わりまでを包み、旧新約聖書のすべてのページを満たしているのである。この礼拝では、とりわけ私たちが経験する教会の歩みが、聖霊の働きの力ある実りであることを、生き生きと学び取るようにしたい。

「神の偉大なわざが現われました」

今日は、私たちが日曜日ごとに集まる教会の、最初の誕生日です。この日のことを「聖霊降臨日」「ペンテコステ」と言います。今朝の聖書に「五旬祭の日」と書かれている言葉が、「ペンテコステ」です。イエスさまが十字架に架けられたあの日から数えて、50日が経ったのです。

その日、エルサレムの町で、どんなことが始まったか。言葉でうまく説明することはとっても難しいことです。聖書には「激しい嵐が吹いてくるような音」「炎のような舌が分かれ分かれに現われ」と書かれています。「……のような」という言い方が繰り返されているでしょう。私たちも、うまく説明できないほど驚いたときや不思議な気持ちがするとき、同じように言うでしょう？「目から火花が散るような痛み」とか「ほっぺたがとろけるような美味しさ」とか。イエスさまが送ってくださった聖霊の姿は、もちろん目には見えません。でも、このときの聖霊の現われは、とてもとても激しく、強く、そして人びとに大きな驚きを与えるものだったと思います。

このペンテコステの日には、エルサレムに大勢

の人びとが集まっていました。多くはユダヤ人。中にはユダヤ人ではないが聖書の教えるただ一人の神さまを信じて、ユダヤ教徒になっている人びともいました。もとからエルサレムに住んでいる人も、そしてこの日のためにわざわざ集まって来た人びともいたでしょう。大切なお祭りの日だからです。東から西から、そして北から南から。エルサレムを遠く離れたはるかな外国からも、人びとが集まり、神さまを礼拝し賛美しようとするのです。多くの人びとは、ユダヤの言葉を忘れ、自分が生まれ育った外国の言葉で生活しています。そのような大勢の人びとが、聖霊によって始まった不思議な出来事に引き寄せられて、弟子たちのところに集まってきました。

はじめは、大変な物音に驚いて集まったのです。ところが、人びとは不思議なことに気づきます。イエスさまの弟子たちが、何事か、話しているのです。人びとは自分の耳を疑いました。それは、弟子たちの言葉が、そこに集まったすべての人に分かる言葉だったからです。「めいめいが生まれた故郷の言葉」で、弟子たちは話しています。イエスさまの弟子たちは、みな「ガリラヤ」という

地方の人で、ユダヤの人びとの言葉しか知らないはずです。ところが、その弟子たちが、遠い外国の言葉を話し、集まった人びとは、みな自分の生まれた国の言葉で、弟子たちの話を聞いているのです。

聖霊の降臨によるこの事件は、確かに不思議な出来事です。もし私たちが、自分では学んだことのない外国の言葉で、いきなり話し始めたら、まわりの人はどんなに驚くでしょう。英語も中国語も韓国の言葉もインドネシアの言葉も、自由に話せるなんて、それこそ夢のようなことですね。

確かにペンテコステの事件は、そのような驚くべき事件でした。でも、本当におどろくべきこと、本当に素晴らしいことは、外国の言葉を自由に話したことでしょうか？ もっともっと素晴らしいこと。それは、弟子たちが、イエスさまの恵み、イエスさまの救い、イエスさまの十字架と復活の出来事を、確信をもってはっきり語っていることです。弟子たちの心が、何よりもはっきり変えられていることが、大切なことです。

聖霊降臨によって、弟子たちの心は、イエスさまの恵み、イエスさまの愛に、しっかり結び付けられました。ペトロのように、イエスさまを裏切ってしまった人が、今ではイエスさまだけがまことの救い主、イエスさまの十字架と復活だけが、私たちの希望であることを、心から信じているのです。トマスのように、イエスさまの復活を最後まで信じなかった人が、いまでは心からの信仰をもって、神さまの恵みを歌っているのです。

弟子たちが話している言葉。その中身は、このあとペトロが語る「説教」に描かれている通りです。イエスさまが神さまのご計画の通りに十字架につけられたこと。そして神さまの約束の通りに復活して天に上げられたことです。今日の聖書では「神の偉大な業を語っている」とありますね。

神さまが計画し、神さまが実現してくださった「偉大な業」。それがイエスさまの十字架と復活です。この世界の中で起きた、すべての事件の中で最もすばらしい偉大な事件です。神の子イエスさまが、私たちの罪をゆるし、私たちを神の子とするために、十字架の苦しみを引き受け、そして死んで、三日目に死人の中から復活されました。こうして、私たちは、罪と死によって滅び去る道から、罪をゆるされ命を受ける道へと、招かれることになりました。私たちは、この素晴らしい招きを受けて、いまこうして、教会の礼拝に集まっているのです。

私たちは、聖霊である神さまの恵みによって、今では「神の子」と呼ばれています。私たちが歌う賛美歌、私たちが学ぶ聖書、私たちが唱える「使徒信条」や「カテキズム」。そうしたものは、みな聖霊なる神さまが、長い教会の歴史のなかで、弟子たちと教会に与えてくださった恵みです。聖霊の神さまがおられなければ、私たちの世界にはたった一つの賛美歌もなく、一つのカテキズムもなく、そして永遠の命への希望もないままでした。聖霊の神さまが、イエスさまの約束どおりに来てくださった。聖霊の神さまが教会を生み出してくださった。そして聖霊なる神さまは、「神の偉大な業」を信じる心を、私たちに与えてくださいます。

その日、エルサレムでは3000人もの人びとが、イエスさまを信じて洗礼を受けました。私たちもやがてイエスさまを信じて、「信仰告白」する日が来るでしょう。日曜学校の仲間の中には、そのように洗礼を受け、信仰を告白しているお友だちもいるでしょう。私たちが、イエスさまを信じ、神の偉大な業に感謝するのは、全部、聖霊の恵みです。ですから、聖霊降臨日は、教会の誕生祝いであり、さらには私たち自身の救いを感謝し、私たちに注がれた神さまの愛をお祝いする日なのです。
(小野静雄)

[今週の暗唱聖句] 使徒言行録 2章11節

わたしたちの言葉で神の偉大な業を語っている！

〈聖書〉

使徒言行録2章12節

「わたしたちの言葉で神の偉大な業を語っている！」

〈ねらい〉

聖霊が注がれた教会に結び合わされていることを喜び、共に生きていこう。幼子も神さまに招かれて教会の一員として愛されている。聖霊の働きがあることを語ろう。

〈展開例〉

まなちゃんは毎週教会に来ています。教会にはいろいろな人がいます。おじいさんもおばあさんもいます。元気な若い人も、体の弱い人もいます。家族で来ている人もいれば、ひとりで来ている人もいます。でもみんな教会にくるときはうれしそ

うです。まなちゃん是不思議です。お母さんに聞きました。「ねえ、どうしてみんな日曜日にうれしそうに教会に来るの？」って。お母さんは答えました。「きっとみんな神さまから聖霊をいただいているからよ。聖霊は見えない神様の力なの。神さまを信じたいな。神様をもっと知りたいな。教会に行きたいな。みんなに会いたいなって思わせてくれるの。この聖霊が降りてきた日がペンテコステというの。まなちゃんにも聖霊がはたらいているのよ」って。

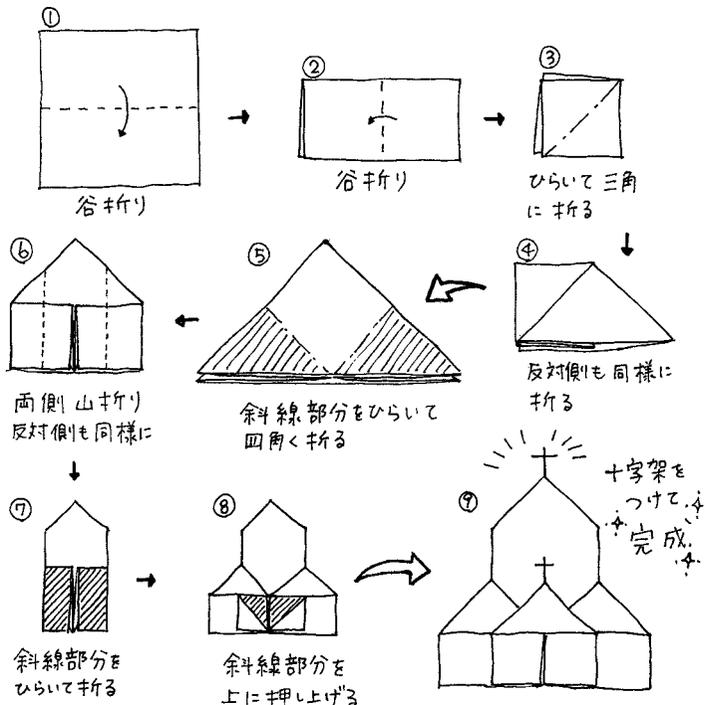
〈やってみよう〉

折り紙「教会」（下図参照）

〈お祈り〉

神さま、みんなを集めて教会をつくってくださってありがとうございます。

折り紙で きょうがい を 作ろう!



〈ねらい〉

ペンテコステってどんな日？
聖霊なる神さまが私たちと共にいてくださる。

〈展開例〉

今朝の礼拝で、今日は何の日と言っていたでしょうか？ そうですね。今日は、ペンテコステというお祝いの日です。

では、どうしてこのペンテコステがお祝いの日なのでしょう？

ここで、質問です。三月にイエスさまが私たちの罪のために十字架にかかって贖いをしてください、三日目に死から復活されたことをお祝いする日がありましたね。それはなんとという日でしたか？ そう、イースターですね。今日はイースターから数えて50日目なのです。

一番最初のこのペンテコステの日はどうなだったのかを聖書—使徒言行録2章1節～4節から見つけてみましょう。

- * 激しい風がふいてくるような音
- * 炎のような舌が一人一人の上にとどまった。
- * 他の国々の言葉で語りだした。

では、使徒言行録2章1節～2節を読んでください。お弟子さんたちはどこにいたのでしょうか？

そうです。家の中ですね。

では4節を見てください。

ここでお弟子さんたちはどうしていますか？
そうですね。家の外へ出て行って話し始めましたね。それは、どうしてでしょうか？ 3節に書いてあるように、このとき聖霊がひとりひとりに与えられたからです。聖霊の働きは、どんなことなのでしょう？（自由に発言させる）

⇒聖霊が与えられるまで弟子たちはイエスさまを信じていたが、自分たちだけで、家の中にい

て信じていた。

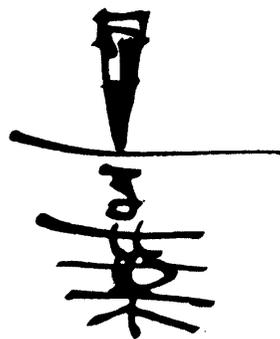
⇒聖霊が与えられると、家の外に出て行って、まだ神さまを知らない人にも、神さまのことを話した。

お弟子さんたちが、家の外に出て行って、イエスさまのことを伝えたので、イエスさまのことを聞いたことがなかった人たちも、イエスさまが私たちの救い主であるということを知ることができました。そして、その人たちが今度は自分たちがイエスさまのことを周りの人に伝え、そして、長い年月が経って、日本にも、伝えられたのです。

私たちは、どうでしょうか？ 学校で、クラスのお友達に、「自分は教会学校に行っているんだ～」ってお話しているのでしょうか？

〈お祈り〉

神さま、私たちに聖霊を与えてくださってありがとうございます。私たちも、イエスさまが救い主であると言うことを、周りのお友達にお話できるようにしてください。



〈ねらい〉

「聖霊」によって教会が誕生した意義を学ぶ。

〈展開例〉**○「聖霊」は神さまです**

今日は、ペンテコステ礼拝をささげましたね。「聖霊がくださった」ことによって教会が生まれたことをお祝いする日です。短く言えば、教会の誕生日です。でも、「聖霊がくださった」とは、どういう意味でしょうか。雨か雪のようなものが空からふってきたのでしょうか。

難しい説明はしないでおきます。みなさんに覚えてほしいことは「聖霊」とは「神さま」のことです、ということです。そして「くださった」の意味は、(聖霊は「神さま」ですから)「来てくださった」ということです。つまり、続けて言えば「神さまが来てくださった」ということ、それが「聖霊がくださった」の意味です。また、もう少し丁寧に言いなおすとしたら、「聖霊なる神さまが来てくださった」ということです。

○「聖霊」は人の心に住んでくださいます

それでは、「聖霊なる神さま」は、どこに来てくださったのでしょうか。今日の礼拝で学んだ聖書のみことばに記されていたことを思い出してください。そのときイエスさまの弟子たちは、一つの場所に集まっていました。そしてみんなで神さまにお祈りしていました。すると「聖霊がくださった」というふうに書かれていました。

ということは、つまり、「聖霊なる神さま」は、お祈りしている人たちが集まっているところに来てくださったのです。

でも、「聖霊なる神さま」は、雨や雪のように目に見えるものではありません。バケツを置いておけばその中にたまっていくようなものではありません。「聖霊なる神さま」が来てくださったのはその人々の心の中です。「霊」がわたしたちの目に見えないのと同じように、わたしたち人間の「心」も、目には見えません。目に見えない「霊」

が、目に見えない「心」の中に来てくださったのです。しかも、聖霊は「たった一度だけ来てくださった」だけではありません。「そのあとどこかに消えてゆかれた」わけではありません。「聖霊なる神さま」は、その人々の心の中から消えることなく、ずっと住んでくださいました。同じようにこの方は、神さまにお祈りするわたしたち一人一人の心の中にも、永遠に住んでくださるのです。

○「聖霊」によって教会は生まれました

「わたしたちの心の中に『聖霊なる神さま』が住んでくださっているなんて、どうしてそんなことが分かるの？」と疑問を感じる人もいるでしょう。その答えは「イエスさまを救い主と信じる心、つまり『信仰』を持っている人の心の中には必ず『聖霊なる神さま』が住んでくださっています」というものです。わたしの心の中に「信仰」があるかどうか分かりませんという人はいないはずですが。「信仰」がない人には、イエスさまを救い主と信じることができません。逆にいえば、イエスさまを救い主と信じている人は「信仰」を持っています。そして「信仰」を持っている人の心の中には「聖霊なる神さま」が住んでくださっているのです。

そして「聖霊なる神さま」は、今から二千年ほど前に、教会を生み出してくださいました。その出来事は、次のような順序で起こりました。「聖霊なる神さま」がお祈りしていた人々の心に「信仰」を与えてくださり、そのようにして「信仰」を与えられた人々が集められて「教会」が誕生したのです。今日みなさんにぜひ信じていただきたいことは、「教会」は神さまが生み出してくださいましたものであるということです。

〈お祈り〉

天のお父さま、「教会」を生み出してくださいましたことを感謝します。わたしたちが「教会」を大切に思うことができますように。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

ペンテコステの出来事について、理解を深める。

〈展開例〉

1. 「聖霊は何のために与えられたのか」ということについて考える

○使徒言行録1章8節を読んで、「聖霊は何のために与えられるのか」、「聖霊が与えられるとどうなるのか」ということについて話し合ってみよう。

○イエス様は、弟子たちを「証人」とするために、聖霊を与えてくださる。「証人」とは、「証言をする人」。イエス・キリストについて、正しく、勇気を持って証言する力を得るために、聖霊が与えられるのである。

2. 「イエス・キリストについて、どんな証言をするのか」ということについて考える

○では、聖霊を受けた人は、イエス・キリストについて、どんな証言をするのか。聖霊が降った後にペトロが語った説教（特に使徒2:22—24、32—33、36）を読んで話し合ってみよう。

「ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方である」（22節）

「神は、このイエスをあなたがたに引渡した」「あなたがたは、このイエスを十字架につけて殺した」（23節）

「神は、このイエスを復活させた」（24、32節）

「イエスは、聖霊を父から受け、私たちに注がれた」（33節）

「神は、イエスを主とし、メシア（油注がれた者＝救い主）とした」（36節）

○これらの証言の中でも、32節に「私たちは皆、そのことの証人です」とあるように、証言の中心は、「神は、イエスを、復活させられた」ということである。聖霊を受けた者は、「キ

リストの復活の証人」となる。

3. 「キリストの復活」について証言するために、聖霊はどんな力を与えてくださるのか

○「キリストの復活」について、正しく、勇気を持って証言するためには、何よりも、「本当に、キリストは復活して、今、生きておられるんだ！」という確信が必要である。使徒たちは、「キリスト復活」の知らせを聞いても、信じることも喜ぶこともできずにユダヤ人を恐れて隠れていたし（ヨハネ20:19）、中には、キリストが昇天される間際まで疑う者もいた（マタイ28:17）。そのような弟子たちが、今、大胆に「キリストの復活」を語っているのは、聖霊の働きによって、「本当に、主は復活して、今も生きておられる！」という確信と喜びが与えられたからである。

4. 聖霊は「私」にも与えられる、ということを考える

○「120人ほどの人々が一つになっていた（使徒1:15）」、「一同が一つになって集まっていると（2:1）」、「一人ひとりの上にとどまった（2:3）」、「一同は聖霊に満たされ……話しだした（2:4）」とあるように、聖霊を受けて、キリストの復活を心から信じ、喜びに満ち溢れて語りだしたのは、ペトロだけでなく、使徒たちだけでなく、そこに一緒に集っていた教会員全員であった。

○イエス様は、「私」にも聖霊を豊かに注いでくださっている。聖霊なる神様の導きによって、「主は、本当に、今、生きておられる！」という確信と喜びが与えられるように真剣に祈ることの大切を伝えたい。

テキスト ルカによる福音書 10章25～37節

ある律法の専門家がイエスさまを試そうとして質問した。「何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか」。私たちが救われて、神さまの祝福の中に生き続けるためにはどうしたらよいのでしょうか。

口先では真剣に尋ねているように見えても、男の真意をイエスさまは見抜かれている。逆に尋ねられました。「律法には何と書いてあるか」。

男は正解を答えることができた。神さまを愛すること、そして隣人を自分のように愛することです。

イエスさまは「正しい答えだ」と受け入れられると共に、続けて言われました。「それを実行しなさい」。もし律法を知って、それを頭の中に蓄えているだけであれば、それには意味がない。律法を実行し、律法が告げるとおりに生きることこそが肝腎である。あなたは心から神さまと隣人などを愛して生きているか。このことをイエスさまは問われています。

形勢が至って不利になったことを認め、男は自分を正当化しようとして、「私の隣人とは誰ですか」と反問します。正当化しようとしたということは、彼は何らかの責めを感じたのであろう。

それは、愛を実行できないでいる良心の呵責であろうか。もしそうであれば、それは神さまの御前に必要のなかったことであつたし、してはならないことであつた。彼にはこの道理が判らない。

それとも男は、律法の専門家としての誇りを傷つけられたかのように感じて、イエスさまを概念論争の泥沼に引き込もうとしたのか。「実行しなさい」というイエスさまの答えの急所を有耶無耶にするために、それが有効な手段のように思えたのか。

男のこの質問によって「善きサマリア人」の譬え話が語られることになる。話そのものにここで立ち入る必要はないであろう。

最後にイエスさまは尋ねられる。「さて、あな

たはこの三人の中で、誰が追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか」。

隣人とは誰か。座り込んで、一体誰が私の隣人であろうかと思ひ巡らし、首をぐるぐる廻して眺めてみても答えは出てこない。誰も自分の首に「隣人」という看板を掲げてはいない。

待っているのではなく、自分から進んで出て行かなければならない。いや、出て行くまでもない。自分が今生きている、その現実において、注意深く観て、聴いて、心と体を働かせるときに、見えてくるものがある。

私の愛と助けを求める人がそこにいる。その人の隣人に、自分になることだ。その挑戦を受けている。

なお二つのことに留意したい。一つは当時のユダヤ人一般にとって、サマリア人が隣人たりうるとは思いもよらないことであつたということだ。この譬え話は、私たちが隣人となるべき相手には何の制限も制約もないということを教えている。現在、国際社会にあって、なお得体の知れない国がある。国の流れが画一的で統制的な視点によって押し流されてしまっている。しかし、そこで生きているのは一人一人の個人である。言う迄もなく国と個人は別である。視野狭窄に陥らぬよう心掛ける必要がある。

もう一つのことは、このサマリア人は主イエス・キリストのことである、ということ。主は私たち一人一人に対して、憐れみをもって本当の隣人となつてくださっている。

傷つき倒れた私たちを介抱し、宿屋へ連れて行き、代金を支払つてくださっただけではない。私たちの身代わりに、私たちのために、御自身が十字架の死を遂げてくださった。このことを通し、主は私たちのまことの隣人となつてくださった。

この愛に生かされている私たちです。その愛の中で、「行って、あなたも同じようにしなさい」という御声を聴くのです。 (大場康司)

5月18日 「神と人を愛する（一）」 カテキズム研究

カテキズム 子どもカテキズム 問4

参照カテキズム ハイデルベルク信仰問答 問4

子どもカテキズム

問4 私たちの神さまが私たちに望んでおられることは何ですか。

答 神さまを愛することと、家族やお友だちを愛することです。

この問4は、第一部の一「人生の目的」の最後の問いである。子どもカテキズムでは、この問1～問4の部分が全体の土台となっていると言える。今回はこの問4を二回に分けて学ぶ。

〈神の愛を知る〉

この問4の答え「神さまを愛することと、家族やお友だちを愛すること」は、「神を愛し、隣人を愛せよ」という律法の要約に対応している。主イエス・キリストもまた、これを正しいものと認めておられるし（ルカ10:28）、ご自身でもこのことを語っておられる（マタイ22:37以下）。神さまが私たちに望んでおられることは、何よりも私たちが「愛する」ことである。

しかし、私たちがこの神の律法の求めに応じて「神を愛し、隣人を愛する」ためには不可欠なことがある。それは、私たちに向けられている「神の愛」を知ることである。私たちの神さまは、私たちを愛しておられる神様である。私たちを愛しておられる神さまが「私たちの神さま」であるということ、私たちが愛することの根拠はすべてそこにあることを知らなければならない。

〈神さまが私たちに望んでおられること〉

神さまは、私たちを愛されるがゆえに、私たちがその神さまの愛の中で生きることを望んでおられる。なぜなら、それこそが、神さまが私たち人間を造られた本来の目的であり、そのように生きることが私たちにとって真実の喜びだからである。子どもカテキズム問1の答えにある「神さまを知り、神さまを喜び、神さまの栄光をあらわす」ことは、何よりも私たちが神さまの愛の中で生きることにある。神さまが私たちに「愛する」ことを望んでおられるということは、私たちにとってそれが喜びとなるからである。

〈神さまを愛すること〉

「愛すること」の第一点として「神さまを愛すること」が挙げられる。神さまの愛の中で生きることは、何よりも「神さまを愛する」ことである。私たちの人生の目的そのものが、「神さまを愛する」ことにあり、それは、私たちがそうしたいと望むからではなく、私たちを愛しておられる神さまがそのように望んでおられるのである。

そして「神さまを愛する」ことが私たちの人生の目的であるならば、私たちはその存在全体でもってそれをなしていかなければならない。なぜなら、神さまは「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」（マルコ12:30）と私たちに求めておられるからである。子どもカテキズム問3の答えとしての「礼拝をささげる」ことや「お祈り」することは、そのような「神を愛する」ことの具体的な行為であることを確認したい。

〈家族やお友だちを愛すること〉

「愛すること」の第二点として「家族やお友だちを愛すること」が挙げられている。これは、「隣人を愛すること」を言い換えたものである。

神さまを愛することは、神さまが愛しているものを愛することでもある。神さまを愛することと隣人を愛することは決して切り離されるようなものではなく、むしろ強く結びついていることを覚えたい。私たちが「家族やお友だちを愛する」のは、自己愛の延長ではなく、神さまに愛され、神様を愛する、神さまとの愛の関係から出てくるものである。そのように神さまと私たちの愛の関係は、私と神さまという個人的関係にとどまらず、私たちの周囲に生きる人々への広がりを持つものであることを覚えたい。（松田基教）

テキスト ルカによる福音書 10章25～37節
カテキズム 子どもカテキズム 問4
参照カテキズム 子どもカテキズム 問40

〔単元のねらい〕

テキストとして「善いサマリア人」のたとえが選ばれているので、説教展開例としては十戒の要約であるふたつの愛の戒めのうち、第二の戒めのほうに比重が置かれることになった。しかしもちろん第二の戒めは、第一の戒めがあってこそ成り立つものであることを覚えたい。暗唱聖句も、レビ記19章18節を選んだが、もちろん申命記6章4節をも念頭に置いておきたい。主イエスご自身もふたつの箇所を並べて示しておられる（マルコ12:29～31等）。

「隣人とはだれですか」

ある人がイエスさまに、どうしたら永遠の命の祝福をいただくことができますかと質問しました。イエスさまはその人に、神さまはどんなことをおっしゃっていますか、と逆にお尋ねになりました。

その人は、神さまを愛することと隣人を愛すること、このふたつの戒めを守ることですと答えました。この人は聖書をよく勉強していた人でしたから、正しい答えをすることができたのです。イエスさまも、正しい答えだ、それを行いなさいとおっしゃいました。そのときその人は、ではわたしの隣人とはだれですかとイエスさまに問うたのです。

するとイエスさまはこんなお話をなさいました。

あるユダヤ人が旅の途中で追いはぎに襲われ、持ち物を奪われたうえに深い傷を負って、道に倒れていた。そこを祭司が通りかかり、さらにレビ人も通りかかったが、ふたりともそのまま通り過ぎていった。

ところがひとりのサマリア人の旅人がそこを通りかかり、倒れている人を見つけた。そして憐れに思い、近寄って傷の手当てをし、宿屋に連れて行って世話をした。そして宿屋の主人にお金を渡して、この人を介抱してあげてください、費用がもっとかかったら、払いますと頼んだ。

そしてイエスさまはこの人にお尋ねになりました。この三人の中で、だれが傷ついた人の隣人になったと思いますか。その人は、サマリア人の旅人ですと答えました。イエスさまは仰せになりました。あなたも同じようにしなさい。

イエスさまに質問した人は、イエスさまのこのお話を聞いて、びっくりぎょうてんしたと思います。なぜならその頃ユダヤ人とサマリア人とはとても仲が悪くて、おたがいに激しく憎み合い、争い合っていたからです。ユダヤ人であったこの人は、サマリア人など隣人ではない、だから愛さなくてもよいと思っていたはずです。

でもイエスさまは、同じユダヤ人であった祭司もレビ人も倒れていた人を見捨てていった、けれどもサマリア人の旅人はこの人を助けたとおっしゃって、この人こそが真の隣人ではないかと問いかけられたのです。

神さまは、自分を愛するようにあなたの隣人を愛しなさい、そうすれば永遠の命を受けることができるかと仰せになります。では、だれがわたしたちの隣人、愛すべき隣人なのでしょう。

そのことは、わたしたち人間が決めることではありません。どこの国の人か、肌の色はどうか、わたしと仲良しかそうではないか、わたしに利益をもたらしてくれる人かどうか、そういうことで

隣人であるかどうかが決められるというのではありません。隣人とは神さまが与えてくださる人のことです。そしてわたしにとってどんな人であっても、たとえわたしを憎んでいる人であったとしても、その人がわたしたちの前に傷ついて倒れていたとしたなら、困り果てていたとしたなら、悲しんでいたとしたなら、その人こそわたしたちの隣人です。わたしたちはその人を助けねばならないのです。それが、隣人を愛するということなのです。

そのような大きな愛を、わたしたちはなぜ持つことができるのでしょうか。それは神さまがまずわたしたちを愛してくださったからです。わたしたちの隣人となってくださったからです。

このサマリア人は、傷ついたユダヤ人を見て「憐

れに思」(33節)ったとあります。憐れに思うとは、はらわたが激しく思うという意味です。倒れ伏している人の姿を見て、彼の内臓も激しく痛んだのです。この大きな愛と憐れみは、もはやユダヤ人とサマリア人というへだたりをこえるのです。

神さまもこのような大きな愛によって、わたしたちを愛してくださっています。罪人であるわたしたち、ご自身の敵であったわたしたちのために、神さまはご自分のお心を激しくお痛めになりました。そしてわたしたちを罪から救うため、ひとり子のイエスさまを十字架につけてくださったのです。この神さまの愛に感謝しましょう。そしてわたしたちも、神さまの愛をわけていただきましょう。そのときわたしたちも、神さまと隣人とを愛して生きることができるのです。(木下裕也)

[今週の暗唱聖句] レビ記 19章18節後半

自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である。



〈聖書〉

レビ記19章18節

「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。
わたしは主である」。

〈ねらい〉

神の愛によって愛する幸いを与えられている。
神と人を愛する愛に生きよう。「となりびと」は
誰なのか、どんな人が「となりびと」なのかをお
話ししよう。

〈展開例〉

昔ある人が旅をしていました。山道で悪い人た
ちが出てきて、なぐったりけったりしてその人の
荷物もお金もぜんぶ盗みました。その人は体中痛
くて動けません。頭を殴られていて血も出ていま
す。そこへ神さまのお仕事をする祭司が通りかか
りました。ところが忙しそうにして、その人を
助けもしないで通り過ぎていきました。だれか他
の人がしてくれると思ったのです。次に、また神
さまの教えをよく知っている人が通りかかりまし
た。でも、見て見ぬふりをして「わたしは忙しい
のでね」と言って行ってしまいました。

もう夕方で暗くなりました。このままでは旅の
人は死んでしまいます。そこへ、この国と仲の悪
い国の人を通りかかりました。サマリア人です。
ところがこのサマリア人は、倒れている旅人を抱
きかかえて傷に包帯を巻きました。そして宿屋に
連れて行き、一晩中やさしくお世話をしました。
宿屋の主人にお金を渡して治るまで寝かせてくだ
さいと頼んで用事をしに出かけました。

さあこの中でだれが隣人を愛する人でしょう？

サマリア人ですね。私たちもこのように生きて
いいですね。

〈やってみよう〉

歌「となりびと」（ウリエ イウツソン）

- 1 となりびとは だれでしょう
みんなともに さがそうよ
よわくまずしい おともたち
病んで苦しむ ひとたちも
みんなおなじ となりびと
みんなおなじ となりびと
- 2 となりびとに なりましょう
みんなともに かんがえよう
つらいことも ともにして
ちいさいことも しんじあう
となりびとに なりましょう
となりびとに なりましょう

出典『こどもさんびか』141番（日本基督教
団出版局）

〈お祈り〉

わたしたちも家族やおともだちにやさしくでき
ますように。



〈ねらい〉

私たちは進んで隣人を愛すべきであること。
それは、私たちが神さまを愛するその愛とひとつであること。

〈展開例〉

1. 神さまは、私たちが神さまを愛するのと同じように、自分の周りにいる人たちをも愛するようにと言われています。

では、周りにはどのような人たちを愛すればよいのでしょうか？ 家族でしょうか、友人でしょうか。知らない人はどうでしょうか。制限はありますか？

2. 隣人を愛するというのは、具体的にはどのようなことでしょうか。善きサマリア人は何をしましたか。

みんなだったら、血を出して道に倒れている人を見たら、どうしますか。

3. イエスさまはなぜ、隣人を愛するようにと言われたのでしょうか。

それは結局、神さまを愛している（信じてい

る）と言いながら、隣人を愛することができないならば、本当に神さまを愛している（信じている）とは言えないからです。

なぜなら、神さまは全ての人を愛しておられます。それで、クラスのお友達のみんが仲良く、平和に生きることを望んでおられるのです。そうであるのに、隣人（お友達）を愛することができないなら、それは、神さまの御心に背くことになってしまいます。神さまを愛している（信じている）とは言えなくなってしまうのです。

4. 私たちにとって最高の隣人となってくださった御方がいます。それが主イエス・キリストです。

〈お祈り〉

神さま、毎日出会う多くの人たちを与えられて感謝します。私たちが、その人たちの本当の隣人となって、神さまを愛するように、その人たちを愛していくことができますように、どうか私たちを助けてください。



〈ねらい〉

「良いサマリア人」のように隣人を愛することの意味と方法を学ぶ。

〈展開例〉**○友達をつくろう**

みなさんには仲よし友達がいるでしょうか（はい・いいえ）。「そんなのいなくてもいいや」という答えを聞くと、ちょっと心配になります。わたしたちは独りで生きることはできませんし、独りで生きてはなりません。みなさんの隣にはとても多くの人々がいるのだということを忘れないでほしいと思います。

そして、その人々とできるだけ仲良くしなければなりません。「人と仲良くするなんてウザい。めんどくさい」。そんなことはどうか言わないでください。なかには会うと必ずけんかになってしまうような馬の合わない人もいるかもしれませんが、そういう人ともいつかは仲良くなれるかもしれないと、希望を持ち続けてください。最近活躍中の二人組の歌手の一人がテレビ番組のインタビューの中で、「けんかしないコツは、けんかしないことです」と面白いことを言っていました。ちょっと変な話だけど、でも本当にそのとおりだなあと思いました。すぐキレたり、大きな声で怒鳴ったり、手や足で乱暴したり。そういうのは、いちばんよくないことです。

でも、友達って、どうすれば「つくる」ことができるのでしょうか。そういうことを皆さんは真剣に考えたことがあるでしょうか。学校に行けば同じクラスにだれかがいる。同じクラスの子たちはみんな友達だ、と置いていけばよいのでしょうか。もちろん、それも間違っているわけではありません。

でも、教会学校のみなさんには、もう少し先まで考えてほしいなど願っています。なぜなら、聖書の中で、イエスさまは、友達の「つくり方」を教えてくださいているからです。

○「良いサマリア人」になるう

今日の礼拝で学んだのは、ルカによる福音書の「良いサマリア人のたとえ」でした。強盗に半殺しの目にあって倒れていた人を、サマリア人は、一生懸命に助けてあげたのでしたよね。サマリア人とユダヤ人は仲が悪かったのですが、そういうことはお構いなしに、困っている人が自分の目の前にいるならば助ける。そういう心を、そのサマリア人は持っていたのです。

私がみなさんにぜひ考えてもらいたいことは、イエスさまがこのたとえ話を通して伝えようとなさったことは何でしょうかということです。素直に考えれば、やはり、できるだけ多くの人がこのサマリア人ようになってほしいという願いが込められているたとえ話であると言ってよいはずですが、目の前で倒れている人、困っている人を「見殺しにしてもよい」などとイエスさまがお教えになるはずがないからです。

そして、もしそうであるとすれば、イエスさまが教えておられることは、友達の「つくり方」であると考えられます。このサマリア人のように、自分のほうから積極的に足を踏み出して、困っている人に近づき、その人に必要な助けをする。けがをしていればもちろん心配するし、傷が早く治るためにはどうすればよいかを一緒に考える。

「そんなのは、おせっかいだよ」と思う人もいるでしょう。なかには、困っている人がいたので心配してあげたし、助けてあげようとしたのに、「うるさい。あっち行って!」と言われてしまって傷ついたという経験がある人もいるかもしれません。世の中にはいろんな人がいます。

でも、「それでもいいや」と、思いませんか。「見殺し」よりは、はるかにましです、よね?

〈お祈り〉

天のお父さま、わたしたちがもし困っている人に出会ったときには、積極的にその人を助けることができるようにしてください。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

1. イエス・キリストが、「私」の隣人となってくださったことを読み取りたい。
2. イエス・キリストにならって、私たちも、隣人を愛する者として変えられたい。

〈子どもカテキズム〉

問4：私たちの神様が私たちに望んでおられることは何ですか。

答：神様を愛すること、家族やお友だちを愛することです。

〈展開例〉

1. たとえ話について考える

- ある人が追いはぎに襲われ、服を剥ぎ取られ、殴りつけられ、半殺しにされたままで道に横たわっている。その道を通った「祭司とレビ人」は、その人のことを憐れに思いながらも、「汚れるから死体に触ってはならない」という聖書の言葉（民数記5:2、19:11）を守るために（聖書の言葉で自分を正当化して）、その人を無視して、わざわざ道の反対側を通って行った。一方、当時、ユダヤ人からいつも差別を受け、軽蔑されていた「サマリア人」は、人種の違い、日頃の恨みや憎しみを忘れ、その人を介抱してあげた。
- このたとえ話は、「あなたは、律法（聖書）をどう読んでいるか（26節）」というイエス様の質問を契機としており、当時のユダヤ人たちに、聖書の正しい読み方を教えるための物語である。
- 「自分自身を愛するように、隣人を愛しなさい（レビ19:18）」という神様の命令に対して、「でも、ここには、こうも書いてあります」

と言って聖書を持ち出して隣人を愛せない自分を正当化するのではなく、「幼子のように（10:21）」、その命令を聞くべきことを教えている。

2. 隣人を愛することについて考える

- このたとえ話の中で、イエス様は、「隣人を愛するコツ」を教えてくれている。なぜ、このサマリア人は、大嫌いだったユダヤ人を介抱してあげたのでしょうか。その理由についてみんなで話し合ってみよう。
- このサマリア人が、ユダヤ人を介抱できたのは、「憐れに思った（33節）」から。私たちが家族や友だちを愛する時に大切なことは、心の底から深く相手に同情することである。
- 「半殺しにされて道で横たわっている人」と、その人を介抱した「サマリア人」は、実は、「私」と「イエス様」の関係としても読むことができる。「私」は、汚い姿で倒れており、自分の力では起き上がることも出来ない。「あいつに近寄ったらこっちまで汚れる」と言って、誰も助けてくれない。しかし、イエス様だけは、そんな「私」を「憐れに思い」、介抱してくださる。33～35節を、もう一度、じっくり味わいながら読みなおしてほしい。
- イエス様は、罪の中で動くことが出来ない「私」のもとに近づき、命がけで「私」を救い出してくださった。ここでサマリア人が支払った「油、ぶどう酒、包帯、ロバ、介抱、銀貨」以上に、イエス様は、自分の命を投げ出してくださった。この愛に押し出されて、私たちも、与えられている隣人の一人一人を愛していきたい。

敵を愛する。ここに信仰者の生き方の根本的な姿がある。そして希望の鍵もここにある。人間の個人的な関係においても、社会や世界におけるもろもろの関係においても、それは同じように言える。

「敵」は愛の向かう対象の広がりや深さを語る。愛は限界を知らないのである。また単に互恵性に依拠する愛は愛の名に値せず、敵をも愛する愛でなければ真実の愛の名に値しないことを決して忘れてはならない。

「愛する」ことは、好悪の感情を超え、敵を情緒的に好ましいと思うことは、通常困難であろう。しかし愛は情緒を超え、それは能動的・積極的に心と思いを働かせること。何ら報いを求めず、神さまの愛に自分も生き、人をも生かすこと(エロスでもなくフィリアでもなく、まさにアガペー)。

では、なぜ敵を愛さなければならないのか。そのいくつかの理由は明白である。敵に対する人間の自然な感情の赴くところは「憎しみ」であろう。敵が憎しみをもって自分に向かってくるのだから、憎しみをもって応えるのは当然ではないか、ということになる。しかし憎しみは不毛である。冷え切った冬空の下に、憎しみはさらに寒風を吹き込むだけのことだ。憎しみの連鎖を誰が断ち切るのか。解決は程遠い。

さらに憎しみは、どれほど、それを抱かざるをえない正当な理由を見出そうとも、結局はその本人を傷つけ、歪め、破壊してしまう。人から憎まれる苦しみだけでも絶え難いのに、それに加えて、なぜ、自己損傷の苦しみをも重ねなければならないのか。

これらは実際的な理由である。しかし、より根本的な理由は、主イエス・キリストがこのことを命じておられることにあるのは言う迄もない。敵を愛してこそ「いと高き方の子となる」と約束されている。

しかし問題は、どのようにしたら敵を愛することができるのか、本当に敵を愛することができる

のか、ということである。ここで躓くなら、希望の鍵は失われてしまう。

答えは、まず、神さまが「恩を知らない者にも悪人にも、情け深い」御方である、ということを中心に刻むことにある。神さまは全ての人を愛されている。その愛に生かされている私たちが、この愛に留まらずして、神の子と言えるだろうか。私たちにはさらに、主イエス・キリストの十字架の愛が指し示されているのである。

これに加え、いくつかのことを示唆しながら覚える必要があろう。まず、敵を愛することは、敵によって翻弄されることではなく、寧ろ敵を愛することによってこそ自分を見失わずにいることができることを強く自覚することだ。敵からの影響を蒙らないためには、愛することだ。

それから、敵を愛することは、単に関係を修復する以上に、より豊かな関係を築き上げることのできる唯一の道であることを覚えることだ。

韓国の歴史上著名な医師ホ・ジュンを主人公にしたドラマ「ホ・ジュン」で、こういう場面があった。彼が赴任した役所は下僚が牛耳り不正が蔓延っていた。ホ・ジュンはそれを正すが、ために下僚たちの反感を買い、讒言で陥れられた。その下僚の一人が重病となったときホ・ジュンは献身的に治療・看護を行なった。やがて、その下僚は尋ねる。「私を憎んだのではないですか」。ホ・ジュンは答えた。「憎かった。しかし今は、痛みをこれ以上和らげることができないことを医師として申し訳なく思う」。

勿論ここにキリスト教的な背景はないが、彼の言動に、敵を愛することの一端を見ることができよう。

どんな時にも自分を見失わず、主の御前にあって今為すべきことを行なうこと。そして、对人的に、また対社会・世界的に、より良き関係を築き上げることを求め続けること。ここに全ての希望が懸かっていることを強く自覚したい。

(大場康司)

5月25日 「神と人を愛する（二）」 カテキズム研究

カテキズム 子どもカテキズム 問4

参照カテキズム ハイデルベルク信仰問答 問4

子どもカテキズム

問4 私たちの神さまが私たちに望んでおられることは何ですか。

答 神さまを愛することと、家族やお友だちを愛することです。

今回は、この問4の学びの二回目である。単元の目標に「敵をも愛する神の愛を知ろう。わたしたちは、その愛によって罪赦されている」とあるように、「神を愛し、隣人を愛せよ」という律法の要約のうち、第二点の「隣人への愛」が学びの中心となる。

〈隣人への愛〉

子どもカテキズムは、「隣人への愛」を「家族やお友だちを愛すること」と言い換えている。確かに子どもたちに対して「隣人」とは誰かを説明しようとするならば、「家族やお友だち」という表現もふさわしいとは言えるだろう。しかし、子どもたちが、聖書が教える「隣人への愛」を、狭く限られたものとしてのみ理解することのないように注意したい。

良きサマリア人のたとえとその導入によって示されるように(ルカ10:25以下)、聖書が教える「隣人」とは、私たちの身近な人々に限定されない。したがって「隣人への愛」も限定されたものとして理解されるべきではない。

〈敵を愛する〉

子どもたちにとって最も身近な存在である「家族やお友だち」を愛することを教えることは大切である。しかし、家族やお友だちとの関係がいつでも良好であるわけではない。叱られたり、喧嘩をしたりしてその関係が一時的に悪くなることもある。また、「敵」という言葉はふさわしくないかもしれないが、子どもの間でも険悪な関係はありうる。そんな時でも相手を「愛する」ことができるためには、聖書が教える「愛すること」の広さ深さを知らなければならない。

神さまは、私たちが自分にとって都合の良い時にだけ隣人を愛するのではなく、どんな時であっ

ても、どんな相手であっても愛することを求めておられるからである。「敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にしてください。悪口を言う者に祝福を祈り、あなたがたを侮辱する者のために祈りなさい」(ルカ6:27—28)。

〈赦す愛〉

聖書が教える愛の最たるものは、「赦す愛」である。神さまは、神さまに背き、敵対していた私たちをその大いなる愛によって赦してくださった。前回学んだように、私たちが愛するということは、その神さまの私たちに対する大いなる愛を根拠としている。したがって、わたしたちが隣人に対して示す愛も、まず何よりそのような「赦す愛」でなければならない。「あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい」(ルカ6:36)。

また、私たちに「敵を愛する」ように教えられたイエス・キリスト自らがそのように「敵を赦された」ことを知らなければならない。キリストを信じる者が「敵をも愛する」のは、キリストに倣う者としてあるためである。

〈隣人への愛の規準としての十戒〉

最後に、子どもカテキズムが、その問40において、十戒の要約として「神と人への愛、二つで一つの愛」を教えていることに注目したい。神さまは、私たちに「神を愛し、隣人を愛せよ」と命じられるだけでなく、それを私たちがなすための規準を与えてくださる。

十戒の戒めを、ただお題目のように唱えたり、私たちの自由を縛る厳しいものと理解するのではなく、私たちが「神を愛し、隣人を愛する」ために、神さまが与えてくださったものと受けとめ、それを教え、学ぶことは大切なことである。(松田基教)

テキスト ルカによる福音書 6章27～36節
カテキズム 子どもカテキズム 問4
参照カテキズム 子どもカテキズム 問83

〔単元のねらい〕

主イエスの愛敵の教えである。大人たちにも至難と思えるみ言葉であるかもしれない。しかし、人にはできないことも神にはできる。主イエスの十字架の愛の力によって、今も世界のいたるところで敵を愛する愛の奇跡は生まれている。わたしたちも十字架の愛の証人とされたい。このみ言葉に聞き従うことは祈りなしには不可能である。祈ることによってこそ愛の勝利を得ることができることを子どもたちに伝え、子どもたちとともに祈りたい。

「敵を愛しなさい」

皆さんには、今けんかをしている真っ最中という人はいますか。その人のことがきらいできらいでしかたがないという人はいますか。そういう人のことを、わたしの敵だと思ふかもしれませんね。でも、イエスさまはおっしゃいます。「敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にきなさい。悪口を言う者に祝福を祈り、あなたがたを侮辱する者のために祈りなさい」(27～28節)

あなたを憎む人に親切にきなさい。あなたの悪口を言ったり、あなたをいじめる人をも愛しなさい。そうイエスさまはおっしゃるのです。そんなことはむりだ、いくらイエスさまのみ言葉でも、こればかりは守ることはできないと思う人もあるでしょう。

でも、これはイエスさまのご命令です。ですから、はじめからむりだ、とあきらめてしまってはなりません。イエスさまはわたしたちにできないことをお求めになるお方ではありません。このご命令をも守ることができるよう、イエスさまはわたしたちを守り支えてくださいます。そしてこのみ言葉に聞き従う道こそ、わたしたちがほんとうに幸せに、平和に生きる道なのです。

なぜ敵を愛することがむずかしいのでしょうか。まず考えてみたいことは、わたしたちは生まれつき自分はいつも正しく、相手はいつもまち

がっていると思っているところがあるということです。はじめから自分につごうのよいものさしを持っているのです。

でもちょっと待ってください。私たちは神さまではありません。ですから、わたしたちの正しさは完全ではありません。自分が正しいと思っているときでも、もしかするとまちがっているかもしれません。だからこそ、わたしたちは神さまの正しさを学ばなければならないのです。そして、神さまの正しさに照らしてみると、自分の正しさがいかにたよりないものであるのかがわかるのです。

もしかすると、相手のほうが正しいのかもしれないのです。そうするとわたしたちは、自分のまちがったものさしで、自分から敵をつくっているのかもしれないのです。ほんとうは、赦されなければならない敵とは自分のほうかもしれないのです。そのことに気づくことが、愛することの第一歩なのだと思います。

生まれつき自分が正しい、自分がかわいいと思っているわたしたちにとっては、敵を愛することは確かにむずかしいことです。敵とは愛すべき者ではない、敵に対しては仕返しをしなければならぬ、そう思いますか。でも、おたがいに仕返しをし合っていたのでは、自分の心も相手の心も

暗くなっていくばかりです。罪の深い沼の中に入り込んでいくばかりです。それは苦しいことですね。おたがいに敵意を捨てて愛し合うことができれば、どんなにすばらしいでしょうか。

大切なことをお話しします。人にはできないことも神さまにはおできになります。わたしたちはどうしたら、敵を愛することができるのでしょうか。神さまにお祈りすることです。イエスさまのお力をいただくことです。

ある人が言っていたことです。いつも自分にいじわるをする人がいた。その人のことがきらいでしかたがなかった。でも、イエスさまはその人をも愛しなさいと仰せになる。それで、イエスさまどうかこの人のことを愛することができるようにしてくださいと祈り始めた。毎日毎日祈り続けた。

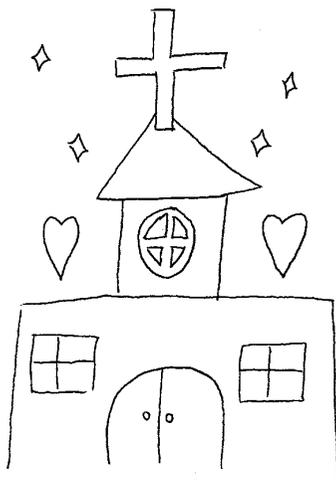
そうするといつの間にかその人への憎しみが消えて、その人に親切にすることができるようになった。そしてその人も心を開いてくれて、ふたりは親友になった。

敵を愛すること、それは奇跡と言えるようなことかもしれません。けれども神さまは、このすばらしい奇跡を起こしてくださるお方です。

イエスさまは、ご自分を十字架につけた人々のためにさえ、父よこの人々は自分が何をしているのかわからずにいるのです、ですからどうか彼らをお赦しくださいと祈られました。このような大きな赦しの愛を、わたしたちもイエスさまからいただくことができるのです。そして敵意を愛に、争いを平和にかえてくださる神さまのすばらしいみわざを見ることができるのです。（木下裕也）

[今週の暗唱聖句] ヨハネの手紙 一 4章18節前半

愛には恐れがない。完全な愛は恐れを締め出します。



〈聖書〉

ヨハネの手紙一4章18節

「愛には恐れがない。完全な愛は恐れを締め出します」。

まがりかどでゴツツンコ!

(アブブブ アブブブブ)

おまえがわるいんだぞ

おまえがわるいんだぞ

ふたーりそろって エンエンエン

〈ねらい〉

敵をも愛する神の愛を知ろう。私たちはその愛によって罪赦されている。幼児にとって敵はいない。しかし、生活の中でけんかしてしまう相手を許す行為ならばわかるだろう。

みんな泣いたりおこったり……これでいいのかな? このままじゃいやだよ。どうすればいいのかな? そう! みんなでごめんねって言おう。みーんなそろってごめんなさい(両手をむき合わせて指を前に倒してごめんなさいをしているようにする。)

〈展開例〉

ゆうやくんがオモチャで遊んでいるとけいすけくんが横取りしました。ふたりはけんかしました。「もうあいつとぜったいあそばない」とゆうやくんは思いました。

けいすけくんが絵を描いていたらゆうやくんがそこに落書きしました。けいすけくんはおこって「もうあいつだいきらい」と思いました。

ゆかちゃんはいずみちゃんに「あそんであげない」といわれました。だからゆかちゃんもいずみちゃんとあそんであげません。

さあこれでいいのかな?

〈お祈り〉

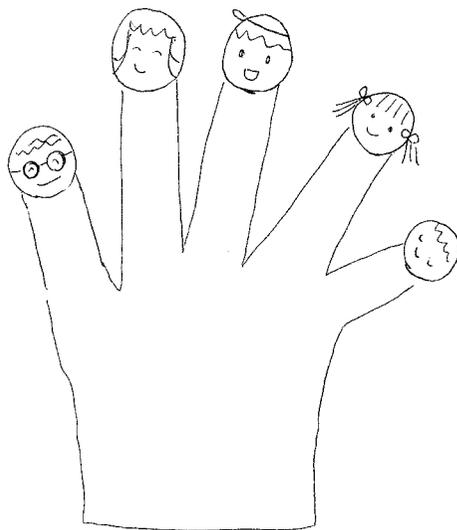
わたしたちはすぐ意地悪になります。ごめんなさい。おともだちの意地悪もゆるせるようにしてください。

〈やってみよう〉

手遊び「おとうさんがかけてきて」

(てぶくろ人形を使うと良い。右図参照)

- 1 おとうさんがかけてきて
おとうさんがかけてきて
まがりかどでぶつかって
(アイタタタ アイタタタ)
おまえがわるいんだぞ
おまえがわるいんだぞ
ふたーりそろって プンブンブン
- 2 おかあさんがかけてきて
……以下同様に
- 3 あかちゃんがハイハイしてきて
あかちゃんがハイハイしてきて



軍手にフェルトなどで顔を作って動かす。これは、何のお話にも応用できるので、作っておくと便利。

〈ねらい〉

隣人を愛するとは、敵をも愛することにまで結びつかなければならないことを理解するように導く。

〈展開例〉

1. みんなは、嫌いな人、いやな人がいますか。
それはどうしてですか。どうしたらよいと思いますか。
2. では、イエスさまはどう言われていますか。
3. でも、嫌いな人を愛することなどできるでしょうか。
自然な感情からは、それはできないことでしょう（そのような感情を抑圧することはありません）。
4. しかし、イエスさまはどこまでも、敵を愛しなさいといわれています。このことに深く心を留めなければなりません。
では、どのようにしたら、愛することができるでしょうか。そもそも、ここで愛するとはどういうことでしょうか（好きにならなければならないのでしょうか。少なくとも当初は、愛することと好きになることとは別個のことであ

る、という割り切った思いからさえ、隣人愛を追求しなければならないのです）。

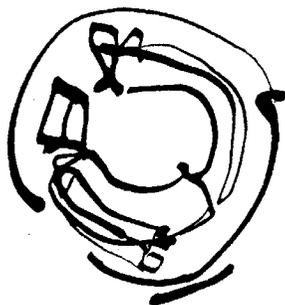
5. 私たちが隣人愛に生きることが出来る鍵は、神さまの私たちに対する愛をしっかりと受け止めることができるか否かにあることを、理解させる。
6. 将来への展望として、敵を愛することによって、新しい友達が生まれ、より豊かな関係が作り出されるかもしれないという大きな望みを抱いて、全ての人を愛するようにしましょう。

〈ワーク〉

童話『ティムはだいじなおともだち』を読もう。
いのちのことは社フォレスト・ブックス
作／メロディー・カールソン
絵／スーザン・レーガン

〈お祈り〉

神さま、あなたは全ての人を愛しておられます。私たちは時々、ともだちとけんかをしてしまいます。しかし、そのともだちをも神さまは愛しておられます。私たちが誰に対しても、愛を行なっていくことができますよう、どうか助けてください。



〈ねらい〉

イエスさまの愛の教えには「敵への愛」が含まれていることの意義を学ぶ。

〈展開例〉

○「敵を愛すること」の前に心がけること

今日の礼拝のお話の中に、「敵を愛しなさい」というイエスさまのみことばがありましたね。とてもびっくりした人がいるかもしれません。ある先生は『『敵』とは、愛することのできない人のことです。ですから、『敵を愛する』とは、できないことをすることなのです』と説明しておられます。面白い説明だと思います。皆さんの中に「できないことをする」ことができる人がいるでしょうか。そんな無茶苦茶なことを言われましても……と、困ってしまうのではないのでしょうか。「できないことは、できない」のではないのでしょうか。

とはいえ、もちろんこれはイエスさま御自身のご命令なので「できないことは、できない」と言い張って終わりにするわけにはいきません。何とかする方法は、あとで考えます。それよりも、今お話ししておきたいことがあります。「敵を愛すること」の前に心がけることがあるのではないのでしょうか、ということです。

それは、要するに「なるべく敵をつくらないこと」でしょう。わたしたちは時々、もともと敵ではなかった人を、わたしたちのほうから敵にしてしまうことがあります。こちらから喧嘩を売ってみたり、皮肉や嫌味がたっぷり入った言葉を投げつけてみたり。直接話をしたこともない相手のことを、うわさ話とか外見だけで、「あの人はこういう人に違いない」などと偏見をもって見て、想像だけで嫌ってみたり。もしそのようなことが癖のようになっていく人は、自分でそのことに早く気づくほうがいいです。そして、何度も反省してみる事が大切です。なるべく敵をつくらないこと。自分で自分の敵を増やさないこと。自分からけんかを仕かけないこと。どんな人に対しても優しく接すること。このことも生きていく上で大事

なことです。

○二つの方法を考えてみました

とはいえ、今私が言ったようなことをどんなに心がけていても、わたしたちの前から「敵」が一人もいなくなるということはないようです。こちらからどんなに親切にしても、心を閉ざし、笑うどころか、にらみつけ、けんか腰で立ち向かってくる人がいます。じつはわたしたちも、自分の顔を鏡に映してみれば、その相手と同じような顔をしているのかもしれません。でも、「敵」が実際に恐ろしい顔や姿で近づいてくると、どうしても身構えてしまいますし、とても緊張するものです。そんなとき、わたしたちは、どうしたらよいのでしょうか。

第一の方法は「敵を愛しなさい」というイエスさまのみことばを、とにかく思い出すこと。そして、何度も何度も心の中で繰り返すことでしょう。これはイエスさまのご命令なのです。イエスさまは、わたしたちがどうして「敵」を愛さなければならないのか、その理由を具体的に詳しくお話しになられたわけではありません。「神と人を愛しなさい」という教えをどこまでも貫いていくと、「敵を愛する」というところにまで必ずたどり着くのだ。それがイエスさまのお考えではないのでしょうか。

考えられる第二の方法は「敵をよく知る」ことでしょう。わたしたちは、知らない相手であればあるほど、必要以上に怖がったり、偏見をもって嫌ったりすることがあります。近づいてみると、意外に理解できそうな相手かもしれないと気づくことがあります。私によく似ている人だと感じて、反省させられることもあります。「知ること」が「愛すること」の第一歩です。

〈お祈り〉

天のお父さま、「敵を愛すること」は難しいですが、どうかそれができるようにしてください。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

「敵を愛する喜び」と、「敵を愛する者へ変えられていく」という希望と約束を伝えたい。

〈子どもカテキズム〉

問4：私たちの神様が私たちに望んでおられることは何ですか。

答：神様を愛すること、家族やお友だちを愛することです。

〈展開例〉

1. 憎むことの悲しみと、愛することの喜びについて考える

- 説教を聞いて、また、もう一度ルカ福音書6章27～36節を読んで、感想を発表しあってみよう。
- これまでに、家族の誰かに対して、友だちの誰かに対して、心から憎しみを持ったことがあるだろうか。または、今、誰か憎んでいるひとはいるだろうか。一人一人考えてみよう。
- 憎んでいる人を愛したり、その人に親切にしたり、その人のためにお祈りすることは、私たち罪人にとって、決して簡単なことではない。けれども、イエス様は、ここで、「互いに憎みあう人間関係」を解決する最善の道を教えてくださっている。
- 誰かを憎むことも、憎しみによってその人を傷つけることも、それは、本当は自分にとってとても苦しいこと。罪人である私たちは、敵を憎み傷つけることこそ、憎しみの最善の解決だと思い込んでいるが、イエス様は、そうではなくて、敵を愛することこそ、本当の解決であると教えてくださっている。
- 神様は、私たちに、「神様を愛し、隣人を愛

すること」を心から望んでおられるが、それは、「嫌でも無理でも、とにかく命令だから従いなさい」というのではなく、「神様を愛し、隣人を愛すること」が、「私」にとって本当に幸せなことだから、そのように望んでおられる。

- もし、今までの人生の中で、「憎んでいた家族や友人を、愛することができた」という経験を持っている人がいたら、そのとき、どれほど大きな喜びがあったか話してほしい。

2. 「敵を愛する者」へと変えられていく「希望」と「約束」について考える

- 今日の箇所は、「わたしの言葉を聞いているあなたがたに言うておく(27節)」という言葉で始まり、「そうすれば、あなたがたは『いと高き方(神様)の子ども』となる(35節)」という約束の言葉で閉じられていることがとても大切なポイント。
- 私たちがイエス様の言葉を聞きながら生きていくなれば、ここで教えられているような人(敵を愛し、私を憎む者にも心から親切にし、悪口を言う者のために祝福を祈る人)に変えられていくという約束が語られている。また、イエス様の言葉を聞きながら、そのように変えられていくことで、ますます「私」は神様の子どもらしくなっていくことができる。
- 「これから、もっともっと、神様の子どもらしく変えられていく」、これほど大きな希望と約束が与えられていることを心から喜びたい。そして、この希望と約束を抱きながら、敵を愛することが出来るように真剣に祈っていききたい。

テモテは子供の頃から、聖書に親しみよく学び、聖書の教えるキリストによる救いにあずかってきました。パウロは、神様の御言葉に従って伝道者としてしっかり歩むように勧めました。キリスト教伝道には、迫害や苦しみがいつも伴いました。11節には「アンティオキヤ、イコニオン、リストラで、わたしにふりかかったような迫害と苦難……」とありますが、このようにパウロは第一回目の伝道旅行から各地で迫害をうけました。特にリストラという町は、テモテの出身地でした。テモテは、この時パウロの伝道によって回心したものと考えられます。

テモテはお父さんがギリシャ人でした。お母さんは、ユダヤ人でエウニケ、おばあさんはロイスでした。(1章5節) 14節に「あなたは、それをだれから学んだかを知っており」とあります。具体的には、お母さん、おばあさん、と信仰の父パウロを表しています。15節に「聖書」、また「この書物」、16節に、もう一度「聖書」と出てきますが、この場合の聖書というのは、旧約聖書のことです。パウロはこの聖書についてとても大切なことを三つ述べています。(15節～17節) 具体的には、(1) 聖書の目的について、(2) 聖書の靈感について、(3) 聖書の有効性についてです。

パウロはまず第一に、聖書の目的は人がキリストを信じて救われることです。つまり罪人の救いです。「この書物は、キリストを信じて救われる知恵を与えることができます。」とあり、この知恵とは神様を恐れ従う賢い生き方についての知識のことです。

第二は、聖書の靈感についてです。聖書は、靈感されたもの、神様から吹き出されたもので、つまり神様に起源をもつもので、神的権威があるということです。従って、聖書を他の一般書物と同じように扱ってはいけないのです。16節に「聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ」とあるのがこのことです。聖書の靈感と権威は、キリスト

教にとって大変重要なことでいくら強調してもし過ぎることはありません。ウエストミンスター信仰告白第1章には、聖書とは何であるかということが1～10節まで記されています。聖書は靈感ゆえに、記された神のみ言葉としての権威をもち、信仰と生活の基準であることを表明しています。

第三に聖書の有効性についてです。聖書は、わたしたち一人ひとりにたいしてよい効果を及ぼし、一人ひとりが、神のみ心になうように、行いと信仰生活を、生涯にわたってできるように十分に整えることができるのです。不足はなにもありません。

16節で「人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益です。」とあります。が、「教え」というのは、聖書はキリストによる救いについての教えをわたしたち一人ひとりに与えることを意味しています。「戒め」というのは、救いについての間違った私たちの理解と行動に対して、聖書は警告を与えてくれます。「誤りを正し」というのは、警告を与えるだけでなく、聖書は、本来の正しい教えと行動に私たち一人ひとりを修正し、引き戻してくれることを表します。「義に導き訓練をする」というのは、神様の前での正しさが身につくようにわたしたち一人ひとりを育て、訓練し霊的に成長させることを表します。こうして聖書は、私たち一人ひとりに対して良い結果を及ぼし、一人ひとりが神様のみ心になうように、行いと聖い生活を、生涯にわたってできるように、十分に整えることができるのです。聖書では救いに関しては足りないから他のものを使うというようなことは必要ありません。聖書だけで十分なのです。なお17節に「神に仕える人」とありますが、この表現は、もともと旧約聖書の表現で「神の言葉を語る預言者」を表しましたが、パウロは、この表現を、テモテを含めて神様の言葉を語る一世紀のキリスト教伝道者にあてはめました。(羽野浩雪)

カテキズム 子どもカテキズム 問5
参照カテキズム ウェストミンスター小教理問答 問2

子どもカテキズム

問5 私たちがそれらを知るために神さまが与えてくださったものは何ですか。

答 聖書、神の御言葉です。

〈なぜ聖書か〉

子どもカテキズムでは、問1から問4までを受けたかたちで、この問5が教えられる。「それら」というのは、問1から問4で扱われた「私たちは何のために生きるのか」、「私たちがすべきことは何か」、「神さまが私たちに望んでおられることは何か」という事柄である。

問1から問4では、それぞれの問いに対して答えが述べられているが、それらの答えを私たちがどこから知ることができるのかというのが、この問5で問われ、答えられている。すなわち、それらを「聖書、神の言葉」から教えられるとするのである。

〈神さまが与えてくださった聖書〉

神さまの御心は、聖書を通して私たちに教えられる。神さまは、自然界にある事象を通して語っておられるが、罪の影響によって私たちの目は覆われていて、そこから神の御心を正しく知ることができない。そのため、私たちが神さまの御心を正しく知ることができるように、神さまご自身が、聖書を与えてくださったのである。したがって、神さまの御心は、聖書の中にこそはっきりと示されている。聖書を通してこそ、私たちは真の神さまを知ることができ、神さまの御心を知ることができる。私たちの信仰は聖書とともにあり、私たちの信仰にとって聖書は欠かすことのできないものである。私たちの救い主であるイエス・キリストを知り、信じることができるのも聖書を通してのみである。

〈ただ一つの基準としての聖書〉

聖書にこそ神さまの御心が示されているという

ことは、私たちの信仰と生活にとって聖書こそが唯一の基準であることを意味する。聖書は、人生の参考書程度のものではない。むしろ、私たちの人生の方を聖書に即して変えていくべきものである。私たちの人生が神さまを礼拝し、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜ぶことであるための、ただ一つの道しるべが聖書なのである。「あなたの御言葉は、わたしの道の光／わたしの歩みを照らす灯」（詩編119:105）。

〈神の言葉としての聖書〉

聖書の各書を実際に書いたのは、預言者や使徒といった人間である。したがって、聖書そのものは、人間の言葉で記されている。しかし、それは神さまが私たちに聖書を与えるために、預言者や使徒たちを聖霊で満たし、用いられたからである。したがって、私たちはそれが人間の言葉で記されたものだとしても、聖霊の働きを信じ、神の御心を知ることのできる神の言葉として受け取るのである。

また、聖書を神の言葉として信じるということは、聖書以外のもの、外典と言われる書物や教会の言い伝え、人間的な知恵などのうちに神の言葉があるとする考えを斥けるということでもある。それらは、大切にされるべきではあるが、神の言葉である聖書、すなわち正典とされる66巻の書と同列に並べられるべきではない。ウ小教理問答が教えるように「旧新約聖書にある神の御言葉だけ」が神さまの御心を正しく知らせる神の言葉なのである。「聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益です」（テモテニ3:16）。

(松田基教)

テキスト	テモテへの手紙 二 3章14～17節
カテキズム	子どもカテキズム 問5
参照カテキズム	ウェストミンスター信仰告白 1章1節、4節 同大教理問答 問2、3、155 同小教理問答 問2、3、89

〔単元のねらい〕

教会学校に来ている多くの子どもたちは、小さい時から教会に集い、聖書を学ぶことが普通になっています。しかし、子どもたちは、友だちやテレビの影響を受けており、占いを初めとする様々な信仰的な誘惑にさらされています。だからこそ、救い主である神さまを知ること、また神さまによる救いを信じることのためには、神さまがお与え下さった御言葉である聖書から学ぶ以外に方法がありません。そのことを、子どもたちに改めて認識させていただきたい。教会学校の教師自身が、御言葉である聖書が語る福音に生き、御言葉の福音に満ちて、子どもたちに説教することに心がけていただきたい。

「聖書以外に神の救いはない！」

毎週教会学校では、礼拝や分級において聖書を学びます。そのため、小さい時から教会学校に来ているお友だちの中には、時として、「今日の聖書のところは、前に聞いたことがあるから、もういいよ」と思うこともあるかと思います。また逆に、最近教会学校に来始めたお友だちにとっては、「なぜ聖書を学ぶのだろう？」と思っているかもしれませんね。

テモテの手紙は、使徒パウロが、愛弟子であるテモテに対して送った手紙です。パウロは、長い間、宣教旅行に出かけ、福音を人々に伝えてきました。そしてこの手紙を書いているのは、ローマの牢獄の中です（参照1:8）。そしてパウロは、もうすぐ、処刑されるかも知れないとの思いで手紙を書いています。

一方、テモテは、クリスチャンホームに育った契約の子どもでもありました（参照1:5）。そのため、小さい時から、家で、お婆さんのロイスやお母さんのエウニケから、聖書を学んできたのです。そうして主イエスこそが真の救い主であると信じて、その後、パウロの第二回伝道旅行の時に一緒について行くこととなります（使徒

16:1,3）。テモテは、パウロは先生として尊敬していました。

そしてパウロは、愛弟子であるテモテに対して、この手紙を書き送っているのです。ですから、遺言と言っても良いかと思います。これからのキリスト教会のことを、テモテに託す思いで、この手紙を書いているのです。

パウロの心配は、二つあります。一つは、神さまを否定する人たちが、キリスト教会を攻撃し、クリスチャンたちに苦しみを与え迫害していることです。そのために、クリスチャンたちは、神さまを信じていることに対して、不安を持って、信仰から離れることがあるからです。

パウロのもう一つの心配は、テモテのようにクリスチャンホームに育った人たちが、教会に来ていたクリスチャンたちが、信仰から離れて、自分勝手な生活を始めていたからです（3:1～10）。

いずれにしても、神さまを信じている人たちの中に、教会から離れようとしている人たちがいたのです。そのことをパウロは非常に心配しているのです。そして、パウロはテモテに対して、「あ

なたは教会から離れてはなりませんよ」と語っているのです。

教会から離れないこと、そして神さまを信じ続けることで、何が一番大切なことでしょうか。パウロは語ります。「あなたが小さい時からお婆さんやお母さんに学び続けてきたこの聖書を、学び続けることですよ」と。聖書には、次のことが記されているのですね。

① 私たち人間が、神さまの御前で行い・言葉・心において、何一つ完全になれない罪人であること。

② 神さまが天地万物を創られたのであり、神さま以外に、救いを求めることは出来ないこと。

③ イエス・キリストが、私たちの救いのために十字架にお架かり下さったこと。

④ 私たちには、今も聖霊をとおして、神さまが働きかけて下さり、神さまは私たちの祈りを聞き届けて下さること。

⑤ 聖書によって、私たちは何が正しい事であるかを知ることができ、また間違った教えを正すことが出来ること。

私たちは、教会学校の礼拝に集うこと、また聖書を学び続けることにより、こうしたことを知ることが出来るのです。そして、神さまによる救いを信じて、また信仰を保ち続けることが出来るの

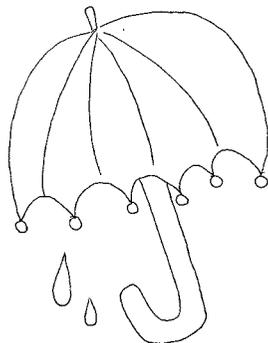
です。言い換えれば、聖書から離れた別の書物や、人の考えから、神さまによる救いを知ることは出来ないのです。そうした書物や人の考えからは、別の神や自分勝手な行動を起こさせることしか出てこないのです。

皆さんの中には、毎週教会学校に来ることや、聖書を学び続けることが、面倒くさくなったり、嫌になることもあるかも知れません。別の楽しいことを行いたいと思うこともあるかも知れません。しかし私たちは、神さまの子どもとされて、神さまによる救いに入ることが、一番の恵みなのです。今だけではなく、いつまでも永遠に続く喜びです。だからこそ、時には、教会に来ることが嫌になったり、聖書の学びが嫌になったりすることもあるでしょうし、別の楽しいことを行いたいこともあるかも知れません。しかしそれでも、神さまが、私たちを愛しておられ、私たちを救って下さるためにキリストを十字架にお献げ下さったことを覚え、休むことなく、神さまを礼拝し、神さまの御言葉である聖書から学び続けていただきたいと思います。私たちが毎週神さまを礼拝し、聖書を学び続けて、神さまを信じていることを、何よりも、神さまが喜んでいて下さっています。

(辻 幸宏)

[今週の暗唱聖句] テモテへの手紙 二 3章15節後半

この書物は、キリスト・イエスへの信仰を通して救いに導く知恵を、
あなたに与えることができます。



〈聖書〉

テモテニ3章15節

「この書物は、キリスト・イエスへの信仰を通して救いに導く知恵を、あなたに与えることができます」。

に生きる命が与えられることが書かれています。だから、聖書は神さまからいただいたお手紙です。神さまのお心を知るために一生懸命に読みましょう。神さまのお声が聞こえてきますよ。

〈ねらい〉

聖書の御言葉によって、神は今も語っておられる。御言葉の恵みに生きよう。聖書が普通の本とは違うこと、神さまの生きた言葉であること、子どもたちにも語りかけてくることを伝える。

〈展開例〉

本屋さんに行くと本がいっぱいあります。図書館にも本がいっぱいありますね。でもそれはみんな人間が書いたものです。

ただひとつ神さまが人間を使って書かれた本があります。それが聖書です。だれのために書かれたのでしょうか？ 私たちのためです。なにが書かれているのでしょうか？ 神さまがイエス様を私たちのために下さったことが書かれています。イエス様を信じる人にはいつまでも神さまといっしょ

〈やってみよう〉

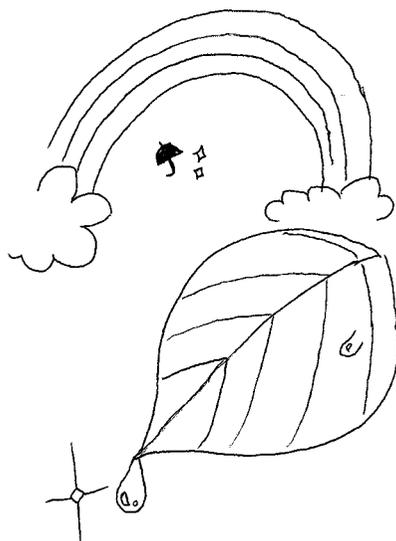
歌「これは聖書」

- 1 これは聖書
神さまからわたしがいただいた
お手紙です
- 2 これは聖書
わたしたちは
この教えにしたがい
あゆみましょう

出典『ふくいん子どもさんびか』15番（日本児童福音伝道協会、いのちのことば社）

〈お祈り〉

神さま、聖書をありがとう。神さまのお心を教えてください。



〈ねらい〉

聖書には神さまの言葉が書かれていることを伝える。

聖書には、神さまの思い（御心）があらわされている。

〈展開例〉

国語の時間が好きな人はいますか？
本を読むのが好きな人はいますか？
本を読むのが楽しい人はいますか？
本を書いたことのある人はいますか？
（それぞれ自由に発言させる）

本を書いたことのある子は、まだいないでしょうね？

本を書くのは難しいかもしれないけど、みんなは作文を書いたことがありますね。学校で先生が「この題で書いてください」という時もありますが、自由な題で書いてくださいと言われたら、どうするでしょうか？ まず何を書こうかなあと考えますね。そして、何を書くかが決まったら、じゃあ、次はどうしますか？ どのように書いたら、この文を読む人がわかってくれるかなあ、とか、書く順番を考えたりしますね。

では、次に、みんなは聖書を読んだことがありますか？（自由に発言させる）

聖書は本の形だけを見れば、普通に本屋さんで売っている本と変わらない気がするかもしれませんが。けれども、聖書はね～、特別な本なのです。聖書は、神さまが私たち人間に宛てた手紙なのです。みんなも手紙を書いたことがあるでしょう？

手紙を書くとき、まず相手のお友達のことを考

えて書くでしょう。そして、自分の思いや伝えたいことを、書いていきますね。それと少し似ているかもしれません。

神さまは、私たちがちゃんと生きていけるように、聖書という手紙を私たちに下さったのです。だから、聖書を読めば神さまのことが、わかるようになっていくのです。でも、聖書はただ一回だけ読めばいいのでしょうか？ 教会の先生や大人の人みんな聖書を読んでいますよね。聖書はただ一回だけ読んで、それで終わりと言うのではなく、私たちが生きていく限りいつもいつも、そばにおいて、毎日毎日読んでいくものなのです。そして、読むたびにいろいろ発見があるのです。

〈お祈り〉

神さま、私たちに聖書を与えてくださってありがとうございます。毎日少しずつでも続けて聖書を読めるようにしてください。そして神様に喜ばれる子供にならせてください。



〈ねらい〉

聖書を子どもの頃から学ぶことの恵みを知る。

〈展開例〉**○聖書を好きになるう**

みなさんは「聖書」が好きですか？（はい・いいえ）。この本、とても難しそうに見えますね。分厚いし、小学校では習わないような漢字や、外国の人や国の名前らしいカタカナがたくさんありますね。

でも、私が願っていることは、みなさんにはぜひ「聖書」のことを大好きになってほしいということです。今日私のお話を聞いて「聖書を読みたいな」という気持ちに、みんながなってくれることを願っています。

「大好きになりたいけれど、聖書って難しい本だよ」と思う人がいるのは当然です。聖書の中に用いられている言葉も、書かれている内容も、読めばすぐに分かるというような簡単なものではありません。どうすればわたしたちは聖書を好きになることができるのでしょうか。

ここでみなさんに質問があります。みなさんが持っている聖書は日曜日以外はどこに置いてありますか。

「日曜日用のバッグの中に入れっぱなし！」ですか？

「バッグからは出すけど、すぐに本棚に直行」という人はいませんか？

それとも、「わたしは毎日聖書を開いて読んでいます」という人はいますか？

私がおすすめるのはもちろん「毎日聖書を開いて読むこと」です。聖書をバッグや本棚にしまっておくのは、宝の持ち腐れです。でも、「毎日聖書を開いて読むこと」は簡単なことではありません。どうすればよいのでしょうか。

○「私の聖書」を持つとう

ここでみなさんにおすすめることがあります。それは、とにかく「自分の聖書」を買うことです（持ち運びができて、開きやすいものを選んで

てください）。そしてその聖書のどこかに自分の名前を必ず書いてください。そうするとそれが「私の聖書」になります。

そして、その聖書をいつも学校の宿題をする机（勉強机など）の上に、とにかく「置いて」ください。そしてその聖書の姿や形をとにかく毎日「見て」ください。

また、できれば聖書の表紙に毎日「触って」ください。そして一ページでよいので「開いて」みてください。

書いてあることの意味がさっぱり分からないと感じるときにも、また、今は聖書を読む気になれないと感じるときにも、ここまでのことはとにかく毎日やってみてくださいね。これらを続けているうちに、「私の聖書」は、みなさんにとってかなり身近なものになっているはずですよ。

○そのやり方は習い事に少し似ています

「私の聖書」を持つことの大切さは、私が今思いついたことではなく、教えてもらったことです。聖書をいつも近くに置いて慣れることが「聖書を好きになる」初めの一歩だと思います。みなさんの中には、小さな頃から習い事（楽器や習字その他）をしている人がいるかもしれません。なかには、覚えていないくらい小さな頃から始めていて、物心ついたときには、難しいこの楽器を弾けるようになっていたという人もいますでしょう。

聖書も実は、それと同じです。「私の聖書」を持つこと、つまり、聖書と私が仲良くなることに、早すぎるということはありません。早ければ早いほどよいと私は思います。テモテさんのように、「子どもの頃から」聖書に親しむことが大切なのです。

〈お祈り〉

天のお父さま、どうかわたしたちがあなたのみことばが書かれている聖書のことを大好きになることができますように。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

1. 一般啓示の不十分性と特別啓示の必要性について、分かりやすく伝えたい。
2. 聖書の十分性の教理を、分かりやすく伝えたい。

〈子どもカテキズム〉

問5：私たちがそれらを知るために、神様が与えてくださったものは何ですか。

答：聖書、神の御言葉です。

〈展開例〉

1. 聖書は、神様の自己紹介の本

- 人は、何によって、他の人を理解することができるだろうか。あなたが、見たことのない人について「知ろう」と思ったら、何によって知ることができるだろうか。みんなで考えてみよう。
- 例えば、「その人に対する周りの人の評価」、「その人が作った作品（絵画とか詩とか）」などによっても知ることができる。しかし、何よりも、その人自身が、自分の言葉で自己紹介してくれることが、その人を知る最善の方法であろう。
- 神様についても同じで、私たちが、神様について「知りたい」と思ったら、「周りの人が神様についてどう言っているか」ということや、「神様が造られたこの世界をみる」ことによっても多少知ることが出来るが、何よりも、神様ご自身がご自分について語ってくださる言葉を聞くことが、神様を知る最善の方法である。
- 聖書は、神様がご自分のことを私たちに紹介するために与えてくださった神の言葉である。「神様ってどんな方なのだろうか。神様

はどんなことを喜ぶのだろうか。神様はどんなことを悲しむのだろうか。」ということは、神の言葉である聖書を通してのみ知ることが出来る。

2. 聖書ってどんな本？ 誰に向かって書かれたの？ 何が書いてあるの？

- 聖書は誰に向かって書かれたのか。もちろん、聖書は、私たち「人間」に向かって書かれているが、ただの「人間」ではない。「罪人としての人間」である。
- 聖書は、「罪人」である人間に向かって書かれた。言い換えると、聖書は、人間が「罪人」に墮落したために書かれた。もし、人間が罪を犯さず、墮落していなかったら、聖書は必要なかったし、書かれることはなかったはず。
- なぜ、神様は、「罪人となった人間」に聖書を与えてくださったのだろうか。神様は、聖書を通して、「罪人である私たち」に何を教えておられるのだろうか。みんなで話し合ってみよう。
- 聖書の中心は、「罪からの救い」である。神様は、罪人となった私たちに、罪から救われる道（方法）を教えるために、聖書を与えてくださったのである。
- だから、「救いと関係のない周辺的なこと」に関しては、十分に記されていないかもしれないが、「罪からの救い」という中心的なことに関しては、聖書の中に十分に、余すところなく、少しの欠けもなく、完璧に記されている。
- テモテへの手紙二3章15～16節を読み、「聖書を読むと何が解るのか」、「聖書は、聖書を読む人に対してどのような力を持っているか」ということについて話し合ってみよう。

ピリポのサマリア伝道（8章4～25節）についての記事です。この出来事を契機にして、福音が遠くエチオピアの宮廷にまで伝えられたということは、福音宣教は、伝道者という人間が用いられているが、しかしそれは人間の業ではなく、あくまでも神様のご計画とみ業であることを示しています。「聖霊行伝」と呼ばれるように、伝道者たちを通して働く聖霊の活動であることを先ず認識しておく必要があります。

26節「しかし、主の使いが……」この出来事は、聖霊の働きかけの介入がおこり、事が始まっています。ピリポは、サマリア人伝道をしました。実りも豊かでした。その彼が急ぎよ、主の使いから「エルサレムからガザに下る道に出なさい」と命じられています。彼はその道でエチオピア人に伝道したあと、主の霊に「連れ去られて」（39）アゾトに現れ、すべての町々を通して……カイザリヤにいった」（40）。実に忙しい伝道旅行となっています。

ここでは、洗礼を受けるまでの求道者と伝道者とのやりとりが実に詳しく記述されています。「ガザ」は都「エルサレム」から南西に直線でも80キロメートルはあります。このガザは、今荒れている。人影のない町へとピリポを送るのは人間の計算には合いません。しかし、神は、そこに、一人の求道者を備えておられました。求道者は、エチオピア人の女王カンダケの高官で、女王の財産を管理していた人物でした。彼は、「礼拝のためエルサレムに上り」さらに「預言者イザヤの書」を買って帰路にそれを読んでいました。（27—28）

彼の求道熱心さを神様は決して放っておかれませんでした。彼の特徴は、真の神様を礼拝する人であったということ、遠くの国からやってくる事ができたのもそのことを表しています。聖書も購入し、帰路においても読みました。イザヤ書を読んでいても「導く人がいなければ、どうして分

かりましょう」と言っています。（31）彼は謙虚でした。自分流で満足はしません。自分の足りなさを認め、指導と解説をピリポに求めました。

次に、洗礼ということについてみましょう。ウエストミンスター小教理問答の問88に「キリストが、あがないの恵みを私たちに伝達される外的なそして普通的手段は何であるか」、答、「キリストが、あがないの恵みを私たちに伝達される外的な、そして普通的手段は、キリストの規定、特に御言葉と礼典と祈りであってこれらすべては、選ばれた者にとって救いのために有効とされるのである。」とあります。「洗礼（バプテスマ）」という礼典は、求道して、恵みを受けたしるしとしてあると同時に、それを受けることによってさらに恵みをいただける手だてでもあります。ですから「御言葉」という恵み的手段を忠実に用いた彼は、洗礼をいただく恵みへと進みます。洗礼の恵みは、告白という行為を共にします。人は心で信じたことを口で言い表すことが必要です。（ローマ10:9—10）エチオピア人は告白しました。「わたしは、イエス・キリストを神の子と信じます。」（37）

その結果、彼は、ピリポが見えなくなっても喜びながら帰って行ったのです。小教理問答問94、「洗礼とは何ですか。」答、「洗礼とは、父と子と聖霊の御名による水の洗いが、私たちがキリストに接ぎ木されること、恵みの契約の祝福にあずかること、そして私たちが主のものとなるという誓約を示し印証する礼典です。」エチオピア人は単なる神の存在や性質の知識ではなく、生きておられるお方、イエス・キリストにしっかりと聖霊によってつながれ、罪の赦しと、永遠の滅びから免れて神様の子供とされたのです。

「すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっており、彼らは、働なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いによって義とされるのである。」（ローマ3:23）

（羽野浩雪）

カテキズム 子どもカテキズム 問6
参照カテキズム ウェストミンスター小教理問答 問3

子どもカテキズム

問6 聖書に書かれていることは何ですか。

答 真の神さまが、私たちのためにしてくださったことと、
私たちに求めておられることです。

〈聖書に書かれていること〉

この問答は、聖書に何が書かれているかを問うことによって、私たちが聖書から何を受け取るべきなのかということを教えている。

聖書という書物は、66巻という多くの書によって構成されており、各書のジャンルも様々である。律法や歴史書があり、詩歌のような文学的書物もあり、イエス・キリストの伝記のような福音書や、いろんな教会や個人に宛てて書かれた手紙もある。それぞれの書物を読むことによって、私たちはそこから多くのこと、歴史・文化・文学・人生訓などを読み取ることができる。

しかし、私たちが聖書を正しく読むためには、聖書全体を貫くメッセージがあり、そのメッセージに即して読むべきであるということを理解しなければならない。したがって、ウ小教理にある「おもに」という言葉が重視されなければならない。

〈聖書全体を貫くメッセージ〉

「この書物は、キリスト・イエスへの信仰を通して救いに導く知恵を、あなたに与えることができます」(テモテニ3:15)。「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである」(ヨハネ20:31)。聖書が書かれた目的は、読む者がイエス・キリストを信じて、救いに入れられることである。これが聖書全体を貫くメッセージでもある。だから、私たちが聖書を読むときには、この目的に沿って、このメッセージに即して、読まなければならない。またそのように読むことができるように、聖霊の導きを求め、信仰が与えられるようにとの祈りと共に読まれるべきである。

〈神さまが私たちのためにしてくださったこと〉

聖書を読む者がイエス・キリストを信じて、救いに入れられるためには、聖書に示された神さまの御心を知ることが必要である。なぜなら、信じることと知ることとは不可分の関係にあるからである。もちろん、知ることがそのまま信じることをもたらすわけではない。しかし、知ることなしの信仰というものはありえない。したがって、信仰は何よりも「神について知ること」、すなわち「神知識」を求めるのである。そして、「神について知ること」、「神知識」は同時に「神さまが私たちのためにしてくださったこと」を知ることが私たちにもたらす。なぜなら、真の「神知識」とは、「神の存在」についての知識だけではなく、「神の業」についての知識でもあるからである。

さらに「神の業」とは、「神の愛に基づく業」である。その神の業の頂点が神の御子、主イエス・キリストの十字架である。したがって、「神について知ること」は、キリストを通して示された私たちへの神の愛を知ることなのである。

〈神さまが私たちに求めておられること〉

問4で学んだように、「神さまが私たちに望んでおられること」は、「神さまを愛すること、家族やお友だちを愛すること」、すなわち「神を愛し、隣人を愛すること」である。

私たちは、この具体的な事柄を聖書から教えられる。聖書が教える「愛する」ことは、抽象的な概念ではなく、具体的な行為を伴うものである。神さまの私たちへの愛がイエス・キリストとその十字架の御業として具体的にあらわされたように、私たちの神さまへの愛、隣人への愛も具体的にあらわされねばならない。それを私たちは聖書を通して教えられる。(松田基教)

6月8日

「愛の手紙」

説教展開例

テキスト 使徒言行録 8章26～40節
カテキズム 子どもカテキズム 問6
参照カテキズム ウェストミンスター信仰告白 1章4節
同大教理問答 問3～5、155～157
同小教理問答 問3

〔単元のねらい〕

今日与えられたテキストでは、伝道について、洗礼についてなどの注目点もありますが、今回は、先週に引き続き聖書に注目します。私たちは、聖書を読むことにより、聖書を理解することが求められており、その理解により、救いについて、また神さまが私たちに求めておられる義務について読み解くことが出来ます。しかし、子どもたちが自分で聖書を読む時、理解できないことが多くあります。だからこそ、聖書が解き明かされる説教が必要であり、主なる神さまは全ての人に御言葉である聖書が読まれることと同時に、聖書が解き明かされる必要があることを求めています。

「聖書が解き明かされる」

教会学校で、「家に帰ってからも、少しずつでよいから、聖書を読みなさい」と言われることがあると思います。そして、皆さんの中にも、家で、家族の人と一緒に、あるいは一人で、聖書を読んだことのある人もあると思います。その時、皆さんは、聖書に書かれていることをすぐに理解することが出来たでしょうか。そうであるならば、非常に素晴らしいことです。しかし、「聖書を読んでもみただけでも、まったく理解できなかった」という人もいると思います。その時、聖書が理解できなくても良いと思います。後から、牧師先生に、何が書いてあったか尋ねて下されば、先生は丁寧に教えて下さると思います。

さて聖書に、エチオピアの宦官について記されています。彼はエチオピアの女王カンダケに仕えていた人で、女王の全財産を管理していたのですから、女王からも非常に信頼されていた人でしょう。彼は、エルサレムに礼拝に行き、その帰り道でした。馬車に乗って移動していることから、女王からとてもよくしていただいていたことが分かります。

しかし、彼はさらに聖書を持ち、それを馬車の

中で読んでいたのです。聖書は、今、みんなが持っているように旧・新約聖書が一緒になったものなど当時はありませんでした。動物の皮を紙の代わりにして、それがつなぎ合わされており、それを巻物にしていたのです。印刷されたものなどありませんから、一つ一つ書き写されたものであり、非常に高価でした。それを彼は持っていたのです。そしてイザヤ書の巻物であり、彼はそれを読んでいたのです。

彼は、女王からも信頼されていたのであり、また外国語であるヘブライ語の聖書を読むことが出来ることから、非常に賢い人だったことが分かります。しかし、彼は、この聖書に書き記されていることが、何を意味しているのか、理解することが出来ないで、悩んでいたのです。

しかし、彼の悩みを、主なる神さまは知っておられ、彼が聖書の言葉を理解して、神さまを信じることが出来るように、お導き下さいました。主は、つかいの天使を主の弟子フィリポにおつかわしになります。

フィリポや他の主イエスの弟子たちは、エルサレムにいた時、仲間のステファノが殺されたため

(使徒7章)、ユダヤやサマリアの地方に散らばっていたのです(8:1)。そしてフィリポは、北のサマリアに下っていたのです(8:5)。そして一生懸命、神の国とイエス・キリストの名についての福音を告げ知らせしていたのです(8:12)。

主の天使は、その彼の所に行き、南のガザに行きなさいと命令するのです(8:26)。フィリポにとっては、ようやくたどり着いたサマリアで、神さまのことを伝えており、そして神さまを信じる人が出てきたことを喜んでいたのでした。しかし、神さまは「南に行け」と命令されます。フィリポはどんな気持ちだったのでしょうか。ここを離れなければならないという残念な気持ちと、「なぜ」という思いもあったかもしれません。しかし、フィリポは、神さまの命令に従い、南のガザに歩いていきます。100km以上の道のりであり、荒地ですから、非常に大変だったことでしょう。

そしてフィリポが、ガザに着いた時、神の霊がフィリポに対して、「エチオピアの宦官の馬車を追いかけて、一緒に行け」と命令するのです。馬車を走って追いかけるのは大変なことでしょう。フィリポは、「ふうふう」言いながら、馬車の横を走ります。すると馬車の中で、ヘブライ語で聖書を読む声が聞こえてきたのです。フィリポは、この人の事だと思い、「読んでいることがお分かりになりますか」と声をかけます。宦官は、読んでいる聖書の意味が分からないことを語り、

フィリポを馬車に招き入れるのです。

フィリポは宦官に対して、この聖書の言葉は、イエス・キリストについて語られていることを説明します。キリストの十字架の預言です。キリストの十字架の故に、信じる者に救いが与えられることを、宦官は理解し、信じるのが出来たのです。そして宦官は、聖書で語られていることを理解し、信じるのが出来たからこそ、すぐさま信仰を告白し、洗礼を申し出たのです。

つまり、聖書は、読めばすぐに理解できることばかりではありません。宦官のような人であっても理解出来ないこともあるのです。しかし、聖書が易しく説明されることにより、聖書に書かれていることを理解することが出来るのです。そして聖書が理解できることにより、救い主である神さまを信じるのが出来るのです。

聖書に書かれていることは、真の神さまが私たちのためにしてくださったことと(イエス・キリストの十字架によって私たちに救いが与えられること)、私たちに求めておられることです(善き業)(子どもカテキズム問6)。

だからこそ、みんなも、毎日少しずつでも聖書を読んで、イエス・キリストによって救われていることを理解し、信じていただきたいと思います。

(辻 幸宏)

[今週の暗唱聖句] 使徒言行録 8章35節

そこで、フィリポは口を開き、聖書のこの箇所から説きおこして、
イエスについて福音を告げ知らせた。



〈聖書〉

使徒言行録8章35節

「そこで、フィリポは口を開き、聖書のこの箇所から説きおこして、イエスについて福音を告げ知らせた」。

〈ねらい〉

聖書はキリストの福音を告げ知らせている。神の愛と福音を聞き取ろう。聖書が神さまからいただいたお手紙であることを知らせましょう。その中心がイエスさまの十字架であることを伝えましょう。

〈展開例〉

つばさ君はちょっとひらがなが書けるようになりました。それでいなかのおばあちゃんにお手紙出そうと思いました。

おばあちゃんおげんきですか？

おばあちゃんいつまでもげんきでいてね。

またあそびにいくからね。

と書きました。お母さんがそれを封筒に入れて切手をはってくださいました。「おかあさん、どうして切手をはるの？」とつばさくんは聞きました。「切手がないお手紙はその人のところに届かないからよ」とお母さんは答えました。

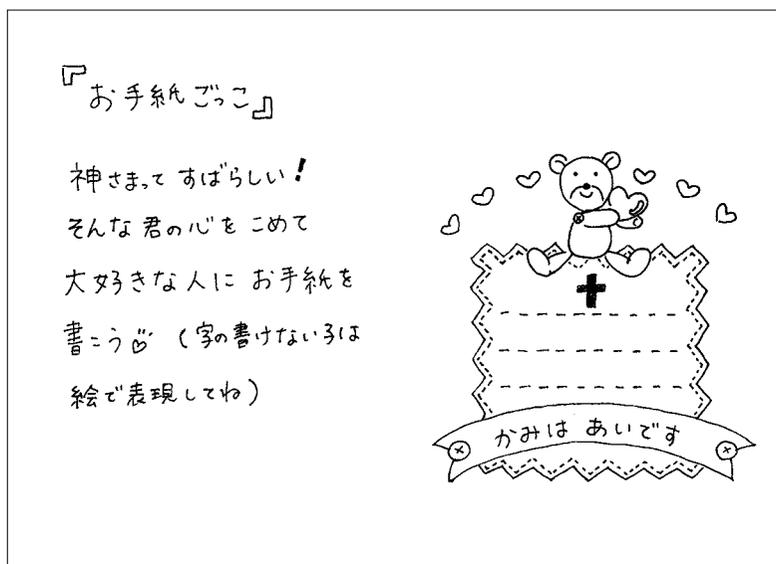
神さまからのお手紙の聖書もだれでも読むことができます。でも、本当にその人の心の中にはなかなか届きません。聖書に書かれてあるイエス様を信じないと心に届かないのです。神様からのお手紙の真ん中にあるイエス様のことよく聞こうね。

〈やってみよう〉

遊び「お手紙ごっこ（下図参照）

〈お祈り〉

神さま、聖書をありがとう。イエスさまのことがわかるようにしてください。



〈ねらい〉

聖書を読むとき、気をつけること。
理解できない時は、わかる人に聞くことが大事

〈展開例〉

聖書を読むとき、一回読んでもわからないことがあると、先週お話をしました。

今日のこの聖書の箇所にはどんなことが書いてありましたか？ わからないことは、ありましたか？

では、質問します。

①エチオピアというのは、どこにある国の名前ですか？

⇒アフリカ（エチオピアとガザの距離は約1000km以上も離れている。身近な場所例えば、名古屋～沖縄が直線距離で約1300km。名古屋～札幌が直線距離で約980km）。

②どんな人が登場しましたか？

⇒女王カンダケの高官。お金の管理を任されていたので、今で言えば財務大臣のような身分。女王はこの人を信頼していた。女王に仕える人なのだから頭もよかった。この人はヘブライ語で書かれている聖書を読んでいたのだから、

エチオピアの言葉だけでなく、ヘブライ語も読めた。

③この人はどんな人だと思いますか？

⇒地位も知識もあるのに偉そうにしている。フィリポに対して丁寧に接している。

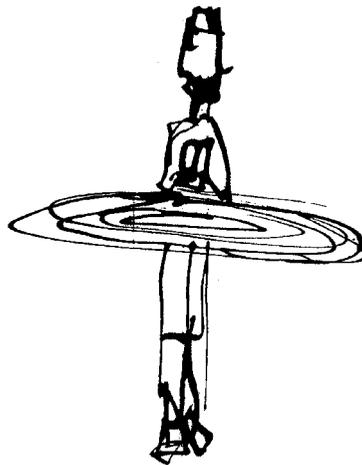
⇒わからないことはわからないとはっきり言う。正直。知ったかぶりをしない。

どれだけ頭の良い人でも、聖書の御言葉は信仰がないとわからないことがあります。そういう時は、自分勝手に話を解釈したり、わかったつもりにならないで、信仰を持っている先輩（親、教会学校の先生、教会の先生など）に聞きましょう。

このエチオピアの高官はフィリポに聖書に何が書いてあるのかを教えてもらい、イエスさまが私たちの罪からの救い主だということがわかって、洗礼を受けました。そして、イエスさまを信じた喜びで満たされて、エチオピアに帰って行ったのです。

〈お祈り〉

神さま、私たちが聖書を読んで、正しく神さまのことがわかるようにしてください。



〈ねらい〉

聖書に親しむことの大切さを学ぶ。

〈展開例〉**○分からないことは質問しよう**

今日のお話に登場したエチオピアの女王のもとで働いていた人は、自分一人で聖書を読んでいるときには、ここに書いてあることの意味がさっぱり分かりませんでした。でも、フィリポさんが解説してくれたので、やっと分かるようになりました。そして洗礼を受けてイエスさまの弟子にさせていただくことができました。

みなさんはどうでしょうか。こんなに分厚い聖書を、自分一人で読んで分かるでしょうか。たぶん分かりませんよね。分からなくてもいいと思います。聖書にはどんなことが書いてあるのか、その意味はどんなことなのかをみんなに分かりやすく解説するために、この教会があり、教会学校があるのです。小学校で国語や算数や理科や社会などを勉強しているとき分からない問題が出てきたら、みなさんはどうしますか。分からないまま放っておくと、先に進んでいくことが難しくなるでしょう。聖書の学びも同じです。この教会には聖書の勉強をしている牧師さんや長老さんや教会学校の先生たちがいます。自分一人で読んでも分からないときには、恥ずかしがらないで、先生たちに質問してください。みんなの前で質問するのが恥ずかしいときは、手紙を書いてくださってもいいし、メールでもいいですよ。必ずお返事いたします。

○とにかく聖書を読もう

私からみなさんをお願いしたいことが、二つあります。第一は、聖書はとにかく毎日読んでくださいということです。分からないところには印をつけておけば、あとで先生に質問することができます。分からないから読まないというのは、いつまでも聖書の内容が分かるようになりません。

○聖書のみことばをノートに書こう

第二は、聖書のみことばを、できればノートに

書き写してくださいということです。漢字の勉強にもなりますよ。また、書いているうちに「なるほど、そういうことか」と分かってくることもあるでしょう。そしてそのノートの最後のページまで書き終えたら、それを大人になるまで大切にしておいてください。みなさんにとって大事な一生の宝物になるでしょう。また、そのノートをぜひ先生たちに見せてください。「よくがんばったね!」とほめてもらえる、うれしいでしょう。

○イエスさまの愛を知ろう

わたしたちはなぜ、聖書を読まなければならないのでしょうか。理由は次のとおりです。

聖書に記されていることの中でいちばん大切なことは、イエスさまの愛です。もっと詳しく言えば、救い主である神さまの独り子イエス・キリストが、十字架の上でわたしたち罪人の身代りに死んでくださることによって、世界の人々の前に示された神さまの愛です。

それが分かるようになるとき、わたしたちは家族や友達や多くの人々を愛することができるようになります。また同時に、わたしたちの心の中の、人を憎んだり嫌ったりする思い（それを聖書は「罪」と呼びます）がどれほどひどいものであるかが分かるようになります。その罪を、神さまは、イエスさまを信じる人の心の中から取り除いてくださいます。

世の中には、たくさんの方があふれています。でも、イエスさまの愛がはっきり分かるように書かれているのは聖書だけです。聖書は「愛の手紙」です。聖書を読まなければ、わたしたちが本当の愛を知ることはできないのです。

〈お祈り〉

天のお父さま、どうかわたしたちが毎日聖書を読むことによって、あなたのことをますます深く知ることができるようにしてください。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

1. 聖書を「愛の手紙」として読むことの大切さを伝えたい。
2. 「聖書の中心点は、イエス・キリストについての福音である」ということを伝えたい。

〈子どもカテキズム〉

問5：私たちがそれらを知るために、神様が与えてくださったものは何ですか。

答：聖書、神の御言葉です。

〈展開例〉

1. 聖書を「愛の手紙」として読む

- 先週、「聖書は、神様が、罪人である私たちに向けて書いてくださった言葉である」ということを学びました。今日は、「聖書は、神様からの愛の手紙である」ということについて考えよう。
- 『『私』に向けて書かれた言葉』はたくさんある。例えば、どんな「言葉（文章）」があるだろうか。みんなで話し合ってみよう。（学校の教科書、学校から配られるプリント、新聞の中の広告、年賀状、友だちからの手紙、小説、歌の歌詞……）
- 同じ「言葉」でも、読む物によって、読むときの気分も、読み方も全然違う。
- 大好きな人からもらった「ラブ・レター」を読むときの気持ちや読み方について考えてほしい。学校の教科書を読む時とはまったく異なる気分で、異なる読み方をするはず。
- 聖書を読むときにとても大切なことは、聖書を神様から贈られた「ラブレター」として読むということ。聖書は、「罪人」に「救いの道」を教えるために書かれた神様からの手紙

であるが、この手紙が書かれた最大の動機は私たち罪人に対する神様の無限の「愛」であった。なんとかして「私」を罪から救い出そうとしてくださっている父なる神様の真剣な愛を、この聖書から読み取りたい。

2. 聖書の中心点は、イエス・キリストについての福音

- 聖書は「罪からの救い」を教えるために書かれたが、「救い」の中心点は、「イエス・キリストについての福音」である。すなわち、「イエス・キリストによって救われる」というメッセージこそ、聖書の一番の中心である。この中心点をしっかりとらえて聖書を読むことの大切さを伝えたい。
- 使徒言行録8章35節、「そこで、フィリポは口を開き、聖書のこの箇所から説きおこして、イエスについて福音を告げ知らせた。」とあるように、聖書の中から「イエスについての福音」を読み取ることが、聖書を読むときにとても大切なことである。



私たちの信じている神様は、目に見えません(ヨハネ4章12、20節)。私たちの信じている神様は、「霊なる神」であります。イエス様ご自身が、「神は霊である」(ヨハネ4章24節)とおっしゃっておられます。しかし、私たちの信じる霊なる神様は、幽霊ではありません。また、霊といっても死んだ神では決してありません。では、どのような霊なる神なのでしょう。

(1)何でも知っておられる全知全能の霊なる神さま

詩編139編は、神様が全知全能の神であることを賛美しています。「全知全能」とは、すべてのことを知り、すべての知識(知恵)があるということになります。この詩編の言葉から引用すれば、「神がこのわたしを極め、わたしをすべて知っている」(1、2節) こととなります。

そして、詩編は、この全知全能を抽象的に語らず、「驚くべき知識はわたしを超え、あまりにも高くて到達できない」(6節) というように、この詩編の記者が、神の知識(知恵)を体験したかのような言い方において、体験的に語られ、そこから、神がわたしを知り尽くしておられるというその知識の偉大さを賛美しております。また、それは、7節「どこに行けば、あなたの霊から離れることができようか、どこに逃れば、御顔を避けることができよう」ということより、神を逃れることができないう実感からも読み取ることができます。更に、この7節は、単に神から逃れることができないう束縛からくるものではなく、神に守られているという喜びと平安として賛美しております。

他方、アモスでは、その逆として神に見極められ断罪される恐怖となり得ることとして記されて

おります(アモス9章1～4節、ヨブ7章17～21節参照)。つまり、神の全知全能性は、神を信じる者にとっては守られているという喜びと平安になりますが、神を信じない者にとっては、断罪となることが示されていることとなります。

(2)生きて働いて私たちを守り、すべてを統べ治められる霊なる神さま

ここで詩編は、すべてを統べ治め、私たち人間を導き完全に守って下さる(10節参照)お方であることを賛美しています。私たちの目に見えない霊なる神は、この私たちに確実に生きて働いておられる神であるということを詩編は賛美し、霊なる神を賛美しているのです。この私に確実に、絶対に、生きて働かれるお方であるから、霊なる神であり、これが私たちの信じている霊なる神なのであります。そして、その目に見える証拠が、御子イエス・キリストがこの世に来られ、十字架にかかり、復活されたことにおいて示されているのであります。私たちの神様は、今も生きておられる。そして、キリストにおいて、今も私たちの心の中に住んでおられ、私たちを守っているのであります。

私たちもこの詩編と同じように、生きて働いて、今でも私の心の中に住んでおられる神を賛美していくことが、私たちキリスト者の生きる意味であります。

大変、荒っぽく申し上げれば、神を賛美していることだけで、この世にこの私が生まれた意味、意義があるのであります。その意義をこの詩編は悟ったが故に、このような素晴らしい賛美をしているのではないのでしょうか。(潮田 祐)

カテキズム 子どもカテキズム 問7
参照カテキズム ウェストミンスター小教理問答 問4

子どもカテキズム

問7 私たちの神さまはどのようなお方ですか。

答 神さまは霊なるお方です。

ですから、私たちを包み込んでくださり、永遠で変わらないお方です。

〈「神は霊」と語るにあたって〉

私たちの神様が「霊なるお方」であることは、ヨハネ福音書4章24節のみ言葉によって私たちに知らされている。しかし聖書全体の脈絡を押さえることなく単に「神様が霊なるお方」と語ると、幽霊・おばけなど異教・オカルト的なものに重ねられて理解される恐れがある。その点に注意を払いながら教えたい。

〈無限・永遠・不変〉

神様が霊であるとは、一つには人間のように物的な存在でない、つまり空間的・時間的に制約を受ける存在ではない、ということの意味する。霊なる神様はまず存在において「無限・永遠・不変」という性質を帯びておられるのである。

ただ存在において「無限・永遠・不変」という点は幽霊を云々するときにも言及される。そして、幽霊はいつまでたっても、どこに逃げても、幽霊は追いかけてきて人に悪さをする、という形で人に恐れを呼ぶ要素となってしまうのである。

そこで神様が「無限・永遠・不変」であると語るにあたっては、神様が存在以外にも様々なよいご性質において「無限・永遠・不変」であることもあわせて語られる必要がある。ウェストミンスター小教理問4が「存在、知恵、力、聖・義・善・真実において無限・永遠・不変」と語ること、そして子どもカテキズムが「私たちを包み込んでくださり、永遠で、変わらない」と語ることにはそうした意図が込められている。神様は旧約聖書において救い主を与えるとの約束を与え、それを変えることなく果たされた。また世のはじめから交

わることなく、人間に対して恵みと憐れみを注ぎ続けてくださっている。イエス様は「わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいる」(マタイ28:20)と約束されている。そこで私たちは、神様がいつまでも、変わることなく私たちを包み込んでくださる、と確信を持つことができる。

〈人と交わる人格的な神〉

「神は霊である」とのヨハネ福音書4章24節の言葉は、「だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」という、あるべき神礼拝を人間に教える言葉と共に語られている。霊である神は、神の僕として神のみ声に聞き従い、神に仕える者として「我々にかたどり、我々に似せて」(創世記1:26)人間を創造するよう計画された。そして人が神の似姿となるため創造にあたって神の息を人に吹き込まれた(創世記2:7)。旧約聖書において「息」という言葉は「霊」とも訳されるから、神の息＝霊を吹き込まれた人間は霊的な存在として生きるものとなった。つまり神と交わることができる存在、様々なことを感じ、考え、行動し、他者に働きかける人格的な存在となった。併せて、人の生死は根本的には神の息が人のうちにあるか否かによることとなった。人間が墮落して神に背を向けた時、人は神の息を失ったため、霊的に死に、永遠に生きることはできなくなってしまったのである。

この墮落から救われた私たちは、改めて霊である神と交わり、霊と真理をもって神を礼拝し、神に仕える人生を歩まなくてはならない。

(吉田 崇)

テキスト 詩編 139編1～10節
カテキズム 子どもカテキズム 問7

〔単元のねらい〕

神さまについての最初の問答であり、まずは神さまのスケールの大きさを伝えたい。これからカテキズムを通して神さまについて学び、神さまのことを知っていくが、すでに神さまの方が私たちのことをすべてご存じであられること、永遠に変わることのない存在として私たちを包み込んでくださることを教えたい。そして、神さまが目には見えない霊であられるということが、ぼんやりとしたことではなく、はっきりとしたリアリティとして伝えられるようにしたい。そのためには、語る者自身の霊なる神さまに対する信仰、信頼、服従が求められる。

「神さまの大きな御手の中で」

これからしばらくの間、神さまはどのようなお方かということを学んでいきます。今日のカテキズムを読んでみて、どのように感じたでしょうか。「霊って何だろう。幽霊みたいなもの?」、「永遠で変わらない、そんなものあるのかなあ?」と思ったお友達もいるかもしれません。先生はみんなに、ぜひそんなふうにもいろいろと考えてほしいと思います。というのは、神さまはとてもスケールの大きなお方で、私たちがどれだけたくさんを知っても、神さまのすべてを知ってしまうことはできないのです。今日読んだ詩編の139編6節に、「その驚くべき知識はわたしを超え、あまりにも高くて到達できない」というのは、そういう神さまの大きさを教えてくれているのです。

そのように聞くと、神さまって何だか遠い存在で、私たちの手が届かない存在のような気がするかもしれません。確かに、神さまは私たちが簡単に手にすることのできるようなお方ではありません。みんなの学校のお友達の中には、お守りを持っている人がいるかもしれません。ちょうど手の中に入るぐらいのお守りをもって、それを神さまとしてお願いをする人はたくさんいます。でも、聖書の神さまはそのように私たちの手の中に入るお方ではありません。カテキズムに「神さまは霊なるお方です」とあります。霊であるということは、神さまは目に見える物ではないということ

です。つまり、私たちの手の中に入るようなお方ではないのです。

そうすると、やはり神さまは何か遠い存在のように感じてしまうかもしれませんが、でもここで大切なことがあります。それは、霊である神さまは、私たちから遠く離れた手の届かないお方ではなく、まったく逆で、神さまは霊であられるからこそ、私たちのとても近くに来てくださるお方であるということです。5節「前からも後ろからもわたしを囲み、御手をわたしの上に置いてくださる」、10節「あなたはそこにもいまし、御手をもってわたしを導き、右の御手をもってわたしをとらえてくださる」。神さまは、私たちの手の中に入るお方ではなく、逆に、私たちの方が神さまの大きな御手の中に入れられ、守られるのです。ちなみに、ここで言う神さまの「手」とは、私たちと同じような目に見える「手」ではありません。神さまは霊であられるからです。神さまの御手の中にあるということは、神さまがいつも一緒にいてくださり、私たちを包み込むようにして守ってくださるということです。

もし、神さまが私たちの手の中に入るお守りのような物であるなら、それをうっかりなくしてしまったり、もう神さまと一緒にいてくださらないことになります。でも、霊であられる神さまは、そのような私たちのうっかりミスでいなくなっ

しまうようなお方ではありません。逆に、私たちが神さまのことを忘れてしまったときにも、神さまは私たちから離れず、一緒にいてくださるので

す。もちろん、それならちょっとぐらい神さまのことを忘れてもいいやとか、教会学校を休んでもいいやとか、そんなふうには思わないでください。神さまが霊であられるということは、私たちは神さまから離れてしまうことはできないということです。7節「どこに行けば、あなたの霊から離れることができよう。どこに逃れば、御顔を避けることができよう。天に登ろうとも、あなたはそこにいまし、陰府に身を横たえようとも、見よ、あなたはそこにいます」。私たちは神さまの目の届かないところに逃げることはできません。ですから、どんなに隠れて悪いことをしても、神さまは見ておられ、とても悲しまれるということを感じておかなければなりません。私たちは、どこにいても神さまと一緒にいてくださることを信じます。もし悪いことをしてしまったら、その場所ですぐにイエスさまを信じてお祈りをしてほしいと思います。神さまは、そのような私たちを包み込み、赦し、守ってくださるのです。

さて、はじめに、これから神さまのことを学んでいきますと言いましたが、ここでもう一つ大切なことをお話ししておきたいと思います。それは、私たちはこれから神さまのことを学んでたくさん

わたしを知っておられる。座るのも立つのも知り、遠くからわたしの計らいを悟っておられる。歩くのも伏すのも見分け、わたしの道にことごとく通じておられる。わたしの舌がまだ一言も語らぬさきに、主よ、あなたはすべてを知っておられる」。これからみんなはどんどん大きくなっていきます。神さまのこともたくさん知っていくでしょう。でも、ひょっとしたら、神さまのことがよく分からなくなってしまうときもあるかもしれません。人の心というのは変わりやすいのです。自分でもどうなっていくのか分からないところがあります。でも、神さまは私たちのことをご存じです。そして、神さまは「永遠で、変わらないお方です」。神さまはいつまでも変わることなく、私たちを愛してくださいます。もし私たちが神さまのことがよく分からなくなっても、神さまは変わることなく、私たちがまた神さまをよく知ることができるように導いてくださいます。だから私たちも、失敗してしまうこともあるかもしれないけれども、変わることなく神さまを信じて、愛していきたいと思

います。神さまは永遠です。手の中に入るお守りは、いつかボロボロになっていくでしょう。でも、霊であられる神さまは、永遠に輝いておられるお方です。私たちも、イエスさまを信じるなら永遠の命をいただくことができます。それは、神さまといつまでも一緒にいることのできる命です。そして、その永遠の命をいただいて生きる人は、いつも、いつまでも輝いているのです。(石原知弘)

[今週の暗唱聖句] 詩編 139編5節

前からも後ろからもわたしを囲み、御手をわたしの上に置いていてくださる。



〈聖書〉

詩編139編5節

「前からも後ろからもわたしを囲み、御手をわたしのの上に置いていてくださる」。

〈ねらい〉

神は霊であり、あまねく統べ治めておられる。神との交わりに生きよう。幼い子にとって神を感じることは大人よりも敏感な面がある。神がこわい存在とを感じる子もいるので、愛に満ちた方である事を伝えましょう。

〈展開例〉

今日はとてもよいお天気です。保育園でお散歩に行くことになりました。あきなちゃんは大好きなゆり子先生と手をつなぎました。裏の道を行くと、坂道になっています。木がたくさん見えてきました。木に囲まれた奥に大きな古い建物がありました。シーンと静かな場所です。

「せんせい、ここに神さまがいるのかな？ 神さまってこわいのかな？」とあきなちゃんは聞きました。

「神さまはこのおうちのなかだけにいるんじゃないよ。あきなちゃんの前にも後ろにもいるの。先生のまわりにもいるの。そして守っていてくれるの。神さまはこわくないよ。とてもやさしい方なのよ。」とゆり子先生は言いました。

「じゃあ、今あたしといっしょに神さまもおさんばしてるの？」

「そうよ。いつだってあきなちゃんといっしょにいてくださるよ。だから心配しないで神さまといっしょに歩いていこうね」

あきなちゃんとゆり子先生はにっこりしました。

〈やってみよう〉

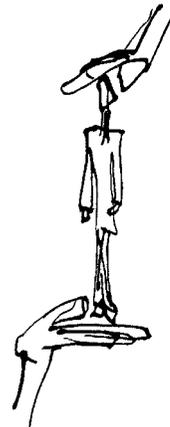
歌「主イエスとともに」

「ふくいん子どもさんびか」90番

(日本児童福音伝道協会、いのちのこば社)

〈お祈り〉

神さま、いつもいっしょにいてくださってありがとうございます。くらい夜も、さびしいときも、かなしいときもいっしょにいてください。



〈ねらい〉

神さまは、いつでも、どこにでも存在しておられる。

神さまは変わることがない。

〈展開例〉

私たちの神さまは、どのようなお方ですか？ 礼拝のお話を覚えていますか？ 「神さまは霊なるお方です」って言ってましたね。それはどんな意味でしょうか？（自由に発言させる）

隣のお友達と握手できますか？ そう、できますね。では、○○ちゃん（この場にはいない誰かの名前）と握手できますか？ ここにいないお友達とは握手できませんよね。空気と握手してみてください。握手できないですね。じゃあ、ここで問題です。握手をできないということは、空気はここにはないということでしょうか？ 違いますね。空気は目には見えないし、触ったりできないけど、空気はわたしたちのまわりにありますね。

私たちの信じている神さまは、霊なるお方です。霊だということは、目には見えないということです。私たちは家から教会に来るとき、また、家から学校に行く時、どんなに急いでも、何分か、かかりますね。瞬間移動はできません。もし神さまが、私たちと同じように目に見える存在だとしたら、私たちが「神さま～」と呼んでも、来てくださるまでに、時間がかかってしまいます。そして神さまをお呼びする人はこの教会の人だけでなく、○○教会も、○○教会も、そして日本だけで

なく世界中の人が神さま～と呼んだら、神さまが来てくれるまでに何時間も何年もかかってしまいますネ。

神さまが霊なるお方だということは、いつでも私たちのそばにいてくださるということなのです。そして、私たちが気がついてなくても、私たちのまわりに空気があるように、神さまは私たちを包み込んでくださっているのです。

みんなは、食べ物の好き嫌いがありますか？前は食べられなかったけど、今は美味しく食べられるものはありますか？ その反対で、前は好きだったけど、今は嫌いなものはありますか？ おうちの人やお友達とけんかをして、「だいきらい」と言ったり、仲直りをして「大好き」と言ったりしたことありますか？ そのように私たちは、いろいろ心変わりをしたりします。

神さまがもし、そんなふうには時々心変わりする神さまだったらどうでしょう？「今日は神さまのご機嫌はどうか？」って、心配しながらお祈りしなくてはならなくなってしまいますネ。

神さまは永遠に変わらないお方です。ですから、いつでも、どんなときでも「神さま」ってお祈りしたら、神さまは聞いてくださるのです。

〈お祈り〉

神さま、いつも私たちと共にいてくださってありがとうございます。私たちは時々気分が変わってしまいますが、神さまはずっと変わらないでくださり、ありがとうございます。



〈ねらい〉

神さまが「霊」であることを学ぶ。

〈展開例〉**○神さまを見たことがある人はいません**

旧約聖書にも新約聖書にも「霊」という言葉が出てきます。「霊」と聞くと、みなさんの中には「気持ち悪い」とか「こわい」と感じる人が必ずいるでしょう。でも、聖書の中で「霊」は気持ち悪いものでもこわいものでもありません。なぜなら、聖書に出てくる「霊」は（すべてではありませんが、多くの場合）「神さま」のことだからです。わたしたちのことを心から愛してくださる神さまが、気持ち悪い存在や、こわい存在であるはずがありません。

世界を創造してくださった神さまは「霊」の姿をしておられます。その意味は、神さまとは人間の目で見ることができない方であるということです。みなさんの中に「神さまを見たことがある」とか「霊を見た」という話を聞いたことがある人がいるかもしれませんが、そういう話を信じてはなりません。そのようなことは、聖書のどこにも書かれていません。

○「見たことがある」と言う人に会ったとき

でも、そういう話をする友達に会ったときに、「お前の言っていることはうそだ。うそつきは泥棒の始まりだ」とかいうと、たぶんけんかになってしまいます。友達とけんかしてしまうと、学校に行くのがつらくなるかもしれません。また、日本の国の中にはいろんな宗教があり、その中には「目に見える神」を教えているものもあります。もしかしたら、その友達は、自分がそう信じているわけではなくて、おじいさんやおばあさん、お父さんやお母さんなど、自分の周りにいる人が信じていることを、そのまま真似して言っているだけかもしれません。その場合は、わたしたちが「これが正しいことだ」と信じていることを伝えようとすればするほど、その人は家族や周りの人たち

を責められているような気持ちになって、心を閉ざしてしまうでしょう。正しいと信じていることでも、言い方を間違えると誤解されることがありますので気をつけましょう。上手な方法は、優しい言葉で、また他の人がたくさんいる前ではなく一対一で、そっと教えてあげることです。自分の口で直接言わないで他の人に言ってもらうのもアイデアです。「教会学校と一緒に行こうよ!」と誘ってみてください。もしその人が教会学校に来てくれたら、みなさんの代わりに先生たちが神さまとはどのような方であるかということのを正しく教えてくださるでしょう。

○「霊なる神さま」はどこにでもおられます

さて、神さまが人間の目に見えない「霊」の姿をしておられるということのもう一つの意味は、「神さまはどこにでもおられる」ということです。このことにも間違った教えがあります。「神さまはあの建物の中にいる」とか「この箱の中にいる」とか「あの人は神さまだ」という話を聞いたことがあると思います。なぜそれが間違いかというと、どこか一つのところだけに神さまがおられるのだとしたら、それ以外のところにはおられないということになってしまうからです。でも、苦しんでいるときに「神さま、助けてください」とお願いしても、どこか一つのところに行かなければ助けてもらえないのだとしたら、そこまで行く間にすっかり絶望してしまう人がいるかもしれません。聖書の神さまは、苦しんでいる人がいても、その人が自分のところに来るまでは何もしてくだらないような、冷たい方ではありません。「霊なる神さま」は、いつでもどこでもわたしたちと一緒にいて、助けてくださるのです。

〈お祈り〉

天のお父さま、あなたはどこにでもおられる「霊なる方」です。どうかいつもわたしと一緒にいてください。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

1. ウェストミンスター小教理問答の間4を学ぶ。
2. 「神は霊である」ということの意味（神様は、心を持っておられ、「私」に関わろうとしてくださる方）を伝えたい。

〈子どもカテキズム〉

問7：私たちの神さまは、どのようなお方ですか。

答：神さまは、霊なるお方です。

ですから、私たちを包み込んでくださり、永遠で変わらないお方です。

〈展開例〉

1. ウェストミンスター小教理問答の間4を学ぶ

- ウェストミンスター小教理問答の間4では、「神とは、どんな方ですか。神は霊であられ、その存在・知恵・力・聖・義・善・真実において、無限・永遠・不変のかたです。」とある。
- この答の中心は、「神は、霊である」ということ。そして、どのような「霊」かという点、「無限・永遠・不変の存在である霊」、「無限・永遠・不変の知恵を持つ霊」、「無限・永遠・不変の力を持つ霊」、……と説明をしている。
- 少し難しいかもしれないが、神様の「存在・知恵・力・聖さ・義・善・真実」について、人間（私）との違いを指摘しながら（人間の存在は有限で、永遠ではなく、変化する。人間の知恵も限りがあり、永遠ではなく、変化する。人間の力も……）、一つ一つ丁寧に子どもたちと一緒に考えてほしい。すべてを正確に理解することは出来ないかもしれないが、ただ「神様は大きいお方」というボンヤリとしたイメージから、具体的な神様のイメージに成長していくことが大切だと思う。

2. 神様は、心を持っておられ、積極的に「私」に働きかけてくださる

- 上の説明だけでは、「神様は心をもっていて、積極的に『私』に関わってくださる方」という理解が不十分になるかもしれないので、その点をしっかりと補いたい。
- 「神は霊である」ということは、「肉体がなく目に見えない」とか「どこにでもおられる」ということも含んでいるが、それよりも、「神様は、『心』をもって生きておられ、『私』に関わろうとする方」ということを強く教えている。
- ヨハネ福音書4章23節、「父は、霊と真理をもって礼拝する者を求めておられる。」とあるように、神様は、積極的に、身を乗り出して、「私」に関わろうとしてくださるのである。このような「心を持った人格的な御性質」こそ、「霊なる神」という言葉で表されているものである。
- そのことを「子どもカテキズム」では、「神様は、私たちを包み込んでくださる」という言葉で説明している。この「包み込む」は、「大きな布で何かを包む」というような感情のない行為を言っているのではなく、「悲しくて膝を抱えて泣いている我が子を、後ろからそっと優しく包み込む」とか、「生まれたばかりの赤ちゃんをお母さんが両の腕でしっかりと抱きかかえる」というような心のこもった包み込みである。
- ウ小問4が告白していることは、「神様は、『無限・永遠・不変』の『存在、知恵……』によって、積極的に、力強く、真剣に、この小さな『私』に向かってきてくださる」ということである。

(1)コリントの教会の状況について

パウロは、コリントの教会からの質問で「偶像に供えられた肉」に関することをここで取り上げています。ここでの「偶像に供えられた肉」とは、コリントの町に多くある神殿で、神々の前にささげられた犠牲の動物の肉が、神殿祭司たちの取り分を取った後、市場に売りに出されたものを指しております。ユダヤ教の人たちは、律法に禁じられているということで、この肉を徹底的に避けていたと思われます。けれど、古代社会の肉の供給が、神殿を中心に回っていたということから、「神殿レストラン」といったお付き合いの食事をする、市場で神殿の肉が売られていたことは、普通のことでありました。

その中で、クリスチャンがどのように対処すべきか、という質問をコリントの教会の人たちはパウロに質問をしたのだらうと予測できるのであります。そこでパウロの応答として、「我々は皆、知識をもっている」(1節)といった当時の流行り言葉を導入して、「知識より愛が造り上げる」(1節)と言うのであります。つまり、「愛」においてキリスト教会全体を建徳的にしていこうというのであります。

(2)唯一の神を本当に信じるとは

この多神教的風土の中で、おそらくコリントのクリスチャンたちは、自分たちの唯一神信仰をその知識として誇りとしていたと思われます。むしろ、それ自体が悪いのではなく、それ自体は大変大切なことであります。けれど、単に異教世界の偶像を唯一神信仰で批判するのではなく、まして、そこにいる人々を批判し、罵倒することが本質ではないとパウロは述べているように思われます。それは愛において建徳的ではないというのであり

ます。

「神々」と「わたしたちの信じているキリストの神」を対比することにおいて、議論をするのは無意味だとパウロは述べているように思われます。神々はいない神、無なる神であります。真の神とない神を対比するのは、意味がありません(4、5節参照)。だから、いない神がいるかのように対比して、「わたしはキリストの神を信じる」というようにならないように注意せよと、パウロはコリントの人たちに警告をしているのであります。

そのような対比ではなく、ただ純粋に私たちの本当の神は、万物の起源であり、終極であり、更にイエス・キリストという鏡を通して、本当に唯一の神を信じ続けることが、唯一の神を信じることだと言っているのであります。別な言い方をすれば、「イエス・キリストが唯一の主である」とこの世に告白し続けることが、唯一の神を本当に信じていくことである、とパウロは私たちに投げかけているのであります。このことがしっかりとしていれば、対比する必要がなくなるというのであります。

イエス・キリストを通さなければ、唯一の神を信じていることにはならないのであります。いない神々をいるかのようにすることを知恵をもって気をつけていく私たちでありたいと思うのであります。(潮田 祐)



カテキズム 子どもカテキズム 問8

参照カテキズム ウェストミンスター小教理問答 問5

子どもカテキズム

問8 私たちの神さまのほかに神々はいますか。

答 神さまはただお一人しかおられません。

私たちをお造りくださった神さま、生きておられる真の神さまです。

人間は墮落以来、住む地域ごとに、また農業、商売など生活の分野ごとに様々な神々をこしらえ祭り上げてきた。よって神様はこの世界にただ一人、という信仰は昔からずっと脅かされ続けてきた。旧約時代の古代イスラエルもバアルをはじめとしてカナン、エジプト、バビロンなど中東諸国の神々に取り囲まれる中で信仰生活を送らねばならなかった。新約時代のキリスト教会もギリシャ、ローマの神々に囲まれながら信仰を守らねばならなかった。そこで聖書では「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。」(申命記6:4)、「たとえ天や地に神々と呼ばれるものがいても、わたしたちにとっては、唯一の神、父である神がおられ……」(コリント一8:5-6)といった訴えが事あるごとになされることになった。

では他の神々に囲まれる中で私たちはいかにして「聖書の神こそ唯一の神である」と主張できるのか。一つは聖書の神こそが私たち人間を含め万物を創造されたお方、という点である。世界各地で拜まれてきたものには、太陽、月、星、山、岩、海、動物といった自然そのもの、もしくは自然に

由来するものが多い。こうしたものがいずれも唯一の神様の手による被造物であることを明らかにすることで、神々に祭り上げられてきた太陽、山などが実際は神の名に値する究極・最上の存在でないことをも明らかにする。(コリント一8:6参照) 古代教会が使徒信条などで信仰を言い表した際に「天地の造り主、全能の父なる神を信ず」という項目を含めるゆえんである。

もう一つは、聖書の神こそ今も生きて人間に働きかけてくださり、交わりをもってくださいということである。聖書の神は「私はあなたの神である」と呼びかけ、ご自身こそ真の神であると自己啓示してくださる神、イエス・キリストを送ることに極まる神ご自身の働きによって人を救いへと導き入れる神、私たち一人一人と人格的に交わって下さり、祈りを聞き応えてくださる神である。この「生きておられる神」を知るとき、他に神と言われていたものにはこの要素を見いだせないこと、よって「死せる神」「偽の神」であることが浮かび上がってくる。これについて詳細は次回問9のところで扱うことにする。(吉田 崇)



テキスト コリントの信徒への手紙 一 8章1～6節
カテキズム 子どもカテキズム 問8

〔単元のねらい〕

神さまについての聖書の教えの最も基本的なことのひとつである「神の唯一性」についてであり、まずは日本のような多神教の社会においてこのことを信じる大切さを伝えたい。教会学校に長く通っている子供たちにはすでによく教えられていることかもしれないが、繰り返し教えていくことを大切にしたい。特に知識としては分かっている、それが実際の信仰生活に結びついていかなければ意味がない。その点で、この聖書箇所は重要である。教理の基本的な事柄を確認しつつ、聖書の内容に即して、唯一の神を信じる信仰と生活を教えたい。それは、神を愛するというにかかっている。

「唯一の神を愛する」

今日は、この世界に神さまは何人おられるでしょうか、というお話です。「神さまはお一人だけだ」と答えてくれるお友達もいるでしょうし、なかには、世の中にはキリスト教以外の宗教もたくさんあるから、神さまはたくさんいるのではないかと考えるお友達もいるかもしれません。

確かに、特に日本にはたくさんの宗教があります。そしてそれだけでなく、それぞれの宗教が、またたくさんの神々を信じています。そうすると、日本には本当にたくさんの神々（八百万の神々）がいるということになります。

でも聖書は、神さまはお一人だけだとはっきり言っています。今日読んだコリント一8章4節には「唯一の神以外にいかなる神もないことを、わたしたちは知っています」とあります。それで今日の子供カテキズムもはっきりと「神さまはただお一人しかおられません」と言っているのです。

大切などころなので、よく考えながら聞いてほしいと思いますが、他の宗教の人たちにはたくさんの神々がいるけれど、キリストちゃんには一人の神さまがおられる、ということではありません。そうではなくて、他の宗教を信じている人にとっても、本当の神さまは聖書の神さまお一人だということです。確かにその人たちはたくさんの神々を信じているかもしれないけれど、その人たちのまだ知らない聖書の神お一人が、その人たちに

とっても本当の神さまだということです。5節「現に多くの神々、多くの主がいると思われているように、たとえ天や地に神々と呼ばれるものも、わたしたちにとっては、唯一の神、父である神がおられ、万物はこの神から出、わたしたちはこの神へ帰っていくのです」。クリスチャンである人もクリスチャンでない人も、すべて唯一の神さまによって造られた存在です。万物はこの神さまから出てきたのです。神さまは、すべての人にとって、ただお一人だけです。このことを覚えておいてほしいと思います。

お一人の神さまを信じるより、たくさんの神々を信じる方が心強いのではないかという人があるかもしれません。でもそうではありません。もし、たくさんの神々を信じるならば、逆に言えば、その神々の一人一人にはあまり力がないということです。でも、聖書の神さまはたったお一人ですが、そのお一人で万物を造られたのです。そして今も万物を治めておられます。お一人の神さまで十分なのです。私たちは、全力でこのお一人の神さまを信じればよいのです。

日本では、クリスチャンの人は少ないから、そんなふうにお一人の神さまだけを信じ続けるのは大変だと思うことがあるかもしれません。でも実はそのような日本の私たちこそ、聖書に出てくる人たちに似ていることが分かります。旧約時代、

イスラエルの人たちの周りにも、多くの神々を信じる人たちがたくさんいました。でも、その中でイスラエルの人たちは一人の神さまを信じ続けました。そして、このコリント教会の周りにも、神々を拝む人はたくさんいたのです。しかし、その中でパウロは、「唯一の神以外にいかなる神もない」とはっきり言ったのです。私たちも、この日本で、同じようにはっきりと「神さまはお一人だ」と言えるようになりたいものです。

さて、神さまはお一人ということを学んでいますが、ここで一つ大切なことを覚えておいてほしいと思います。それは、ただ頭の中で神さまはお一人と知っておけばいいということではないということです。大事なことは、その神さまを心から愛するということです。例えば、大きくなって結婚をするとき、たくさんの人と結婚はしません。一人の人と結婚します。それは、その一人の人を全力で愛するということです。神さまも同じように、お一人の神さまを信じるということは、その神さまを心から愛するということなのです。

どうしてこのことが大切かというと、1節にこうあります。「知識は人を高ぶらせるが、愛は造り上げる」。知っているだけではなくて、愛することが大事なのです。そして、この神さまへの愛は、神さまが造られたすべての人への愛となります。

お願いしたいことがあります。それは、自分は

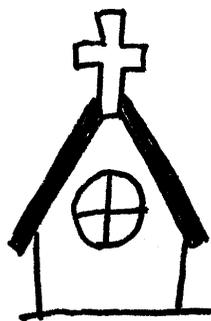
お一人の神さまを正しく知っているからといって、たくさん神々を拝んでいる人をバカにしたりしないほしいということです。クリスチャンではない人から、「お前、聖書の神さまなんか信じているのか」とバカにされることがあるかもしれませんが、逆に、私たちの方から、「お前が信じているのは偽物の神さまだ」と言ってバカにしたりしないでください。私たちは確かに本当の神さまを知っています。でも、それで高ぶって、自分は偉いと思って、他の人を見下してはいけません。実はコリント教会にはそんなふうな、神さまについての正しい知識を持っていながら、愛のない人がいたのです。

大事なことは、神を愛することです。3節「神を愛する人がいれば、その人は神に知られているのです」。神さまが私たちのことを知ってください、愛してくださいだったので、私たちも神さまを知り、愛することができるようになりました。だから、私たちは、このようなすばらしい神さまを多くの人に知ってほしいと思います。神々を拝んでいる人たちは、まだ本当の神さまを知らないだけです。だから、私たちは他の宗教を信じている人たちを、こわがるのでも、見下すのでもなく、愛するのです。そして、そういう人たちも本当の神さまによって知られ、本当の神さまを愛することができるよう、お祈りしたいと思うのです。

(石原知弘)

[今週の暗唱聖句] コリントの信徒への手紙 一 8章6節

わたしたちにとっては、唯一の神、父である神がおられ、
万物はこの神から出、わたしたちはこの神へ帰っていくのです。



〈聖書〉

コリント一8章6節

「わたしたちにとっては、唯一の神、父である神がおられ、万物はこの神から出、わたしたちはこの神へ帰っていくのです」。

〈ねらい〉

真実の神はただお一人である。偽りの神々をしりぞけて生きること立とう。幼児もたくさんの神を持つ日本の中で生活しています。ほんとうの神さまはただおひとりであると伝えましょう。

〈展開例〉

ゆうじ君のおじいちゃんの家には神棚があります。それから仏壇もあります。おじいちゃんは神棚にも手を合わせて拝みます。仏壇にもお線香をあげて拝みます。でもクリスマスにはゆうじ君といっしょに教会にきてくれました。

おじいちゃんは「どのかみさまもみんな同じだよ。日本には神さまがいっぱいいる。いっぱいし

んじればいいんだよ」と言います。

ゆうじくんはよくわからなくなります。この世界をつくられたのはたったひとりの神さまです。今も生きてはたらいておられる私たちの天のおとうさんです。だからこの神さまじゃない神さまを拜んだりとはとてもできません。

ほんとうの神さまを知ると、他の神さまを拜むことはできません。だってほかのものはみんなほんとうの神さまにつくられたものだからです。

〈やってみよう〉

絵本『かみさまとこども』

文・金川幸子

絵・中村有希

中央出版社／サンパウロ

〈お祈り〉

神さま、ほんとうの神さまはあなたおひとりです。ほかのものはおがみません。



〈ねらい〉

神さまは、ただひとりである。

神さまは、全世界を創られて、今も生きておられる。

〈展開例〉

神さまは、何人いると思いますか？（自由に発言させる）

正解はどこに書いてあるでしょうか？ そうです。聖書ですね。聖書のコリントの信徒への手紙一の8章6節を一緒に読んでみましょう。「わたしたちにとっては、唯一の神、父である神がおられ、万物はこの神から出、わたしたちはこの神へ帰って行くのです。」

では、正解は？ そうです。神さまはただおひとりの神さまなのです。

学校で絵を書いたことがありますね。白い画用紙に、最初に線を書くとき、どんな気持ちになりますか？ 一番最初ってどんなことでしょうか？ そして、世界の始まりって考えたことがありますか？ 世界の最初ってどんなだったか？ 想像してみましょう。

みなさん、目をつむってください。ぎゅうってつむってください。何が見えますか？ 真っ暗で

すね。

世界のはじめは、まだこのように真っ暗でした。真っ暗な中で、はじめに神さまが天と地を創られました。まず、光を創られました。はい、目をあけてください。何か見えますか？ どうして見えるのでしょうか？（子どもたちは目があるからというかもしれませんが、目をつむっていても目はあるのです）。そうです。光があるからですね。

神さまがはじめに天と地を創られたのであり、まだ何にもないときから神さまはおられたのです。神さまが必要だから、人間が神さまをつくったのではなく、神さまがはじめの初めからおられて、その神さまが天と地を創ってくださり、その中のすべてを創ってくださったのです。

そして創りっぱなしで、あとは知らないよと言うのではなく、その後もずっと神さまは私たち人間を愛し、守ってくださっているのです。そんな神さまを、私たちも、愛して、神さまに喜んでもらえるように、毎日を過ごしていきましょう

〈お祈り〉

神さま、私たち人間を創ってくださり、私たちを愛してくださりありがとうございます。私たちも神さまを愛することができるようになってください。



〈ねらい〉

神さまが「唯一」であることを学ぶ。

〈展開例〉

○神さまは「おひとり」であると信じよう

聖書を読むと分かっていくことは、神さまは「おひとり」であるということです。ただし、なぜ神さまは「おひとり」なのかということは「聖書にそう書いてある」としか説明のしようがありません。「証明してみろ」と言われても、答えることができません。とにかく聖書を読むことなしに、神さまはどのような方であるかをあれこれ頭の中で考えてみても、何一つ正しい答えを見つけることはできないのです。

でも、神さまが「おひとり」かどうかを誰も証明できないとしても、「それは間違っている」と言うこともできません。神さまを自分の目で見たことがある人は、どこにもいません。「神はたくさんいる」と言う人がいますが、その人も神さまを自分の目で実際に見たことがあるわけではありません。「見た」と言っている人の言葉を信じてはなりません。その人が見たものは神ではありません。聖書の登場人物たちも神さまを「見た」わけではなく「信じた」だけです。わたしたちにできることも神さまが「おひとり」であると「信じること」だけです。

○^{さんみいつたい}三位一体の神さま

でも、聖書に記されていることは、もう少し複雑です。聖書には、まず、世界とわたしたち人間を創造して下さった方は「神さま」（創世記1:1など）であると記されています。また、わたしたちの救い主イエス・キリストも「神」（ヨハネ1:18など）であると記されています。そして弱いわたしたちを助けてくださる聖霊も、神さまと等しい存在として紹介されています（ローマ8:26など）。そうすると、「あれれ？ この先生は、神さまはおひとりですと言ったと思えば、さんにんおられる

と言ったり。ワケが分かんないよ」と思う人がいるかもしれません。でも、聖書が言っていることはそういうことではありません。神さまはあくまでも「おひとり」なのです。そのような神さまを、教会は「^{さんみいつたい}三位一体の神さま」と呼びます。その意味は、世界と人間を創造された方と、わたしたちを罪から救ってくださる方と、弱いわたしたちを助けてくださる方は全く同じ「おひとり」の方であるということです。このようにして、わたしたちは神さまを「おひとり」であると信じることによって、この方はわたしたちのことを世界の始まりの日からきょうまでずっとずっと愛し続けてくださっている方なのだとすることを信じるのできるのです。

○「おひとり」の方がすべての人の悩みを知る

難しい話だったかもしれません。でも、結論は単純です。要するに神さまは「おひとり」であるということです。そして、それはびっくりすることでもあります。なぜなら、全世界も、また遠い宇宙までもお造りになった方が、ここにいるわたしたち一人一人のささげるお祈りに耳を傾けてくださり、困ったときにはいつでも助けてくださる方でもあるというのですから。どこの国の王さまや大臣でも、その国のすべての人の名前を知っているわけではありませんし、すべての人の悩みごとを聞いたことがあるわけでもありません。コンピューターなら人の名前を覚えさせることはできるかもしれませんが、スイッチを切れば止まりますし、壊れることもあります。

神さまは、止まることも壊れることもありません。いつも生きて働いてくださり、すべての人の悩みをご存じなのです。

〈お祈り〉

天のお父さま、あなたは「おひとり」です。すべての人があなたの恵みを味わうことができますように。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

1. 「神様はお一人である」ということを聖書から確認する。
2. 「神様が『私』造り主である」ということから、確かな慰めを読み取りたい。

〈カテキズム〉

問8：私たちの神さまのほかに神々はいますか。

答：神さまはただお一人しかおられません。

私たちをお造りくださった神さま、生きておられる真の神さまです。

〈展開例〉**1. 神様はお一人である**

- 「神様」が、もし「お一人」ではなく、「たくさんさんの神様たち」が存在したら、どういうことになるだろうか。そして、「頭を良くしてくれる神様」、「交通事故から守ってくれる神様」、「商売を繁盛させてくれる神様」、「病気や怪我から守ってくれる神様」というように、神様たちそれぞれに得意分野と苦手分野があったとしたら、私たち人間は、どうやって神様たちと付き合いがいけばよいのだろうか。みんなで話し合ってみよう。
- もし「たくさんさんの神様」がいたら、どの神様も「困ったときにだけ必要な神様」となり、結局、日常生活の中ではどの神様も必要なくなっていく。
- 「神様は、ただお一人である」ということこそ、聖書が私たちに教える神知識の出発点である。今の日本と同じように多神教信仰が普通であった旧約時代に、神様は、ご自身のみが真の神であることを預言者を通して繰り返し教えられた。唯一神信仰について教えられている聖書箇所を、生徒たちと一緒に読んで

確認することが大切である（申命記6:4、エレミヤ10:3—11）。

2. 造り主である神さまについて

- 「ただお一人である神さま」は、何よりも「私たちをお造りくださった神さま」である。ここに、「私」と「神様」の根本的な関係（創造主：被造物）が教えられる。「造られた私たちが造り主である神様に対して仕える（礼拝する）義務を持つ」ということも大切であるが、しかし、今回は中学生たちに、「造った方が造られた私たちに対してどのような心をお持ちになるか」ということについて考えてもらいたい。
- 「造り主」は、「造られたもの」に対して、どのような感情を持つだろうか。学校の美術や図工で何か作品を作ったことを思い出して、みんなで話し合ってみよう。私たち人間でも、一生懸命、知恵と労力と時間をつかって作ったものに対しては、たとえ不恰好なところがあっても、見映えの悪い部分があっても、特別な感情を持つ。もし、教室の後ろに飾っておいた自分の作品が壊されたり、馬鹿にされたりしたならば、怒りや悲しみを持つこともある。神様が、「私」に向かって、「わたしがあなたを造ったのだ」と言ってくださる時、神様の心の中には、「私」に対する大きくて深い愛情があることをしっかりと読み取りたい（イザヤ43:1—2）。
- また、私たちにとって、「私は神様のものがある」ということこそ、何よりも大きな力であり、慰めである。ハイデルベルク信仰問答の問1の答えの、特に最初の一文を生徒たちとじっくり味わいながら読んでほしい。

大変風刺的な、そしてうまく書かれた御言葉である。この御言葉が発するメッセージは「偶像の無力さ」であるが、ここでは偶像への批判が直接述べられているわけではない。ここには偶像そのものに対する批判というよりも、当時の細工師の知識と技術が披瀝され、偶像製作の過程が詳述される。それは鉄工・木工に関する当時の最高水準の技術を示すものであるのだが、しかしそれが、そのことによって生み出される偶像への強烈な風刺となり、偶像を作り拝む者たちの迷走ぶりと滑稽さが、故にまことの神を信じて生きる者との落差が、そこに浮き彫りにされている。

〈9～13節〉

9節が20節までを要約している。「無力」と訳出されている言葉（ヘブル語：トーフー）は、「混沌」「混乱」「虚構」「空虚」「無意味」という意味を含んでいる。

10～13節には、「偶像はその由来となる人間以上のものではありえない」ということが述べられる。偶像は疲れと渇きを覚えるような弱い人間の力に依存している。それは、まことの創造者である神の力とは根本的に違う。人間の努力の成果によって、人間を超えたものが生み出されることはない。11節の「恥を受ける」とは、偶像礼拝者が自分自身の尊厳を貶めていることを示し、13節の「人間の美しさに似せて」という言葉によっては、偶像制作者としての人間にとっての美しさは結局自分に似せたかたちになってしまうという、「人間の理解やかたちを超えないものとして製作されてしまう神」という強烈な皮肉がほめかされている。

〈14～17節〉

14～17節には、「偶像はあくまで物質的なもの以上のレベルには達しない存在である」という事柄が示されている。ここには、偶像それ自体がもともと地の産物であり、それが偶像に仕立て上げられたことの背後には、それがたまたま台所で燃やされずに済んだだけのただの木片だったという驚愕の事実があることが、冷静に告げられる。偶像とは、偶然に、しかも残り物によって作られたものなのである。

〈18～19節〉

偶像礼拝者についての、客観的かつ厳しい、現実的な分析が為されている。「自らが病であることさえも自覚できない病人」の如き偶像礼拝者の姿がここにある。このパラグラフは、偶像礼拝者への嘲笑にも似た調子で語り出されてきたのだが、19節のかぎ括弧部分に至っては、既に嘲笑的な響きは消え、偶像礼拝者に対する筆者のやりきれない思い、まことの神への立ち帰りへの願いが吐露されているように見える。

〈20節〉

「彼」とは偶像礼拝者のことである。彼は偶像に執着し、灰にすぎないものにあこがれる。彼は惑わされることを選んで、自らを惑わした。詩編115編には、「偶像を作り、それに依り頼む者は、皆、偶像と同じようになる。」とある。また最後には「わたしの右の手にあるの（偶像）は偽りではないか」と言って偶像礼拝者が悔い改めて欲しいとの筆者の嘆願が読み取れる。事実これに続く御言葉が、偶像礼拝者にまことの神への立ち帰りを求めている。（吉岡契典）

子どもカテキズム

問9 神々とは何ですか。

答 人間が造り出したものです。死んだ人や生きている人、動物や植物などの自然、作り話の神々を拝むことは、私たちの神さまがもっとも悲しまれる愚かなことです。

〈人はなぜ神々、偶像を造り出すのか〉

人間は神のかたちにかたどってつくられ、神の息を吹き込まれ、霊的な存在、人格的な存在として生きるよう神様に創造された。よって人間は神を必要とし、神との交わりを求める。

しかし人間は墮落し、霊的判断力、神を認識する能力も全く損なわれてしまった。その結果、人間は神を求めはするものの、その求めは創造主なるただお一人の神には向かわず、人間を取り巻く世界の事物をもとにして神々を造り上げるという形で作用するようになってしまったのである。

〈根底には人間の欲望〉

神々を仕立て上げ、拝むことで人間はどんな益を得ようとするのか。それは人間の心に浮かんでくる欲望の実現、不安や恐れへの解消である。人を取り巻く太陽、山、海など自然を神々に祭り上げる場合、太陽の日差しが強すぎたり弱すぎたりすると生活に支障をきたすし、山の崖が崩れたり海が荒れたりすると人命が危険にさらされる。こうした生活上の不安・恐れを対象を神として祭り、なだめることで人に危害を加えないようになってもらおうと企てる。もう一つ、不安・恐れへの払拭という点では、大きな力を持つと思われる人を神に祭り上げ、自分たちの楯となって守ってもらおうということも起こってきた。かくして、獲得したい欲望の種類、払拭したい不安の種類にあわせて神々がつくられるから、その数は増大の一途をたどり、日本においては「八百万（やおよろず）の神々」という表現がなされるほどである。

こうした偽りの神々について、「死せる神」という形容がされる。神としての人格や命を持たず、意志を人に啓示しないからである。そこで「死せる神は頼りにならない」という判断も出てくる。だが一方では、人間の願いに口答えをしない、「そ

れはいかがなものか」と釘を刺されないという側面もある。つまり「死せる神」を拝む者は神から機嫌を損ねられず、「私のお気に入り」にできるので、拝み続けるのである。人間の欲求にそって神々をつくるという行為は、人間が己の利益を求め、己を起点として神を考えることになり、結局は己を一番中心に据える行為、つまり己を神とする行為である。神様がこうした行為を最も悲しまれるのは極めて当然と言えよう。

〈神を像に押し込める問題性〉

神々を造り出す行為は、人間が把握しやすいよう何らかの形の偶像としてあらわすということである。そこで起こるのは、人間より上の存在であるはずの神が人間にとって収まりよくなるように有限へと押し込められることである。人間の手に収まらず、人間の思いを超えて物事をご覧になり、判断されるお方こそが、この世界にとってもっともよい事をなしてくださるのではないか。十戒の第二戒で、偽りの神々はもとより、ただ一人の神様を意図したとしても刻んだ像を作ってはならない、と求められる理由はそこにある。

〈神を人に正しく知らせるキリスト〉

人が唯お一人の生ける神を知るにはどうすればよいのか。それは神から遣わされた独り子、主イエス・キリストによってである。「父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである」(ヨハネ1:18)。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」(ヨハネ14:6)。イエス様は地上において神の偉大さと愛を示され、さらには墮落によって自力では正しく神に至ることのできなくなってしまった私たちの心を新たに作り替え、受け入れることができるようにしてくださる。(吉田 崇)

テキスト イザヤ書 44章9～20節
 カテキズム 子どもカテキズム 問9
 参照カテキズム 子どもカテキズム 問46

〔単元のねらい〕

本日は、偶像とは何かを学びます。子どもカテキズムでは、「神々」です。テキストのイザヤ書では、人間が作り出した神々、偶像の無力さを、預言者は徹底的に糾弾し、あざ笑います。私どもの国は、偶像に満ち溢れています。神社、仏閣はもとより、オカルト、スピリチュアル、占いなどなど、悪霊の働きが圧倒的に大勢の人々の心を支配し、影響を及ぼしています。その中でキリスト者として生きようとするれば、ただちに信仰の戦いが始まります。あの戦争前夜、地域の神社と伊勢神宮参拝をある教会の日曜学校生徒が、「偶像礼拝は罪」であるとして、拒みました。それを発端に地域ぐるみでの弾圧、迫害が起きました。（美濃ミッション事件）今日、私どもの日曜学校教育と伝道で、このような軋轢を生じる事例があるでしょうか。もとより、現憲法下では起こってはならないことです。しかし、そのような偶像礼拝を忌避する信仰の真心を子どもたちに植え付け、育てることができないのであれば、私どもの日曜学校の「霊性」が問われるのではないのでしょうか。分かりやすい偶像礼拝との戦いを回避すれば、自分の利益をカミとする内なる巧妙な偶像礼拝に勝利することなど、ありえないと知るべきです。

「人間が作りあげたカミさま!？」

先生の大好きな本の一つに「星の王子さま」があります。読んだことのあるお友達はいませんか。とってもすばらしい本です。でも、小学生には、ちょっとむづかしいかもしれません。先生が初めて読んだのは、確か中学生くらいのときでした。おじさんからプレゼントされたのです。「なんだ、子ども向けの本か」なんて、馬鹿にしましたが、読んでみるとなんだかむづかしくて途中でやめてしまいました。そして、大人になって読み始めて、だんだんそのすばらしさが分かってきました。今では、宝物の本の一つです。皆も、大人になったらこの本のすばらしさがもっとよく分かるようになると思います。だから、大人になることはすばらしいことだと思います。何よりも、聖書の御言葉、神さまの御言葉がもっとも分かるようになるのです。そんな大人になって欲しいです。

この本の中で、一番有名な言葉は、おそらくこの言葉だと思います。「心で見なくちゃ、ものごとはよく見えないってことさ。かんじんなことは、

目に見えないんだよ。」王子さまが、キツネさんに教えてもらうのです。

先生は、これまで、何人もの人から、「あなたが言うような神さまを信じることは、できないな。目に見せてくれるなら、そうしたら信じるよ。」

皆だったら、なんて答えますか？困ってしまうでしょう。けれども、聖書には、ちゃんと書いてあります。ローマの信徒への手紙第1章20節「目に見えない神の性質」つまり、「神さまは目に見えない」ということです。真の神さま、天と地と海と空にあるすべてのものを造りになされた聖書の神さまだけが、ただお一人の真の、ほんもの神さまなのです。そしてその神さまは、目には見えないのです。霊なる神さまだからです。

この真の神さまを信じない人、というより信じようとしないう人間は、何のカミさまをも信じないのでしょうか。実は、まったく違います。そのような人たちは、実は、自分の都合のよいうに、自分のために、自分を喜ばせるために、目に見え

るカミを自分の手でつくり出すのです。僕たち私たちのまわりには、そのような人間が作り出したカミガミがたくさんあって、もう、数え切れないほどです。神社とかお寺とか、何々教などという宗教がたくさんあります。

今日の聖書の御言葉は、イザヤという神さまの言葉を告げる人の言葉を読みました。ゆっくりと読むだけで、分かるように書かれています。鉄工とか木工というのは、鉄や木を使ってものをつくる人のことです。人間が作り出したカミガミの多くは、やっぱり人間に似せて作ることが多いです。神さまが神さまに似せて造られた美しい人間ですから、人間に似せて偶像をつくるのは、よく分かります。でも、ときどき、「鳥や獣や這うもの」などに似せて作る場合もあります。神社などでは、キツネだとか、蛇を神さまと拝むことも少なくありません。

またある人は、大きな木、何百年も立って生きている大きな木に「しめ縄」を巻いて、カミサマにして拝むこともあります。

イザヤさんは、15節から17節でこう言いました。もう一度、読んで見ましょう。「木は薪になるもの。人はその一部を取って体を温め／一部を燃やしてパンを焼き／その木で神を造ってそれにひれ伏し／木像に仕立ててそれを拝むのか。／また、木材の半分を燃やして火にし／肉を食べようとしてその半分の上であぶり／食べ飽きて身が温まると『ああ、温かい、炎が見える』などと言う。／残りの木で神を、自分のための偶像を造り／ひれ伏して拝み、祈って言う。『お救い下さい、あなたはわたしの神』と。」

イザヤさんは、木でつくるカミ、つまり偶像とそれをつくる人間がどれほど愚かであるか、ばかばかしいかをはっきりと言いました。まったくその通りです。

木だとか石だとか鉄だとか、そのようなもので作られたカミは動くことはできませんね。昔、お寺が火事になったとき、お坊さんは、燃えている

本堂の中に飛び込んで行って、ご本尊、そのお寺で拝んでいる仏の像を助け出しました。少し焦げてしまったようですが、助け出すことができてとてもうれしそうでした。仏の像を助け出したのは、お坊さんです。どっちが偉く、強いのでしょうか。お坊さんではないですか。人間が作り出したものですから、仏像は自分を救うことも、作った人間を助けることもできないのです。当たり前のことです。

人間にとって最も大切なもの、肝心要のものは、目に見えません。あなたの心は、目に見えますか？見えませんね。でも、確かにあるでしょう。悲しくなったりうれしくなったり。喜んだり、起こったり。それは、心の動きです。でも、心は見えません。心は、心でしか見られません。真の神さまは、目に見えませんが、心で見ることができのです。その心は信仰の心です。けれどもその信仰の心は、誰でも持っているわけではありません。それは、神さまに与えていただかなければなりません。どうしたら信仰の心が与えられるのでしょうか。お祈りすることです。お祈りして求めることです。どこで求めるのですか。それがこの礼拝式です。僕たち私たちの教会には、偶像がおいてありません。でも、目をつぶって、心を神さまに向けるとき、神さまの言葉、声を聴くとき、神さまがおられることが分かるのです。イエスさまのこと、イエスさまの十字架と復活のことを思うと、神さま、天のお父さまのことが信じられるようになるのです。神さまがもっとも悲しまれ、憤られることは、神さまの目の前で、偶像を拝むことです。ですから、僕たち私たちは、どんなことがあっても、偶像に頭を下げたり、拝んだりしません。

僕たち私たちの捧げるこの礼拝式を一番喜んでくださり、大切にしておられるのは、神さま御自身です。ですから、今日も真剣に、真の神さまを礼拝します。神さまは今、僕たち私たちの礼拝を喜んで受け入れてくださっています。(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] イザヤ書 44章9節前半

偶像を形づくる者は皆、無力で
彼らが慕うものも役に立たない。

〈聖書〉

イザヤ書44章9節

「偶像を形づくる者は皆、無力で
彼らが慕うものも役に立たない」。

〈ねらい〉

真実の神は今も生きて働いておられる。まことの神を仰いで依り頼もう。ほんとうに頼るべきお方は神さまだけである事を伝えよう。

〈展開例〉

シンジ君がテレビを見ていたら、「今日の運勢……今日はアイスクリームを食べると良いことがあるでしょう」と言っていました。「ママ、運勢ってなに？ どうしてアイスクリームを食べると良いことがあるの？」って聞きました。

今日は運の良い日だとか悪い日だとかよく言います。占いも信じる人が多いです。でも今日がどんな日なのかをご存知なのは神さまだけです。本当の神さまは空と海とこの世界の全てをつくってくださいました。今も生きて働いておられる神さまに「一日一日をお守りください。神さまに喜ばれるように生きています」とお祈りしましょう。神さま以外の目に見えるものを信じて拝んだり、頼ったりすることはいけないことです。

〈やってみよう〉

歌「海と空つくられた主は」

うみとそらつくられた主は

あなたの主 わたしの神

罪をゆるし すくいたまう

みんなの主

イエスは主ハレルヤ

イエスは主ハレルヤ

イエスは主ハレルヤ

みんなの主

※メロディは「ちいさなせかい（イツ ア
スモール ワールド）」

〈お祈り〉

神さま、あなただけがほんとうの神さまです。
そして生きています。あなたを信じます。



〈ねらい〉

偶像と呼ばれる神でないもの。
本当の神さまとは？

〈展開例〉

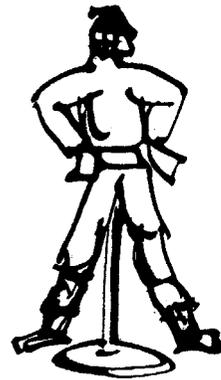
いろんなところで、神さまという言葉が使われていますね。たとえば、サッカーの神さまとか、音楽の神さまとか、将棋の神さまとか……。他にもありますか？ ほかに人よりちょっと（すごく）能力がある人のことをこう言ったりしますね。また、大きな木や山、また、太陽や星を神さまとして拝むことがありますね。仏像は木で作られたりしていますね。ほんとうに、大きな木や太陽や人間が作った像が神さまなのでしょうか？ 木は木のままで、どんなに大きくなっても歩いたり飛んだりしません。太陽は何の意志も持ってないし、山は山以外の何ものでもないし。

神さまとは言ってないけど、例えば、星占い。6月生まれはふたご座だとか、誕生月によって何座何座っていうのがありますね。そして、今日はおとめ座の人に幸運があるとか、テレビや雑誌でも言っていますが、それって本当なのでしょうか？ 夜空の星はお互いに自分たちは「おうし座だ～～」とか「さそり座だ～」とか言っているのでしょうか？ 私たちの目にはたとえばおうし座の見える星たちは、その間では、みんな何光年も離れているのです。それなのに、何で、そのような星座が私たちに関係するのか、今日の私たちの

性格や生活に何の影響があるのかなあ、と思います。私たちは、そのように人間が神だと思うものではなくて、先週学んだように、この世界を創ってくださり、今も守ってくださる本当のただひとりの神さまを信じて、毎日を過ごしていきましょう。

〈お祈り〉

神さま、私たちの回りには、本当の神さまではないものを神さまとしている人がたくさんいます。その人たちにも、本当の神さまがわかるようにしてください。私たちが、いつでも本当の神さまのことを思って、毎日過ごすことができるようにしてください。



〈ねらい〉

神さまが「生きておられる」ことを学ぶ。

〈展開例〉

○「生きている」とは

みなさんが「わたしは、ぼくは、生きている」と実感するのは、どのようなときでしょうか。「おいしいごちそうを食べたとき」と答える人がいるかもしれません。また、「好きな人と好きなことをして楽しく遊んでいるとき」と言う人もいるかもしれません（どちらも私の答えです）。

これとは違う答え方があるかもしれません。身近な人、とても大切な人が亡くなった。「でも、わたしは、ぼくは、生きている」。そういうときに、わたしたちは、複雑な気持ちになります。身近な人の死は、もちろん悲しい出来事です。でも同時に「それではなぜ、わたしは、ぼくは、生きているのだろうか」と真剣に考えはじめるときかけにもなります。私のお父さんは、私がまだ小さな頃に、病気で突然亡くなりました。すごくショックでした。でも、そのときから、わたしは神さまに真剣に祈るようになりました。まもなく洗礼も受けました。そして「生きるとはどういうことか」をそれまで以上に真面目に考えるようになりました。そういう人は、私の他にも、たくさんいると思います。

聖書には、神さまは「生きておられる方」とあると何度も記されています。神さまが生きておられるとは、どういう意味なのでしょう。すぐ分かることは「神さまは死んでおられない」ということです。動かない存在ではなく動いている存在である。何もしない、または何もできない存在ではない。何かをしている、または何かができる存在である。それが「生きている」ということです。

でも、学校で勉強するとか会社で仕事をするができる人だけが「生きている」わけではありませんよね。生まれたばかりの赤ちゃんや、重い病気や高齢で寝たきりの生活をしている人のことを、決して忘れてはなりません。そして「生きている」のは人間だけではなく。動物や植物

も生きています。

でも、少し答えるのが難しいのは「石」とか「砂」は「生きている」でしょうかという問題です。そこに何かがあるということは確かですが、「生きている」とまでは言えないでしょう。なぜなら、「石」や「砂」は、自分の力で動くことも、何かをすることもできないからです。

○「偶像」は石や砂でつくられている

聖書の中には、残念なことも書かれています。人間は、神さまから「してはならない」と禁止されていることであればあるほど、それをますますしたくなる心を持っているということです。それが「罪」です。そして、神さまが禁止しておられることの中でも最も悪いことの一つに、「偶像をつくること」があります。偶像とは、人間が自分の目で見たとことのない神さまの姿を勝手に想像して、石や砂でつくった置物のことです。大きなものも、小さなものもあります。なぜ人間は偶像をつくりたがるのかというと、要するに自分の好きな場所に置いておけるし、飾っておけるからです。気に入らない場合は、倉庫の中に片づけることもできます。つまり、自分に都合よく「神さま」を出したり引っ込めたりすることができます。神さまのお言いつけを人間が聞くのではなく、人間の思いどおりに「神さま」を動かし、支配できる。順序が反対です。それが「偶像をつくる罪」なのです。

でも偶像は「生きて」いません。自分の力で動くことも、何かを行うこともできませんし、困った人を助けることもできません。それなのに、「神さま」であるふりをしてしていることが悪い。「偽装」は本当に悪い罪なのです。

〈お祈り〉

天のお父さま、「生きておられる」あなたが、いつもわたしたちのお祈りを聞いてくださっていることに、感謝いたします。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

1. 「生きている神様」と「死んでいる神様（偶像）」の違いについて考える。
2. 「生きている真の神様は、私たちが救うために、積極的に働きかけてくださる」ということ伝えたい。

〈子どもカテキズム〉

問9：神々とは何ですか。

答：人間が造りだしたものです。

死んだ人や生きている人、動物や植物などの自然、作り話の神々を拝むことは、私たちの神さまがもっとも悲しまれる愚かなことです。

〈展開例〉

1. 「生ける真の神様」と「偽りの神々（偶像）」の違いについて

○先週は、子どもカテキズム問8から、「ただお一人の神様は、私たちをお造りになった神様である」ということを学びました。今週は、問8の「神様は、生きておられる真の神様である」ことを、問9で教えられている「死んでいる神様（偶像、偽りの神）」と比較しながら考える。

○聖書は、神様が「ただお一人である」ことと、「私たち（天地）の造り主である」ことと、そして、「生ける神様である」ことを力強く教えている。

○神様が「生きている、命がある」ということはどういうことでしょうか（逆に「死んでいる神様」とはどういうことでしょうか）。みんなて話し合ってみよう。

○聖書の言葉で、「生きている」というのは、ただ「心臓が動いている、呼吸をしている」

ということを目指すのではなく、「自ら動くことができ、他者に積極的に働きかける存在」ということを示している。従って、「生きている神様」というのは、積極的に私たちに語りかけてくる神様である（申命記5:26）。逆に「死んでいる神様（偶像）」というものは、私たちに何も語りかけてこない神様である。

○聖書を通してご自身を示している神様は、「私」に語りかける、働きかける神様である。

2. 「生きている神様」の働きかけについて

○神様は、自ら積極的に語り、私たちに働きかける方であるが、その中で最も大いなる「働きかけ」は、私たち罪人に対する「贖いの御業」である。生ける神様は、何よりも「私」を罪から救い出すために、積極的に働かれるのである。生ける神様は、禁断の実を食べて墮落したアダムとエバを放っておくのではなく、自ら積極的に関わり、「どこにいるのか」と問いかけられる（創3:9）。弟アベルを殺したカインに対しても悔い改めの機会を与え（4:6）、救いの民を生み出すためにアブラハムに語りかける（12:1）。そして、何よりも、御子イエス・キリストを救い主として、この世界に遣わしてくださった。さらに、私たち一人一人に聖霊を注ぎ、信仰を与え、神の子として召してくださっている。このように、罪を犯した「私」に対して、「生ける神」は、積極的に語りかけ、働きかけてくださるのである。

○私たちが、聖書と聖霊によって導かれ、「私たちの神は、生ける神である」と告白するとき、この罪深い「私」を全力で罪から救い出し、神の子としての恵みを与えようとしておられる神様の御名を賛美しているのである。

いのちのパン

いのち ぱん
「わたしは命のパンである。」

てん くだ き い ぱん
わたしは、天から降って来た生きたパンである。



ぱん た ひと えいえん い
このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。」

よほね による ふくいんしょ だい しょう せつ せつ
(ヨハネによる福音書 第6章48節・56節)

じぶん かお あんぱん こま ひと かな ひと た
自分の顔であるアンパンを、困っている人、悲しんでいる人に食べさせてあげる

せいぎ みかた ひーろー だれ あんぱんまん
正義の味方、ヒーローって…誰～だ？ アンパンマンだよ！

じゅうじか つみ し
イエスさまは、十字架について、罪のために死んでいる僕たち私たち、

つみ じごく かみ ぼしょ い わたし わたし すす
罪のために地獄(神さまがいっしょにいない場所)に行く僕たち私 たちを救うために、

じぶん いのち あた
ご自分の命まで与えてくださいました。

わたし いのち ぱん た い
そして、こうおっしゃいました。「私 が命のパンです。わたしを食べて生きなさい！」

しん まいにち かみ き
つまり、イエスさまを信じることです。信じるとは、毎日、神さまのことばを聴くこと、

よ こころ からだ なに しんこう げんき
読むことです。そうすると、心と体、何よりも信仰が元氣になります。

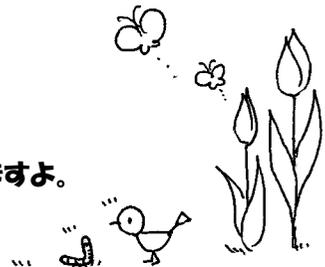
3かげつ あいだ またい ふくいんしょ みな ばけ よん ゆ
3ヶ月の間、マタイによる福音書を皆で励ましあって読んで行こう！！

※ 「いのちのパン」だけ読んでくれても良いです。

でも、もし、またい による ふくいんしょ ひら
でも、もし、マタイによる福音書も開いて、

ぜんご はなし よ わ
前後のお話を読むなら、もっとよ～く分かるようになりますよ。

ちから
もっと力がわいてくるよ。(*)v



いのちのばん

<p>3月31日（月） ヨハネ6章9節 ここに～持っている少年がいます</p> <p>アンパンマンは、自分の顔のアンパンを分けてあげます。この少年みたいですね。自分のお弁当は自分だけのものではないと思って、イエスさまに差し上げました。イエスさまのお話を真剣に聞いていたので、「今こそ、神さまを愛し、お友達を愛することを行わなくちゃ」と思ったのです。</p>	<p>4月3日（木） マタイ2章10節 喜びにあふれた</p> <p>ゲームやテレビやたべものや、たくさんさんの楽しみはあるけれど、それだけではさびしい。もっと大きなうれしいことを見つけるために、わたしは生まれてきた。大きな愛で、どんなときにもいっしょにいてくれるイエスさまを見つけて、イエスさまを礼拝したら、その大きなうれしさがわいてくる。</p>
<p>4月1日（火） マタイ1章23節 神は我々と共におられる</p> <p>「わたしは一人ぼっちだ」と思うとき、たまらなくさびしいけれど、ほんとは一人ぼっちじゃない。わたしといつまでもいっしょにいるため、イエスさまはこの世にきてくれて、十字架に死んでくれた。それくらいわたしといっしょにしようとしてくれた。だから、わたしは一人ぼっちじゃない。</p>	<p>4月4日（金） マタイ3章3節 その道筋をまっすぐにせよ</p> <p>イエスさまはわたしのところに来ようとしているのに、わたしがイエスさまのじゃまをしていることがある。イエスのために道筋をまっすぐにしよう。悪いことを神さまにあやまり、よい子になりたいと心から願おう。そうしたらイエスさまはわたしのところに来てくれて、わたしをたすけてくれる。</p>
<p>4月2日（水） マタイ2章3節 ヘロデ王は不安を抱いた</p> <p>イエスさまという王が生まれたと聞いてヘロデ王は不安になった。自分分いつまでも王さまでいたかったから。自分の思うとおりにわがままに暮らしたいと思ったから。でも、わがままにいることでしあわせになれた人はいない。イエスさまが王さまだ。イエスさまに従い、わがまますを捨てよう。</p>	<p>4月5日（土） マタイ3章17節 愛する子、わたしの心に適う者</p> <p>洗礼で汚い心を神さまに洗ってもらったわたしの友となるため、イエスさまも洗礼を受けた。そのイエスさまを神さまは愛し喜んだ。わたしが汚い心ときもイエスさまはいっしょだ。それを神さまは喜んでくれている。安心。</p> 

いのちのばん

<p>4月7日(月) マタイ4章4節</p> <p>人はパンだけで生きるものではない</p> <p>たくさんパンを持ちながら、たくさんお金を持ちながら、人は死んで行く。命は神さまがくれるものだから、パンやお金にたよったり、それに夢中になってはいけない。命をくださる神さまにたよろう。神さまの言葉の聖書を読んで従おう。そうしたら、永遠の命まで神さまはくださる。</p>	<p>4月10日(木) マタイ4章17節</p> <p>死の陰の地に住む者に光が</p> <p>イエスさまがまっさきにたすけようとした人々は、死の陰の地に住む人々だった。わたしが笑っているときにだけ、いっしょにいてくれるのではない。真っ暗な気持ちでいるときも、そのわたしのところにイエスさまは来てくれる。涙が出るときもイエスさまに祈ろう。助けてもらおう。</p>
<p>4月8日(火) マタイ4章6節</p> <p>主を試してはならない</p> <p>神さまがほんとうにいっしょにいてくれるのか心配になるとき、「ふしぎなことでも起こしてくれたらよいのに」と思うかもしれない。でも、信用しないで神さまのことを確かめようとしても、神さまに嫌われるだけだ。神さまを信じて聖書を読み、お祈りをし、教会に行こう。必ず神さまが分かる。</p>	<p>4月11日(金) マタイ4章20節</p> <p>二人はすぐに網を捨てて従った</p> <p>イエスさまといっしょにいることがとてもうれしいことなので、ペトロとアンデレはイエスさまに呼ばれたとき、大切にしていた網を捨ててイエスさまについて行った。どんなにたくさんものを捨てても、イエスさまといっしょならうれしい。生きているときも、死ぬときも、そのとおりだ。</p>
<p>4月9日(水) マタイ4章10節</p> <p>主を拝み、ただ主に仕えよ</p> <p>「悪いことをした方がしあわせになれそうだ」。そういう考えが心に浮かんだら、それは悪魔の誘う声だ。そんな悪魔の声に対して「主を拝み、ただ主に仕えよ」とイエスさまは答えた。わたしがどこにいても、神さまに従わないで幸せになれる場所はない。どこにいても、そこで主に仕えよう。</p>	<p>4月12日(土) マタイ5章3節</p> <p>心の貧しい人々は、幸いである</p> <p>貧しいほど人は神さまに頼りやすく、お金があるほど神さまを忘れやすい。でも、貧しくても神さまを忘れる人も、金持でも神さまに頼る人もいる。大切なのは心が貧しいこと、心が神さまに頼る心であることだ。そのような心を持とう。</p> 

いのちのばん

4月14日(月) マタイ5章14節
あなたがたは世の光である
 「あの人がいるから、わたしは明るい心でくらせる」。だれか、わたしのことをそう言ってくれる人がいたら、ほんとうにうれしい。イエスさまは、わたしを光と呼んでくれた。やさしい心をイエスさまがくれる。だからわたしは光になれる。



4月17日(木) マタイ6章19節
地上に富を積んではならない
 食べるものも着るものも住む家も、目に見えるものはいつかは古びてなくなってしまう。神さまにささげたお祈りや神さまが喜んでくれたよいおこないは、神さまがいつまでも忘れず、天国でほうびをくれる。いつかは古びるものではなく、神さまに喜ばれることをいちばん大切に思っていよう。

4月15日(火) マタイ5章44節
敵を愛しなさい
 わたしにいじわるをする人にやさしくすることはとてもむずかしい。そのむずかしいことができるほど、やさしい心になりなさい、とイエスさまは教えてくれた。神さまは、神さまを嫌う神さまの敵のような人にも食べ物を与えてくださる。わたしは神さまの子供なのだから、神さまのまねをしよう。

4月18日(金) マタイ6章25節
思い悩むな
 学校のことや友だちのことや体のことや、心配しないではいられない。空の鳥のように何も心配しないでいたら、どんなにいいだろう。空の鳥を守っている神さまがわたしの神さまだ。何もかも神さまにまかせて、神さまに喜ばれることを考えよう。心配だけど、ずいぶん心は軽くなって来る。

4月16日(水) マタイ6章6節
自分の部屋に入って戸を閉め
 お父さんやお母さんがいないところでお祈りをしても、お父さんやお母さんは気がつかず、喜んでくれないかもしれない。でも、神さまはそんなお祈りを特別に喜んでくれる。人に喜ばれるためではなく、神さまに喜ばれるお祈りをわたしもしよう。自分の部屋に入って戸を閉めて祈ろう。

4月19日(土) マタイ6章33節
まず、神の国と神の義を求めなさい
 「やさしい人になるように」と神さまはわたしに言ってくれるから、わたしの心が神さまに従う心になったらよいのに。人々がみな神さまに従う人になったらよいのに。わたしの心とこの世界とが神さまの国になったらよいのに。そう願いながら生きる人を神さまは喜んでくれて、守ってくれる。

いのちのばん

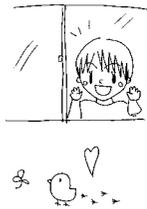
<p>4月21日（月） マタイ7章1節</p> <p>人を裁くな</p> <p>だれでも、人のした悪いことにはすぐに気がついて人を責めるのに、自分のした悪いことには気がつかない。心を静めて祈るとき、自分のした悪いことも、それを神さまがゆるしてくれていることも、よく分かるようになる。そうしたら、人のした悪いこともやさしい心でゆるせるようになる。</p>	<p>4月24日（木） マタイ8章2節</p> <p>御心ならば、わたしを清くする</p> <p>イエスさまが願っていることはそのとおりになる。そのイエスさまが、わたしの心がきれいになることを願っていてくれる。だから、わたしの心は天国に入入るまでに必ずきれいになる。イエスさまが近づいてわたしの心にさわってくれるからそうなる。わたしも祈ろう。イエスさまに近づこう。</p>
<p>4月22日（火） マタイ7章7節</p> <p>求めなさい。そうすれば、与えられる</p> <p>わたしの背中に羽が生えるように求めても、神さまは聞いてくれない。神さまが聞いてくれるのは、神さまに喜ばれる願いだけ。神さまがもっと分かるように、人にやさしくなれるように、イエスさまといっしょに歩けるように求めたら、きっと聞いてくれる。いちばん大切な願いは聞いてくれる。</p>	<p>4月25日（金） マタイ8章24節</p> <p>イエスは眠っておられた</p> <p>嵐にゆれる舟の中で、弟子たちはこわがって大騒ぎをしたけれど、イエスさまは少しも騒がず眠っていた。わたしがこわがって大騒ぎをするときも、わたしといっしょのイエスさまは少しも騒いでいない。イエスさまがいっしょだからこわくない。嵐のような日にもイエスさまに祈ろう。</p>
<p>4月23日（水） マタイ7章24節</p> <p>岩の上に自分の家を建てた賢い人に</p> <p>こわれそうな家に住んでいたら心配でたまらない。わたしがイエスさまに従わないで生きるならそれと同じだ。いつかは神さまに叱られて、体も心も滅びてしまう。イエスさまに従っていれば、じょうぶな家に住みたいだ。いつか死ぬときも、天国で、体も心もほろびることがない。</p>	<p>4月26日（土） マタイ8章29節</p> <p>神の子、かまわないでくれ</p> <p>悪い力に心をしばられてしまった人がイエスさまに「神の子、かまわないでくれ」と叫んだ。イエスさまに心を変えられるのが嫌だったのだ。でも、悪い力にしばられた心のままでさびしく悲しい。</p> <p>イエスさまに心を変えてもらおう。</p> 

いのちのばん

<p>4月28日（月） マタイ9章2節</p> <p>あなたの罪は赦される</p> <p>今までにした悪いことはどれくらいあるだろうか。そのぜんぶを神さまに叱られると思ったら元気がでない。でも、元気を出そう。イエスさまが十字架に死んでくれたから、わたしの罪は赦される。天国に行ったとき、神さまはわたしを叱ることなく、やさしいお父さんのように迎えてくれる。</p>	<p>5月1日（木） マタイ10章16節</p> <p>鳩のように素直になりなさい</p> <p>わたしたちはイエスさまからこの世界につかわされた者です。わたしたちはおおかみの間にいる羊のように生活しています。だから、神さまが望んでおられることをよくよく考えて、そのとおりにやってみましょう。イエスさまがいっしょにいてくださるから。</p> 
<p>4月29日（火） マタイ9章13節</p> <p>罪人を招くため</p> <p>わたしの体が悪いときは医者が治してくれるけれど、わたしが悪い人になったときはなおせる人がいるだろうか。イエスさまは悪い人をなおしてくれる医者のような。わたしをいつまでも赦しながら、よい人になるように願い続けてみちびいてくれる。罪人を招くために、イエスさまは来てくれた。</p>	<p>5月2日（金） マタイ10章19節</p> <p>どう言おうかと心配してはならない</p> <p>イエスさまにしたがって生きてゆくと、周りの人と意見が違ってしまふことがあります。そんなときは周りに合わせてしまったほうが簡単です。けれども、イエスさまはご自分のために証をするように言われます。心配はいりません。語るべき言葉を聖霊が教えてくれます。</p>
<p>4月30日（水） マタイ9章38節</p> <p>働き手を送ってくださるように</p> <p>神さまのことを教えてくれる人がなければ、だれも神さまのことが分からず、一人ぼっちで滅びるだけだ。神さまのことを教える働き手を神さまが送ってくださるように祈ろう。わたしも神さまのことを教える人になれるように祈ろう。</p> 	<p>5月3日（土） マタイ10章31節</p> <p>一羽さえ～地に落ちることはない</p> <p>イエスさまが喜ばれることをするのは、勇気のいることです。でも周りの人を恐れる必要はありません。世界を支配される父なる神さまの許可なしに、一羽の雀さえ地に落ちないのですから。</p> 

いのちのばん

5月5日(月) マタイ10章32節
その人を仲間であると言います
 友達に「わたしはイエスさまを信じている」と言っていますか？ 少し勇氣がいりますね。でも「イエスさまを信じている」と人に言うなら、イエスさまも、わたしたちのことを仲間だと喜んで言ってくださいますよ。



5月8日(木) マタイ12章50節
わたしの兄弟、姉妹、また母
 イエスさまにつながって、父なる神さまが願っておられることをする人は、イエスさまの兄弟、姉妹、母です。神さまは、あたたかい家族として、わたしたちを受け入れてくださるのです。



5月6日(火) マタイ11章5節
目の見えない人は見え
 洗礼者ヨハネは牢屋の中、死の不安の中でイエスさまのうわさを聞きました。弟子を遣わしてイエスさまに尋ねます。「目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き」イザヤ書35章で預言された救い主の約束が今起こっていると、イエスさまはヨハネに救い主の確信を与えられました。

5月9日(金) マタイ13章23節
あるものは百倍~の実を結ぶ
 神さまが願っておられることは、聖書の御言葉によって知ることができます。そして、そのとおりにしようとする人は、100倍、60倍、30倍の実を結ぶと約束されています。わたしたちの目には実を結んでいるように見えなくても、神さまはたくさん実らせてくださっているのです。

5月7日(水) マタイ11章28節
だれでもわたしのもとに来なさい
 友だちに嫌われないように気をつけている人。勉強やスポーツで誰かからほめられるようにがんばっている人。疲れていませんか？ イエスさまは、人からどう思われようとあなたを大切にしてください。「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい、休ませてあげよう。」

5月10日(土) マタイ13章32節
鳥が来て枝に巣を作るほどの木に
 からし種は、粉のように小さな種です。でも、畑にまくと、鳥が巣を作るほどに大きく成長します。神さまが支配されていることも、目に見えないくらい小さく思えます。でも、いったん気づいたならば、神さまの支配がどんなに大きいものかわかります。神さまの支配に信頼しましょう。

いのちのばん

<p>5月12日（月） マタイ13章44節 煙に宝が隠されている</p> <p>神さまの国、神さまの支配を知ること は、煙に宝が隠されていることを 知った人が喜んで持ち物売り払っ てその煙を買うことにたとえられま す。神さまの国は、持ち物をすっか り売り払ってでも手に入れるほどの価 値があるものなのです。わたしたちに それが与えられています。</p>	<p>5月15日（木） マタイ15章6節 神の言葉を無にしている</p> <p>世の中の価値観からすれば「勉強が 忙しいときには教会に行かなくても 良い」「おこづかいが足りないときに は献金をしなくても良い」と考えたく なります。そんなとき、わたしたちの 心は神さまから離れてしまっていま す。神さまを信頼して、御言葉のと おりに生きてみましょう。</p>
<p>5月13日（火） マタイ14章20節 すべての人が食べて満腹した</p> <p>イエスさまのお話を聞くために、男 の人が五千人、女の人と子供たちはた ぶんもっとたくさん集まっていた。 町から離れた場所でみんながお腹 を空かせます。でもパン五つと魚二匹 しかありません。イエスさまはそれ だけでみんなを満腹させました。神 さまは食べ物をも支配されています。</p>	<p>5月16日（金） マタイ15章27節 小犬も～パン屑はいただくのです</p> <p>神さまを信頼しましょう。イエス さまはユダヤ人たちにしか伝道して いませんでした。カナン人のお母さん はそのことを知っても、娘を助けて くれるようにお願い続けまし た。イエスさまはその 信仰を見て娘をいやさ れました。</p> 
<p>5月14日（水） マタイ14章31節 信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか</p> <p>ペトロは湖の上を歩いてイエス さまのところへ行こうとしました。途 中で強い風に気づくと怖くなって沈 みかけます。「なぜ疑った のか」と言ってイエス さまはつかんでくださいま した。神さまのご支配を 疑う必要はありません。</p> 	<p>5月17日（土） マタイ15章31節 口の利けない人が話すようになり</p> <p>イエスさまのもとに、足の不自由な 人、目の見えない人、体の不自由な 人、口の利けない人たちが大勢連れて こられました。イエスさまは彼らを いやされました。このすばらしい出来 事を見て、皆が神さまを賛美しまし た。イエスさまは、確かに神さまが遣わ された神の子、救い主です。</p>

いのちのばん

5月19日（月） マタイ16章16節
あなたはメシア、生ける神の子です
 人々はイエスさまを預言者の一人
 だと言いました。ペトロは「あなたは
 メシア、生ける神の子です」と告白し
 ました。イエスさまを神の子、救い主
 と告白できることはすば
 らしいことです。神さま
 ご自身がわたしたちに教
 えてくださいました。



5月22日（木） マタイ17章20節
からし種一粒ほどの信仰があれば
 イエスさまはご自分が神の子、救い
 主であることをハッキリさせてくだ
 さいました。イエスさまを信じましょ
 う。小さな信仰があれば、不可能に見
 えても必ず救いが与えられます。救い
 とは、山を動かすよう
 に、不可能なことを可
 能にするものです。



5月20日（火） マタイ16章21節
苦しみを受けて殺され～復活する
 イエスさまはご自分がメシアである
 ことを明かされてから、ご自分がユダ
 ヤ人の指導者たちから苦しめられて殺
 されることを弟子たちに話し始められ
 ました。それはわたしたちの救いのた
 めに必要なことで、神さまが計画して
 くださったことです。そしてイエスさ
 まは三日目に復活してくださいます。

5月23日（金） マタイ17章27節
彼らをつまづかせないようにしよう
 神さまを信じている人は神殿税を
 払うべきだと考えられていました。神
 の子であるイエスさまが神殿税を納
 める必要はありませんでしたが、余計
 なことで人々の信仰が揺さぶられな
 いように神殿税を納められました。わ
 たしたちも同じように人々に心を配
 る必要があることがあります。

5月21日（水） マタイ17章5節
これはわたしの愛する子
 イエスさまは三人の弟子だけを連
 れて高い山に登られました。そこでイ
 エスさまのお姿が輝き、モーセとエリ
 ヤが現れて語り合いました。さらに輝
 く雲の中から「これはわたしの愛する
 子～これに聞け」という声がしまし
 た。イエスさまこそ約束の救い主で神
 の子であると明らかにされました。

5月24日（土） マタイ18章4節
子供のようになる人が～偉い
 「自分を低くして、この子供よう
 になる人が、天の国でいちばん偉いの
 だ」とイエスさまは言われました。人
 は自分を偉く高めたがり
 ます。低められると悔し
 いです。でも低いままで
 良いのです。それがいち
 ばん偉いからです。



いのちのばん

<p>5月26日（月） マタイ18章8節 <small>かた て かたあし</small> 片手片足になっても命にあずかる <small>なに</small> 何があっても、わたしたちはイエス <small>あた えい えん いのち</small> さまが与えてくださる永遠の命にあ ずからなければなりません。わたした <small>じんせい しんこう す</small> ちの人生には信仰を捨てそうになる <small>かなら</small> つまずきが必ずあります。それは避け られません。しかし、たとえ片手片足 <small>きり す</small> を切り捨てなければならなくても、イ <small>はな</small> エスさまから離れてはなりません。</p>	<p>5月29日（木） マタイ18章22節 <small>なな ななじゅうばい</small> 七の七十倍までも赦しなさい <small>だれ</small> 誰かがわたしに嫌<small>いや</small>なことをしたら、 わたしは怒る<small>おこ</small>権利<small>けんり</small>を持ってはるはずで す。その人<small>ひと</small>を赦<small>ゆる</small>す必要<small>ひつよう</small>はないはずで す。しかしイエスさまは何回でもその人<small>ひと</small>を <small>ゆる</small> 赦せと言<small>い</small>われます。神さまはわたした <small>ゆる</small> ちを赦して<small>ゆる</small>くださいました。だからわ <small>おこ けんり</small> たしたちも怒る<small>おこ</small>権利<small>けんり</small>を捨<small>す</small>てるのです。 <small>ゆる</small> 赦したときに主<small>しゅ</small>の平安<small>へいあん</small>が与<small>あた</small>えられます。</p>
<p>5月27日（火） マタイ18章13節 <small>きゅうじゅうきゅうひき</small> 九十九匹より、その一匹のことを <small>かみ ちい</small> 神さまは小さな者<small>もの</small>が一人<small>ひとり</small>でも滅<small>ほろ</small>び ることを望<small>のぞ</small>まれません。群<small>む</small>れから迷<small>まよ</small>い <small>で</small> 出た一匹<small>いっぴき</small>を羊飼<small>ひつしか</small>いが必死<small>ひつし</small>で探<small>さが</small>すよう <small>ひとり うしな</small> に、一人<small>ひとり</small>が失<small>うしな</small>われることをも神さまは <small>かな</small> 悲<small>かな</small>しまれます。わたしたちも誰<small>だれ</small>一人<small>ひとり</small>軽 <small>はな</small> んじてはなりません。イエスさまから <small>はな</small> 離<small>はな</small>れないように、お互<small>たが</small>いに導<small>みちび</small>きあいま しょう。</p>	<p>5月30日（金） マタイ19章14節 <small>こども</small> 子供たちを来させなさい イエスさまのところに人々<small>ひとびと</small>が子供 たちを連<small>つ</small>れてきたとき、弟子<small>でし</small>たちは叱<small>しか</small> りました。しかしイエスさまは「子供 たちを来<small>こ</small>させなさい～天<small>てん</small>の国<small>くに</small>はこの ような者<small>もの</small>たちのものであ る」と言<small>い</small>われて、うれし いことに子供たち<small>こども</small>を祝<small>しゆく</small>福 してくださいました。</p> 
<p>5月28日（水） マタイ18章20節 <small>なか</small> わたしもその中<small>なか</small>にいるのである わたしたちは一人<small>ひとり</small>で信仰<small>しんこう</small>の歩<small>あゆ</small>みを するのではありません。二人<small>ふたり</small>または三 <small>にん</small> 人がイエスさまの名<small>な</small>によって集<small>あつ</small>まる <small>なか</small> ところにはイエスさまもその中<small>なか</small>にい <small>やくそく</small> てくださると約<small>やく</small>束<small>そく</small>されています。本当 <small>ほんとう</small> に苦<small>くる</small>しいときにこそ、この恵<small>めぐ</small>みを生<small>い</small>か <small>きょうかい いっしょ</small> して教会<small>きょうかい</small>で一緒<small>いっしょ</small>に祈<small>いの</small>りましよう。イエ スさまがそこ<small>そこ</small>にいてくださいます。</p>	<p>5月31日（土） マタイ19章26節 <small>にんげん</small> 人間<small>にんげん</small>にできることではないが <small>えい えん いのち え</small> 永遠<small>えい</small>の命<small>えん</small>を得<small>え</small>ることは本<small>ほん</small>当<small>とう</small>に難<small>むずか</small> いです。わたしたちは周<small>まわ</small>りにいる人<small>ひと</small>を <small>じぶん じしん</small> 自分<small>じぶん</small>自身<small>じしん</small>のように愛<small>あい</small>することができ ません。誰<small>だれ</small>も行<small>おこな</small>いによって自分<small>じぶん</small>を救<small>すく</small> うことはできないのです。しかし神<small>かみ</small>様<small>さま</small>は <small>なん</small> 何<small>なん</small>でもできます。こんな罪<small>つみ</small>深<small>ふか</small>いわたし <small>すく</small> たちを救<small>すく</small>うことができます。この神<small>かみ</small>様<small>さま</small> <small>すく めぐ よろこ</small> の救<small>すく</small>いの恵<small>めぐ</small>みを喜<small>よろこ</small>んで受<small>う</small>けましよう。</p>

いのちのばん

6月2日(月) マタイ20章14節
わたしはこの最後の者にも
 わたしたちなら、何にも働いていない人にお金をあげるなんて、「えこひいき! ずるい!」って怒るかもしれません。でも、小さなときから、神さまを信じているあなたこそ、神さまに「えこひいき?」されているのです。恵みを受けた人は、神さまのために働きましょう。



6月5日(木) マタイ21章9節
子ろばにのって
 イエスさまがエルサレムの都にいられたとき、王さまらしい大きな白い馬に乗って堂々と来られたのではありません。小さな子どものろばに乗られました。わたしたちは子ろばです。イエスさまは、わたしたちを用いてくださいます。今日もイエスさまをお乗せしましょう。

6月3日(火) マタイ20章28節
仕えられる為ではなく、仕えるため
 心の中で「くらべっこ」をすることがありませんか。「どっちがかっこいい、どっちが頭がよい、どっちが……?」イエスさまは、一番偉い人なのに、わたしたちのために十字架にかかって、しもべとなってくださいました。イエスさまは、「わたしのまねをきなさい」と招いておられます。

6月6日(金) マタイ21章13節
わたしの家は、祈りの家と呼ばれる
 日曜学校、教会は楽しいですか。でも、礼拝している時はおしゃべりはだめです。教会は、祈りの家、神さまを礼拝する神さまの家だからです。大きな声で元気に讃美歌を歌うと、神さまは喜んでくださいます。



6月4日(水) マタイ20章30節
わたしたちを憐れんでください
 目の見えない人が二人、周りの人たちに「うるさい」と叱られても、「わたしたちを憐れんでください。目を開けてください。」とイエスさまにお願いしました。今日、あなたは何をイエスさまに求めますか?
熱心に真剣に大胆にお願
 いしましょう。



6月7日(土) マタイ21章37節
わたしの息子なら敬ってくれる
 神さまはイスラエルの人たちを救うと約束されました。イエスさまこそ救い主です。でも、そのイエスさまを十字架で殺してしまいました。ところが、それによって僕たちわたしたちにも救いが広がりました。わたしたちは心から神さまに感謝して、イエスさまを敬います。

いのちのばん

6月9日（月） マタイ22章14節
招かれる人は多いが、選ばれる人は
 教会にお友達を誘っていますか？
 「教会っておもしろい？ 日曜日の朝はテレビやゲームを楽しみたい！」な～んて言われたことのあるお友達もいるでしょう。でも、あきらめないで！ 神さまこそ、あなたのお友達を招いておられるからです。



6月12日（木） マタイ23章5節
そのすることは、～人に見せるため
 イエスさまは、律法学者たち（旧約聖書の先生）とファリサイ派（律法=掟を守れば救われると考える人々）の人々を「偽善者」と呼ばれ、「不幸だ」（=災いだ）とお叱りになりました。偽善者とは、神さまの目の前で生きて、人の目を気にして生きている人のことです。

6月10日（火） マタイ22章21節
皇帝のものは皇帝に、神のものは神に
 世界のすべては神さまが造られました。ですから誰も「これはわたしだけのもの！」と言いはれないはずです。造られたものの傑作は人間です。人間は誰のものですか？ 神さまのものです！ それならあなたは自分のもの？ イエスさまのものです！

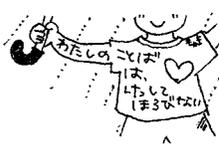


6月13日（金） マタイ23章26節
まず、杯の内側をきれいにせよ
 あなたはお茶を飲むとき、どっちのお茶碗を使いたいですか？ 外側はともきれいだけれど、内側は汚いものがくっついているもの。外側は何の飾りもないけれど内側はきれいなもの。内側は外からは見えません。心も目に見えませんが、人の内側=心のきれいな人にならせてください。

6月11日（水） マタイ22章36節
どの掟が最も重要でしょうか
 「律法全体と預言者」というのは旧約聖書のことです。イエスさまは、「あなたの神である主を愛しなさい。」「隣人を自分のように愛しなさい。」という、二つで一つの愛に生きる掟が、旧約聖書に示された神さまの御心の中で、心だと教えていただきました。この御言葉を暗唱しましょう。

6月14日（土） マタイ24章14節
それから終わりが来る
 「終わり」とは、王さまとしてイエスさまが再び来てくださり、世界をまったく新しく作り直し、完成してくださる、すばらしいときのことです。いつのときに来るのでしょうか？ 世界中にイエスさまの福音が伝えられた後です。伝道する人は終わりの日を早めることができるのです。

いのちのばん

<p>6月16日（月） マタイ24章30節 人の子が～乗って来るのを見る</p> <p>「人の子」とは、終わりのときに神さまがイスラエルの人々を救うために遣わす人のことです。イエスさまの自己紹介です。すでにイエスさまはこの世界に來られました。「終わり」のときは始まっています。イエスさまは、終わりのときを終わらせるために、栄光に包まれて再び來られます。</p>	<p>6月19日（木） マタイ25章6節 花婿だ。迎えに出なさい</p> <p>イエスさまは何度もご自分が再び來られる（再臨）日のことを教えてくださいました。それは僕たちわたしたちが決して天国に入りそこなうことがないためです。イエスさまが真剣になって約束してくださっていますから、わたしたちも信じて待つて、天国に入る者となりましょう。</p>
<p>6月17日（火） マタイ24章35節 わたしの言葉は決して滅びない</p> <p>天のお父さま、イエスさまが、目に見えている世界はいつか滅んでしまおうとおっしゃいました。けれども、聖書の御言葉は決して滅びないとおっしゃいました。わたしの心の中に、毎日、永遠の御言葉をたくさん刻み込んでください。</p> 	<p>6月20日（金） マタイ25章14節 自分の財産を預けた </p> <p>一タラントンはおよそ6000万円。しもべはご主人のお金を預かります。僕たち一人ひとりにも、主なる神さまから能力が与えられています。それを生かすために、勉強したり遊んだり、今を「大切に!」、「神さまのために!」用いてください。再臨のとき、神さまの評価をお楽しみに!</p>
<p>6月18日（水） マタイ24章44節 あなたがたも用意していなさい</p> <p>イエスさまが目に見えるお姿で戻って來られる日は、神さまのほか、誰も知りません。ですから、イエスさまは「用意しておきなさい、目を覚ましていなさい」とおっしゃいます。信じて待つこと、お祈りをやめないことです。そのような人は、今日、お会いする用意がちゃんとできています。</p>	<p>6月21日（土） マタイ25章40節 わたしにしてくれたことなので</p> <p>イエスさまは御子なる神さまですが、わたしたちを救うために人間となり、罪人の仲間になってくださいました。病気で苦しんでいる人、貧しくてお腹をすかしている人、一人で死んで行く人……。その人たちにはすでにイエスさまがいっしょにおられます。あなたの目は誰に向いていますか?</p>

いのちのばん

<p>6月23日（月） マタイ26章12節</p> <p>わたしを葬る準備をしてくれた</p> <p>家を一つ買えるくらいの高い香油、自分の全てをイエスさまのために使ってもらいたい……。イエスさまは、マリアさんの願いを喜ばれました。十字架に向かうイエスさまは、すてきな香りを漂わせていました。彼女はちゃんとイエスさまのお話を聴いていたから、葬りの準備ができたのです。</p>	<p>6月26日（木） マタイ26章52節</p> <p>剣を取る者は皆、剣で滅びる</p> <p>天のお父さま、世界にはおそろしい武器がたくさんあります。イエスさまは、人を脅したり、殺したりする道具を使うなと命じられました。イエスさまを信じる人たちが、この御言葉を真剣に聴けますように。</p> 
<p>6月24日（火） マタイ26章26節</p> <p>これはわたしの体である</p> <p>イエスさまは、「これはわたしの体です。」「これはわたしの血です。」とおおせになられました。教会では、聖餐の礼典をお祝いするとき、それらを食べ、飲みます。パンが体の一部になるより、もっと確かにイエスさまはその人と近くいてくださるのです。</p> 	<p>6月27日（金） マタイ26章74節</p> <p>そんな人は知らない</p> <p>ペトロさんはイエスさまの一番の弟子だと自慢していました。今こそペトロさんの出番です。ところが「イエスとは関係ない!」と裏切りました。怖くなったのです。イエスさまのことを間違って理解していたからです。しかしイエスさまは、そんなペトロを変わらない愛で愛し抜かれました。</p>
<p>6月25日（水） マタイ26章39節</p> <p>わたしの願いどおりではなく</p> <p>愛するイエスさま、グツセマネでわたしのために恐ろしいほどの悲しみと苦しみに打ち勝ってくださいました。今もわたしのために執り成しのお祈りをしてくださることを感謝します。わたしも今、「御心の天になるごとく、地にもなさせたまえ」と、イエスさまと一つになってお祈りします。</p>	<p>6月28日（土） マタイ27章22節</p> <p>十字架につける</p> <p>「イエスさまバンザイ」と言っていた群衆は、自分たちの期待した通りにならないと分かったとき、「十字架につける」と正反対のことを言いました。自分勝手です。ところが神さまは、そんな群衆を救うためにイエスさまを十字架につけてしまわれるのです。これが神の愛です。</p>

いのちのばん

<p>6月30日(月) マタイ27章42節 自分(じぶん)は救(すく)えない。イスラエルの王(おう)だ</p> <p>今(いま)すぐ十字架(じゅうじか)から降り(お)りて来(こ)い! もしもイエスさまが降り(お)りられたら、わたしたちは自分(じぶん)の罪(つみ)によって神(かみ)さまの裁(さば)きを受けて、滅(ほろ)ぶるしかありません。イエスさまは真(まこと)のイスラエル、神(かみ)さまの民(たみ)の王(おう)さまだから、決して降り(お)らないのです。あなたも神(かみ)さまの民(たみ)のひとりです。主に感謝(かんしゃ)!</p>	<p>7月3日(木) マタイ28章6節 あの方(かた)はここにはおられ(ら)ない</p> <p>クリスマス(しん)の知らせ(し)もイースター(てん)の知らせ(し)も、天使(てんし)が告(つ)げてくれ(く)れました。神(かみ)さまの御(み)子(こ)が人間(にんげん)となら(な)れる瞬間(しゆん)間(かん)もおよみ(よ)みがえり(え)にな(な)れる瞬間(しゆん)間(かん)も、人間(にんげん)の目(め)で見(み)ることはでき(き)ません。でも、マリア(ま)のように信(しん)じ(じ)ることはでき(き)ます!</p> 
<p>7月1日(火) マタイ27章46節 わが神(かみ)、なぜわたし(わたし)をお見捨(みす)てに(に)〜</p> <p>イエスさまはあなた(あなた)の身代(みが)わりにな(な)られたので、父(ちち)なる神(かみ)さまに捨(す)てられます。わたしたち(わたしたち)には想像(そうさう)でき(き)ないほど(ほど)のお苦(くる)しみ(しみ)を十字架(じゅうじか)で味(あじ)わわれ(れ)ました。この苦(くる)しみ(しみ)のおか(か)げで、わたしたち(わたしたち)は決(けつ)して神(かみ)さまに見捨(みす)てられ(ら)れること(こと)がな(な)いのです。イエスさま(しん)を信(しん)じ、感謝(かんしゃ)します!</p>	<p>7月4日(金) マタイ28章9節 「おはよう」と言(い)われた</p> <p>イエスさま(しん)は、復活(ふっかつ)の喜(よろこ)び(び)を弟(で)子(し)たち(たち)に伝(つた)えに走(はし)ったマリア(ま)さん(さん)たち(たち)にそのお姿(すがた)を現(あらわ)して、「おはよう!」とおっしや(し)いました。イエスさま(しん)を信(しん)じる人(ひと)には、死(し)と地獄(じごく)の夜(よる)は終(お)わり、命(いのち)と天国(てんこく)から(か)らの朝(あさ)日(ひ)が射(さ)し込(こ)んで(い)ます。ハレルヤ!</p> 
<p>7月2日(水) マタイ27章60節 墓(はか)の入り口(いりぐち)には大(おお)きな石(いし)を転(ころ)がし</p> <p>お墓(はか)のほ(ほ)ら穴(あな)は大(おお)きな石(いし)でふた(ふた)をさ(さ)れました。番兵(ばんべい)も見張(みは)って(い)ました。死(し)体(たい)を弟(で)子(し)たち(たち)が盗(ぬす)んで「復活(ふっかつ)した」など(など)と言(い)わせ(せ)ないた(た)め(め)です。弟(で)子(し)たち(たち)は逃(に)げ(げ)て(い)るから、大(だい)丈(じょう)夫(ふう)な(な)に……。人(にん)間(げん)が神(かみ)さま(さま)の計(けい)画(かく)と力(ちから)にふた(ふた)をす(す)ること(こと)など(など)でき(き)ない(ない)のに……。 </p>	<p>7月5日(土) マタイ28章20節 いつもあなた(あなた)がた(とも)と共(とも)に(に)い(い)る</p> <p>マタイ(ま)の福(ふく)音(いん)書(しょ)を讀(よ)み終(お)え(え)られ(ら)れ(れ)ました。おめ(め)で(で)と(と)う! マタイ(ま)さん(さん)は、最(さい)初(しょ)に「インマヌエル(いんまぬえ)」、最(さい)後(ご)には「いつもあな(あ)がた(た)と共(とも)に(に)い(い)る」と書(か)きま(ま)した。神(かみ)さま(さま)の愛(あい)、イエス(い)さま(さま)の愛(あい)でサ(サ)ンドイッチ(ッチ)のよう(よう)にはさ(さ)まれ(め)て(て)いた(いた)の(の)で(で)しょう(しょう)ね。僕(ぼく)たち(たち)わ(わ)た(た)した(た)ち(ち)も同(おな)じ(じ)です。今(きょう)もイ(い)エス(え)さま(さま)は(は)一(いっ)緒(しょ)で(で)す!</p>

2008年7～9月カリキュラム（第30号）

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第1年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参考教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
単元の目標			
7月6日	三位一体の神（一）	問10	ウ小6、ウ大9、ハイデル25
		ヨハネ15:26-27	ヨハネ15:26（部分）
父・子・御霊として三位一体の命の交わりに生きておられる神を知ろう			
13日	三位一体の神（二）	問10	ウ小6、ウ大9、ハイデル25
		使徒20:28-32	使徒20:28（前半）
教会を通してご自身をお示しくださる三位一体の神との交わりを喜ぼう			
20日	主権者なる神	問11	ウ小7、ウ大12、ハイデル26
		詩編139:1-10	ローマ11:36
天地を統べ治め、わたしたちをとらえておられる主権者なる神をあがめよう			
27日	天地創造（一）	問12	ウ小9、ウ告白4章
		創世記1章	創世記1:31（前半）
この世界は神の作品である。そこに在ることの喜びと感謝をささげて生きよう			
8月3日	天地創造（二）	問12	ウ小57-62、ウ告白21章
		創世記2:1-4a	創世記2:3（後半）
七日目に主は安息された。安息日の交わりを喜び、礼拝をささげよう			
10日 （平和）	平和を創り出す	—	—
		マタイ26:47-56	マタイ26:52（後半）
平和主日。剣を取る者は剣で滅びるとの御言葉から平和を考えよう			
17日	摂理の神（一）	問13	ウ小11、ハイデル26-28
		ローマ8:28	ローマ8:28
主なる神がわたしたちのために働いておられる。神への信頼と平安の中を歩もう			
24日	摂理の神（二）	問14	ハイデル94-95
		使徒16:16-24	使徒16:18（後半）
占いは人を捕らえ縛りつけてしまう。解き放たれて、神に依り頼んで生きよう			
31日	人間の創造	問15	ウ小10、ハイデル6
		創世記1:26-31	創世記1:27（前半）
人は神に似せて、神のかたちで造られた。人として生きることの幸いを知ろう			
9月7日	人間の罪	問16	ウ小13、ハイデル7
		創世記3:1-7	ヨハネ4:10
神の愛と慈しみのまなざしの中で、人間の犯した罪を見つめよう			
14日 （敬老）	罪と墮落	問17	ウ小14-16、ハイデル7-8
		創世記3:8-24	ローマ5:8
人の罪の広がり、なお与えられている神の憐れみに目を留めよう			
21日	罪の悲惨	問18	ウ小17-19、ハイデル3-11
		創世記4:1-16	ガラテヤ6:17（後半）
罪は現実の悲惨となって現れる。神から離れて生きる苦しさ目に向けよう			
28日	わたしも罪人	問19	ウ小16、ハイデル5-7
		ルカ18:9-14	ホセア6:6
罪のない人はだれもない。自らの罪を認めて、悔い改めを新しくしよう			

2008年度 年間カリキュラム

二年サイクル第1年（子どもカテキズム問1～36）

	月 日	教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム
2008年 第29号	4月6日	進級式	第一部 人生の目的 人生の目的……礼拝	問1
	4月13日		神の栄光をあらわす	問1
	4月20日		救いの喜び	問2
	4月27日		神の子の喜び	問2
	5月4日		霊と真理による礼拝	問3
	5月11日	聖霊降臨祭 母の日	聖霊降臨祭・教会の誕生	問3
	5月18日		神と人を愛する（一）	問4
	5月25日		神と人を愛する（二）	問4
	6月1日		神の御言葉	問5
	6月8日	花の日	愛の手紙	問6
	6月15日	父の日	第二部 信仰の道 霊なる神	問7
	6月22日		唯一の神	問8
	6月29日		生ける神	問9
	30号	7月6日		三位一体の神（一）
7月13日			三位一体の神（二）	問10
7月20日			主権者なる神	問11
7月27日			天地創造（一）	問12
8月3日			天地創造（二）	問12
8月10日		(平和)	平和を創り出す	
8月17日			摂理の神（一）	問13
8月24日			摂理の神（二）	問14
8月31日			人間の創造	問15
9月7日			人間の罪	問16
9月14日		(敬老の日)	罪と墮落	問17
9月21日			罪の悲惨	問18
9月28日			わたしも罪人	問19

年・号	月 日	教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム
2008年 第31号	10月5日		神の怒り	問20
	10月12日		贖い主の必要性	問21
	10月19日		二性一人格（一）	問22
	10月26日	宗教改革記念日	二性一人格（二）	問22
	11月2日		主は救い、イエス	問23
	11月9日		神の御子、キリスト	問23
	11月16日		謙卑のキリスト	問24
	11月23日		高挙のキリスト	問24
	11月30日	アドベント	預言者イエス	問25
	12月7日	アドベント	大祭司イエス	問26
	12月14日	アドベント	真の王イエス	問27
	12月21日	降誕祭	御子イエスの誕生	—
	12月28日	年末	一年の感謝	—
2009年 第32号	1月4日	新年	恵みのみ	問28
	1月11日		選びと有効召命	問29
	1月18日		キリストとの結合	問30
	1月25日		罪の赦しと義認	問31
	2月1日		神の子とされる幸い	問31
	2月8日	(信教の自由)	聖化の恵み	問32, 33
	2月15日	レント	愛の歩み	問32, 33
	2月22日	レント	神の民の祈りの家	問34
	3月1日	レント	キリストの体なる教会	問34
	3月8日	レント	再臨の約束	問35
	3月15日	レント	再臨に備える	問35
	3月22日	レント	死のときの祝福	問36
	3月29日	レント	復活のときの祝福	問36

〈執筆者よりひとこと〉

- 改革派教会に属する保育園が二年目を迎えます。キリスト教信仰に立つ保育を目指して励んでいます。ぜひお祈りください（澤谷由美子）。
- 多くの先生方の働きによって、この教案誌が作成されていることを知りました。その一端を担うことができ、感謝です（恵泉教会牧師、大場康司）。
- 教案誌に書かせていただくのは初めてです。仲間に加えていただき感謝です（関口津矢子）。
- 本誌のPDF版を欲しがってるのは私だけ？（関口康）。
- 一人でも多くの子どもたちが、若い時に主を信じていることができますようにお祈りしています（立石彰）。
- はじめて「いのちのパン」の執筆を担当しました。子供たちが日々の霊的な糧によっても強められますように（大西良嗣）。
- 今号も奉仕された方々の労苦と、皆様のご加禱を心深く覚えつつ（相馬伸郎）。
- 子供の頃、大人に対して感じていたことを、忘れないでいたいと、ふと思いました（梶浦和樹）。

〈あとがき〉

- 新しい年度を迎えました。教案誌の営みは2001年に始まりましたから、8年目に入ったことになります。皆様に用いていただいて、祈られ、支えられて、教案誌の発行を続けることが許されています。これからも、神と教会に仕えて、この営みに励んで参ります。
- カリキュラム編成は、『子どもカテキズム』に基づく二年サイクルのカリキュラムです。2008年度・2009年度の2年間は、キリスト教教理の学びを中心にした礼拝をささげて参りましょう。神をはめたたえることが子どもたちの信仰と生活の土台となり、柱となるよう、祈り願っています。
- 「諸教派の教会教育事情」を連載いたします。さまざまな教派の教会教育の取り組みを知ることとおして、わたしたちの教会の取り組みについて見つめ直してみたいと願っています。今回は、韓国の大韓イエス教長老会（高神派）を取り上げました。今後、日本の諸教派についても取り上げる予定です。
- 成人料は、今年度、休止させていただきます。ご容赦ください。
- 表紙のイラストは、秩父教会の引間裕子姉の作画です。本文・いのちのパンのイラストには、さまざまな兄弟姉妹のご協力をいただいています。心からの感謝を申し上げます。滋賀摂理教会の信濃郁恵姉は日曜学校の生徒です。子どもたちのイラストをお送りくだされば、掲載いたします。お待ちしております。

〈購読の申し込み〉

- 『教会学校教案誌』をぜひご購入ください。また、別冊『子どもカテキズム』（300円）をぜひお買い求めください。バックナンバーもあります。第24号までは一部500円で販売しています（品切れの号もあり）。

名古屋岩の上传道所 相馬伸郎まで

〒458-0021 名古屋市緑区滝の水2-2012

Tel/Fax. 052-895-6701

☆ 執筆者一覧 ☆

まえがき	辻 幸宏 (大垣伝道所協力牧師)
相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)	石原知弘 (北神戸キリスト伝道所宣教教師)
巻頭説教	相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)
小峯 明 (岐阜加納教会牧師)	分級展開例
教会学校・日曜学校訪問	幼稚科
小峯 明 (岐阜加納教会牧師)	澤谷由美子 (銚子栄光伝道所萌保育園園長)
諸教派の教会教育事情	小学科下級
金起泰 (浜松伝道所協力宣教教師)	恵泉教会教育委員会
聖書研究	小学科上級4・6月
三川栄二 (稲毛海岸教会牧師)	関口津矢子 (松戸小金原教会日曜学校教師)
大西良嗣 (滋賀摂理伝道所宣教教師)	小学科上級5月
赤石純也 (西神伝道所協力牧師)	関口 康 (松戸小金原教会牧師)
大場康司 (恵泉教会牧師)	中学科
羽野浩雪 (古原富士見伝道所宣教教師)	立石 彰 (東仙台教会牧師)
潮田 祐 (花見川教会牧師)	いのちのパン (子ども聖書日課)
吉岡契典 (仙台カナン教会牧師)	4月 山中雄一郎 (板宿教会牧師)
カテキズム研究	5月 大西良嗣 (滋賀摂理伝道所宣教教師)
梶浦和城 (豊明教会牧師)	6月 相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)
松田基教 (高松教会牧師)	イラスト作画
吉田 崇 (坂出飯山教会牧師)	表紙 引間裕子 (秩父教会)
説教展開例	本文・いのちのパン
岩崎 謙 (神港教会牧師)	新海敬造 (名古屋岩の上伝道所)
望月 信 (高蔵寺教会牧師)	山中二三子 (板宿教会)
小野静雄 (多治見教会牧師)	信濃郁恵 (滋賀摂理伝道所)
木下裕也 (名古屋教会牧師)	弓矢容子 (名古屋岩の上伝道所)

☆ 編集部 ☆

相馬伸郎 (長)	名古屋岩の上伝道所宣教教師
木下裕也	名古屋教会牧師
辻 幸宏	大垣伝道所協力牧師
望月 信	高蔵寺教会牧師
梶浦和城	豊明教会牧師

日本キリスト改革派教会 中部中会 『教会学校教案誌』
2008年4・5・6月号 (季刊)
第29号
2008年2月24日発行

発行	日本キリスト改革派教会 中部中会 日曜学校委員会
発行所	日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部 名古屋岩の上伝道所 宣教教師 相馬伸郎 〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012 Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座	00890-2-148183 「伊藤治郎」
編集・印刷	株式会社あるむ 〒460-0012 愛知県名古屋市中区千代田3-1-12 第三記念橋ビル3F
頒価	900円 (本体価格)
